WB 12
40

筆の命毛

914.6
M214h

国立国会図書館　タイトル『筆の命毛』 請求記号 WB12-40

ガラス使用

[illegible]代に知識缺乏せることあり、各世紀の下に一時の[illegible]を彙集し見るは文學史の爲め文明史の爲め治亂史の爲め都て必要ならざる無し、著者日本、支那、西洋に於ける草昧荒唐の代より以て文華放蕩の今に至る數千年間、各百年紀に別ち、毎紀の文學に名ある人物を[illegible]表を作る、[illegible]學者の擧に愧ぢず、勉めたり[illegible]し

[illegible]前東京市私立小學校教育法及維持法取調[illegible]日本教育會の調査せし所、其總論に云く

抑々德川氏二百七十餘年の治世斯風教を維持し[illegible]化を進め吾人をして[illegible]の教育社會あるを得せしめたるものは是れ[illegible]人は之を以て當時の寺子屋と稱したる[illegible]其門下子弟を教養薰育し來りたるの績に[illegible]して當時の教育法たる今日を以て論せば[illegible]は[illegible]て備はらざるものとなすも亦其間自ら一定の秩序ありて裒然として一個の美を特有したること蓋し爭ふべからざる事實なり夫の子弟の關係に於て教育觀察を極めしが如き則ち然りとなす而して教育の方法を見れば器具の備はりたるも[illegible]本や[illegible]

●旅の旅の旅の發句評　何人とも知らされども一に評して送りたるも[illegible]り故に錄す

旅の旅又その旅の秋の風
　記行の題意を述べたるまでなれば此にて好らん

はつきりと行先遠し秋の山
　能くも秋の山を押へられて珍重々々

白露の中にほつかり夜の山
　ほつかり意切れ少しくいかゝ白露の中やに作る穩かならんと思はる

たまされてわるい宿とる夜寒かな
　一茶の帳面に一人とかく寒さか南に及さる遠し

朝寒やちゝみあがりし衣の皺
　句意たしかにて衣の皺とは見付られたる趣向面白し

我なりを見かけてひよの鳴くらしき
ひよ鳥の人を呼ふやら山さびし
　二句共に妙處を探り得す殊に我なりをの一句は游獵の時節になれは函嶺の鴨もいかゝならん

聞たより箱根はやさし草の花
　此句上五字は七字の言廻しにては無用ならん僅か十七字中五字の贅字ありては妙ならす御工夫ありたし

色鳥の聲をそろへて渡るげな
　げなの字野卑の極と思ふ俗談平話之より俳道に妨けなきものは餘り〇〇〇

箱根路やぬれ〳〵したる晝の月
　晝の月の押へたしかならす余も龍膽や碎て白き蛇の衣と云ふ函嶺の舊句あり一粲に供す

秋風やちびて短き旅の杖
　長旅の樣は見やれと少し物足らす

WB12
40
240738
国立国会図書館　タイトル『筆の命毛』　請求記号 WB12-40
ガラス使用

秋の雲龍をはなれて山の上
古調も此に至りて極詣を見る
秋の蚊に病む身さゝるゝ山路かな
病む身とて別に見出されたる趣向ならず
順禮に追こされけり秋の旅
春の旅ならんかどつさりと山褐籠おろす野菊かな
石原に痩せて倒るゝ野菊かな
上の五七字野菊に何の面白きとかある石原の方は少し勝るへし
樵夫二人だまつて霧をあゆはる
殆と神助あるを覺ゆ
犬蓼の花くふ馬や茶の烟
木欒の方見付し所ならん木欒くふ馬の疲けり茶の烟
此も云ふべき歟
虫さきの姉の實つゝく鳥かな
つゝくの字詞つかひ拙し
石あげて野菊花さく力餅
山蛭の力餅賣る薄かな
石あげてとは餘り仰山過きて妙ならす力餅と云ふに唯意を付け刻劃されたれと左のみ手柄も見えす山蛭の方は大に妙
紅葉する木立もなしに山深し
見し儘の景色却て趣あり併し山乘とは覺えす

◉旅の旅の旅の發句評（承前）

赤腹とあだ名や立て紅葉鮒
作意を解し得ず定めて工妙の句ならん
大方はすゝきなりけり秋の山
草刈の刈り揃へけり花薄
への字への字かさなる山の薄哉
此三句短冊に書けす黙取りには五黙もいかゝ少しゝの字を免れす
山がらの薄をのぼる手際哉
此は面白き句なれとも山雀の手際を似す句には浮雲氣あり
伊豆相摸境もわかす花すゝき
黙取句には宗匠次第にて買被るものあらんなれと何處からが伊豆の境ぞ花すゝきと云ふ方好からん
石の上にはへぬ訐りぞ花すゝき
着意當然にして前後に同句意のものあれは別趣向あらまほし
槍立て通る人なし花薄
世間幾變諸侯述職の舊事を追懷し今昔の感を寫し筆力落想共に奇傷を見る春濤先生雨杉風笠と亂雲荒月の詩を見るに似たり
（未完）

鶺鴒や飛失ふて殘る不二
出入りつ薄の山と蘆の海
眼前の景色にても千古の絶唱なるものあり蓼太の荒海を抱えて芥子の盛り哉の如き其景に觸れて言ひ出したるものにて机に倚りて考へては及ひも着かぬ所なるべし余曾て友人より伏見籠城の圖に一賛を乞はれし時此句を思ひ出して適當の賛ならんと言ひし事ありき前に評したる木樵二人の曾什も目に觸れし所を其儘述へられたれど其妙は一黙の理想も着けす巧意をも加へすして寫されしは余か神助あらんと云ひし所なり鶺鴒の句は記中に芙蓉の影を波間に倒にし其邊鶺鴒の飛ひ來ふより蓼影の搖蕩し鳥影の聯翩たる其景の面白きより着想し鶺鴒に不二の大岳を反襯したるは手際の樣なれど其妙を窺ひ得す偖ては曾我兄弟の祠もありて其人は失せたれど不二は依然千秋の雪を戴きて屹立するとの寓意抔ありもせん歟と考へたれどそは少し聞及ひぬ理屈もあり記中の景を云はれしなれは余か想像にも着かす只記を以て當推了を爲すのみ又飛ひ失ふの語自他の別なし
次の句は薄の山蘆の海と云ふは文字より見付出されし樣なれど海と湖と違ふ御趣向と拜見せり
箱根山薄八里と申さばや
左樣て御座るかと申すまてなり併し句は能く調ひたり
くちをしふ老にけらしな烟草
烟草二三服吸ひ句意を考へたれど烟の如し

少しつゝ洗ひ減すやかはり菜
黙取には得の句なり
面白やどの橋からも秋の不二
是は見付られたり其趣向不二と共に高し
ぬかつけはひよ鳥鳴くやとこゝやら
ぬかつけとひよ鳥鳴くとは妙なる仕掛けに出來たるものかな余拍手の衍に淋し秋の蟬と云ふは固より面白くはなけれど少しは慥かならん
わし高は家にかくれて不二の山
蒼虬の句を忘れたりと云ゝされたれど蒼虬の句は超凡なり何となれは低きわし高の日に見ゆれど高き不二は雲抔にかくれて見えぬとの意なれはなり低きものゝかくれて高きものゝ見ゆるは當然なり今わし高不二の山と云ふ同字あるを以て言譯あれど是は御愛敬のある丈け嘸かし蒼虬も迷惑ならん
乘合の馬車酒くさき殘暑可南
蒼虬の句も相似たる言譯もある程の抱負にて此句は何事ぞ余も論高して手低しとは申さす左れど少し高からぬ樣覺ゆるなり
鶺鴒や此笠たゝくことなかれ
前に鶺鴒の句を不理屈に並らべたれど此鶺鴒は無限の感慨を十七字中に寫し出し百回續を厭はす世の宗匠を以て自ら任す木の葉天狗抔中々隻字片言を得る能はす發句も是に至て能事畢る
（未完）

国立国会図書館　タイトル『筆の命毛』　請求記号 WB12-40
ガラス使用

●旅の旅の旅の句評（續）

水晶のいはほに蔦の錦かな
奇麗〳〵西村總右衛門が友禪染も及ばざるべし

一日は鳴子も引かす村まつり
旅人や花車に紛るゝ村まつり

黙取句にてもすら捧の仲間後の句中七字改めなは可ならん乎斯る句は大方忘れられてこそ珍重なれ

水はねる添水のまねを尾花かな
刈稻をふしも一つに暮れにけり

山村晩歸の景能くも寫し出されたり

枯れ柴に喰ひ入る秋のほたる哉
草の根に喰ひ入る秋の蛍かなと云ふ余か舊句あり喰ひ入るとは捜し出したる樣當時は覺えたれど先つ共に黙取句は免れざる調子なり

闇の鴈手のひら渡る峠かな
闇の峠越し杯には多く有る樣ならんか造語自ら妙なり

きりぎりすのからてたく湯や山の宿
山家の眞趣玉章玉田杯の粉本にすべし

鼻垂の兄と呼はるゝ夜寒哉
のはに作るべき主客の別はつきりせす他日は博士となるべき人を鼻垂の兄と呼はるゝ杯は旅の氣散し

秋の海名もなき島のあらはるゝ
縹渺の致ありて慥に秋の海と見ゆ

草鞋の緒きれてよりこむ薄かな
川一ト筋風一ト筋の薄かな

共に一趣向ありて尋常の窠臼に墮ちず

末枯や覺束なくも女郎花
主人曾て古人の女郎花を詠しものを抄出して品評されしが此句も一字苟くもせす上五七字其神を寫し刻劃の痕を化盡す古人の秀句と伯仲の間にあり其妙の如きは余か輩之を贊する能はす蓋し悟入して此に至られしは其秘訣こそ聞きほしけれ

余六日所載の句を評せんとし考ふるに僅か黙取句の半年位やりし腕にて人の句を評するは固より嗚呼の事にて耻しき限りなれは何の流派も心得ぬ出放題の評なとはちと邪道のため遠慮すべきことゝ悟りて見れは夢の覺めたる如にてすゝめぬを人のこゝろや馥と汁と初て本心に返りたれは余か好む所に適したるものを抄評せり作者請ふ恕せよ

（完）

●はてしらずの記（八）　子規子

此伏家こそ君の起き臥しゝ給ひしところ、此狹庭こそ君とかたらひあかせしかたみなれ。今は都の方に榮耀を盡し給ふ玉のうてな錦の茵よりも猶わが爲に尊きこの伏屋この狹庭は昔のまゝながら再び歸らぬ其主の御姿は蚊遣の煙のほのかにも見え給はず。せめてはと空しく頼むうたゝねの夢だに今は結び得ぬ心許りは幾千里都の空と志せども朱門奥深くして其御殿をも聞き參らす事いと難かり。去る者日に疎からで別れにし人かくまでなつかしきを御佛もいかで知り給はざらん此世の思ひ出に今一目こそ御姿を拜み參らせたき切なき願ひをかなへ給へと日々觀世音にぞ詣でける。滿願の日夢ともなくうつゝともなく此の山の頂に大なる石あり麥の葉もて其石の面を摺りなば其願ひかなふべしとのくしき告げありければいそぎ山の上に登り麥もて石を撫づるにあやしや左大臣の御姿露違はずあり〳〵と石の面にこそ現はれ給ひたれ。孝子は石を射透し節婦は石にも化したりとかや今君の御姿を見るうれしさ日毎ここにまう來て何事をかかたらひけん。左大臣遙かに此事を聞しめされいとあはれに思ひつゞけられて

みちのくのしのぶもぢ摺たれもゆゑに
みだれそめにしわれならなくに

る國言葉など覺え給ふめり。みちのくのとふの菅菰七ふたへも三ふたへもいひし今さらに末の松山波こゆるとも袖ぢに伏屋に雨漏らさじと契り給ひつ契られつはかなきことをたのみにて忘るとはなく忘れにし都の方より音づれ急の御使といふに先づ耳を驚かせり。都にては君の東へ下り給ひし頃より政亂れて世の中兎角に騒がしくもとしまなる人の時得がほなるに上にはかしこくも君の御事のみおぼしつゞけられ早く都へ歸れとの勅承りてこれまでこそ參りたれ。いそぎのぼらせ給ひて玉のうてなに昔の夢をかへし給へとぞ告げにける。左大臣聞くより嬉しさは限りなく魂ははや九重の下に飛び歸りにし心地すれどさすがにこのうき年月をしたしくかたらひし假りの契りの今となりて十綱の橋にくる綱の中絶えなんも心もとなくしばしはためらひ給ひしかどくしき告げありければいそぎ山の上に登り麥もて石を撫づるにあやしや左大臣の御姿露違はずあり〳〵と石の面にこそ現はれ給ひたれ。孝子は石を射透し節婦は石にも化したりとかや今君の御姿を見るうれしさ日毎ここにまう來て何事をかかたらひけん。左大臣遙かに此事を聞しめされいとあはれに思ひつゞけられて

みちのくのしのぶもぢ摺たれもゆゑに
みだれそめにしわれならなくに

国立国会図書館　タイトル『筆の命毛』　請求記号 WB12-40
ガラス使用

かくなん詠み給ひける。さて時うつり世變りて後も親に別れ夫に別れ妻子に別れし者あどの皆こゝに詣で來て麥もて石を摺りつゝ再會をぞ祈りける。ところの農民等麥畑をあらさるゝを憤り山に上りて彼石を突き落しけるに石は麓に轉け落ちて左大臣の像はうつぶせになり年月の久しき石は土に埋められて僅かに其角を現はし居れりとぞ。

蕉翁の紀行にも「山陰の小里に石半は土に埋てあり」云云と見えたれば元祿の昔より此の有樣にこそありけめさるをさきつ年某の殿此口碑を信じて數多の人夫を遣り此石を掘り起さしむるにもと小山の如き大石なればいよ〳〵掘ればいよ〳〵大きく迚も人力の動かすべきにもあらねば今はもてあまし中頃にして其工事を止めしも石は大方露はれ出で柵もて今の如く結ひめぐらせしに昔の趣を損ひたりとて雅人は歎きぬ。

實は此國昔より帛を獻ずるの例なりしをたゞ白き許りも與なしとて一年紋形のつきたる石を拾ひ來り信夫山の苔草を採りて之を帛に摺り試みに公に奉りしにいたく御感に預かりしかばそれより年々の例となり此地の名物とて今に殘り居るなり。其紋形の石とは化石の類ひなりといふ。ある人の化石とは面白からず唯口碑のまゝにこそありたけれと語りしもいとをかし。

明治廿七年十月

日光の紅葉

子規子

春の花は見るが野暮なり、秋の紅葉は見ぬが野暮なりと獨り合點をこしらへて其言ひわけに今年は日光の紅葉狩にと思ひ付きぬ。先づ鳴雪翁をおとづれてしかん〳〵のよしをいへば翁病の床より飛び起きて我も行かんと勇み給ふ。さらば思ひ立つ日を吉日として上野より滊車を驅り宇都宮に一泊せし日は朝來の大雨盆を傾けていつ晴るべしとも知らぬに何が吉日ぞ。こゝはいくさの跡とてはたでやはまだ何となく騷がしきに强ひて一夜の憐を請ふて木枕の痕を頭にぞ殘しける。

木枕に惟然泣く夜の長さかな

翁は腹痛みて終夜眠り給はざりしとて曉に余を呼び醒まし

若人をゆり起したる夜長かな　鳴雪

など戲れ給ふ。一番の滊車にて日光に行く。空は一面に曇りたれども雨は降らず。東の方地平線上に一筋の薄明りこそ唯一の賴みなりけれ。車上にて

露吹くや小籔の中の芋畑　鳴雪

と詠み出でられたる雅淡にして幽趣あり。元祿以後の作とは見えず。日光町に着きたる頃は一天晴れ渡りて朝日は小倉山の薄紅葉に映じ出だせるにうれしく

二荒や紅葉〳〵の山かつら

翁は下駄を拾てゝ何十年目の草鞋をはき試み東海道の昔を忍び給ふけしきなり。

先生の草鞋も見たり紅葉狩

おとげたる句に興を催しつゝ大谷川を渡り含滿を左に見大日堂を右に見て行くに山々の紅葉薄く濃く打ち重なり其間の谷底を一水蜿蜒として蛇行斗折するさま錦繡帳裡に白龍を躍らすが如し。一步々々山幽にして景更に奇なり。かくては華嚴の風光は如何ばかりならんと云へば翁も頷き給ふ。路傍に一本の杖を求めて

日光は杖にする木も紅葉かな

馬返しより上は山險にして水急なり。紅葉青山水急流とはかゝる處にやあらん。今迄は四山稍遠ければ恰も油畫の秋山を見るが如く淡彩濃抹模糊として四方を圍みしも今は我身さへ紅葉堆裡に埋もれ向ふの絶壁に危うく生ひたる紅葉も皆手に取るばかり近く土佐流光琳派の畫中に彷徨するの思ひあり。

岩山やさけめ〳〵の薄紅葉　鳴雪

すがりつく蔦もかつらも紅葉かな　同

面白や一尺の木も櫨紅葉

日光に紅葉せぬ木はなかりけり

岩はなに見わげ見下す紅葉かな

牛の子を追ひ〳〵はいる紅葉かな

道二つ馬子ときこりの紅葉かな

翁昔　おもかげな見ゆる續と　馬と油みうら派

国立国会図書館　タイトル『筆の命毛』　請求記号 WB12-40

ガラス使用

千仞の絶壁すさまじきほどに紅葉滿ち〳〵たるに上臈の駕籠にめして危き岨をほい〳〵と度るさま側の見る目さへくるめく許りなり。

岨道を横に駕籠かく紅葉かな　鳴雪

山かごの空からくるやむら紅葉

茶屋の軒下に立ちて見れば紅葉の山に瀧二筋般若方等はこれなり。

紅葉より瀧ちる谷間〳〵かな

中の茶屋はるかに見えて紅葉かな　鳴雪

中の茶屋に來て憩ふ。

一つかみづゝ爐にくべる紅葉かな

新道舊道相錯綜して分ち難し。駕籠舁に敎へられて近道を上るに翁の健足に追ひつきかねて遙かに阪の上を見上ぐれば翁は木の根に腰かけて發句やらん書きつけなどし給ふ。

かごかきの熱い息ふく紅葉かな

華嚴の壯觀を目あてに襦袢の汗水を山阪の名殘に留めてそこまで辿り來たり。紅葉の間をくねり〳〵て流れ來る川一筋、谷盡くると見れば忽ち倒まに落とす瀑布三千丈、水煙さと立ちて落ちこむ岩だに見えず。

千丈の瀧の岩間やむら紅葉　非風

いふ友人の句のみ口に浮びて發句などおもひもよらず

雲間より瀧の落ちくる紅葉かな　鳴雪

湖を瀧におとすやむら紅葉　同

などゝものされたる翁の筆力また恐ろし。

紅葉見え瀧見える茶屋の床几かな

紅葉出て落ちこむ瀧や霧の中

秋の山瀧を殘して紅葉かな

など中々にいふだけが蛇足なり。中禪寺湖に至れば錦繡の屏風の中に磨ぎ出だせる一面の鏡、龍田姫の化粧道具うつくし。

湖をとりまく〳〵山の紅葉かな

中宮祠

神殿の御格子おろす紅葉かな

石壇や一つ〳〵に散紅葉

引き返して日光に歸るに固より同じ道筋なれど見上げたるけしきは見下したるながめに異なり苦しんで見るは樂しんで見ると異なり朝日のいさましきは夕日のあはれなるに異なりてひねもす倦むことも知らず。

絶壁に夕日うらてる紅葉かな

裏表きらり〳〵と散紅葉

山いくつ日のてりわける紅葉かな

歸る人毎に紅葉一枝の夕日を荷ひて宵月の尾の上にかかる頃日光町に着きたり。

つぐの日東照廟大猷廟に詣づ。結構の美今更に言はず

ふくつきを守り申すやむら紅葉　鳴雪

神杉や三百年の蔦紅葉

からかねの鑄ぬきの門や薄紅葉

華嚴の瀧のほとりにて手折れる一枝の紅葉を都への家土産にとて携へ日光停車場に至れば一群の紅粧來りて一枝の秋色を請ふ。折りて與へたれば之を分けて各髻邊に插む。此好題目のがすべからずと翁の嘆れ給ふに

薄紅葉紅にそめよとあたへけり

つきづきしからぬを人や笑はんとて大に笑ふ。車中にて逢ふ人日光の紅葉を問ふ。翁曰く天下の絶勝なり。かの人又いふ。京に三美あり、上野二州に鹽原碓氷霧積の諸勝あり、其優劣は如何にやあらん。翁曰く天下の諸勝は固より知らねども或は規摸小にして日光の大觀なく或は此大觀あるも此の如き溪流と瀑布と大湖と無かるべし。されば山水の勝を兼ねて此變幻と此壯觀とを具し而して白雲紅葉の色彩を施す者恐らくは日光諸山の美に過ぎたるはなからんと。かの人諾す。日光紅葉を見るの記を作る。

国立国会図書館　タイトル『筆の命毛』　請求記号 WB12-40

ガラス使用

若草や京をはなるゝ旅の人　非風
若草や三笠の野邊を御狩場　同
若草や土手に忘れし女下駄　木同
若草や花見小袖を染むる頃　古白
艶なる處を見つけられたるものかな。
若草や立臼の陰の日のぬくみ　松宇
若草に乞食が家の寄麗なり　同
若草や屋敷のあとの鬼瓦　木同
若草や門は葎ほす柳陰　古白
色々に探し出だされたり。
若草や劍で薙だあとよりも　松宇
若草や率分堂の庭の前　非風
奇想天外より落ちて人を驚かす。
若草や汐のとゝかぬ洲先まで　古白
若草やすてゝ行く旅の夢いくつ　風亭
色がはりの句それだけにいとをかし。

●蛙のはなむけ

溝河に生れて泥田に游ぶはふつゝかなる身を清水に見すかされじとの用心にやあらん。貫之は彼れを鑒とならべて大和歌人に數へ道風はこれを見て千古の書家となる。はた芭蕉に飛びこむ所を見つけられて斯道の玄を示せしばかりもこよなき身の譽れなるに朝より晩迄古井戸の中に啼き立てゝ天地狹しと笑はるゝ事のみこそ口をしけれ。彼れが智は足らずとも戰爭の勇は蛙合戰と世にもてはやされしにそれだにはしなく三百の諢名をかぶり日比谷は鼓吹の名所となりて井出の玉川の上に出でたるも多辯の罰なるべし。そも此蛙合戰の顚末は先づ田地の所有となり

田一枚もてば春々と鳴く蛙　可都里

選擧競爭となり

いくすべり骨折る岸の蛙かな　去來

それに勝てば天下の豪傑となり

蛙子や利口になるとやかましき　溪花

いざ開會といふ時先を爭ふての上京となり

飛顏に分別見えぬ蛙かな　鳥醉

一思案出來て飛びこむ蛙かな　雞山

歲費の請取となり

啼く口へ花のちりこむ蛙かな　柳居

国立国会図書館　タイトル『筆の命毛』 請求記号 WB12-40
ガラス使用

百般の議事となり
結構な日を鳴きくらす蛙かな　乙由
歌いくさ文武二道の蛙かな　正章
握殺となり
最ちつとに成て流るゝ蛙かな　麻父
賄賂となり
蜂のんでおのれとなやむ蛙かな　和賤
上奏案となり
手をついて歌申しあぐる蛙かな　宗鑑
某黨の强がりとなり
雨の蛙聲高になるも哀れなり　素堂
めでたくこゝに閉會となる。
啼きやめばがくりと淋し蛙時　素檗

謹賀新年
東京市京橋區本村木町三丁目
千壽製紙會社
電話番號四百十七番

謹賀新年
東京麹町區三番町六十三番地
明治廿六年一月一日
岡精逸

熊本へ旅行中に付年賀の禮を欠く
小中村義象

殘志未遂欠新聘
拜趨之禮
佐久間秀修

病人アリ小生亦嫌病中ニ付本年ハ
遠近親友ニ一切年始ノ禮ヲ缺ク
西郵貞

業務多忙ニ付
山下敦禮

賀新年
代言人
磯部四郎

賀新年
代言人
井本常

賀新年
代言人
豐田鉦三郎

賀新年
代言人
高橋庄之助

賀新年
代言人
久保田與四郎

賀新年
代言人
桑田房吉

賀新年
代言人
山口憲

賀新年
代言人
町井鉄之助

賀新年
代言人
齋藤孝治

賀新年
代言人
宮城浩蔵

国立国会図書館　タイトル『筆の命毛』　請求記号 WB12-40
ガラス使用

明治廿六年

くにぶり

武藏　鐘一つ賣れぬ日はなし江戸の春　其角
山城　正月やみやこの町に松の聲　闌更
大和　芳野とて別の春なし花の春　士朗
河内　春立て二日霞の生駒山　大江丸
和泉　傀儡師しの田の森にいりにけり　梅室
攝津　我家もことに住吉松の春　貞賀
伊勢　元日やひとゝ生れて伊勢のくに　丘高
志摩　柳ふく伊良古渡もよかるべし　道彦
尾張　春風の夜は鳴海へもどりけり　夢南
三河　萬歳や十三文の足拍子　存義
遠江　蓬萊に濱名の橋もあらまほし　吏牛
駿河　猿曳の猿ありかするうつのやま　西月
甲斐　うら富士や夕飯ころの春かすみ　一草
伊豆　三島江や明けてもつきの朧なる　寥松
相摸　千代もこゝんわが蓬萊は箱根山　大江丸
安房　あれなるが安房の岬か春の雪　白雄
上總　履はかぬ人うらゝかに浦づたひ　巣居
下總　かた影に田鶴の並ふや下總東風　道彦
常陸　春立つや見ふるしたれど筑波山　一茶
近江　雖六のゆめを大津に明のはる　顧言
美濃　元日に誰れかこえゆく不破の關　小春
信濃　春立つや木曾路を下る鏡磨　慈竹

上野　正月の言葉にはやし小暮村　嵐兆
下野　陽炎や那須野の石に今も立つ　鐘下
奥州　我戀の松島もさぞ初霞　西鶴
出羽　裏白もある山中の若菜かな　乙二
若狹　初春や年は若狹の白比丘尼　前川
越前　豊年や越のみ空も朝かすみ　昌休
加賀　心より立つや白嶺の春霞　樗良
能登　すゝの海の春や神代の朝ひらけ　宗碩
越中　鶯のふりむくかたや有磯海　草均
越後　井のもとや莖立摘まん寺泊り　白雄
播磨　高砂の松に寢たかよ初鴉　古鯪
備前　夕汐の引てあとなき霞かな　羅風
安藝　佐保姫の裾ひく汐や嚴島　雉啄
周防　五百壇のほり〳〵て明の春　才丸
丹波　春や祝ふ丹波の鹿も歸るとて　去來
丹後　橋立や松あればこそ八重霞　荊玉
石見　雪汁の清水の山の金柄杓　篤老
紀伊　元日は和歌の浦にて箸とりぬ　蕉雨
淡路　蓬萊に眼をかよはすや淡路島　青羅
阿波　春なれや阿波の鳴門に傀儡師　失名
伊豫　三島江や水影の柳旭さす　大江丸
土佐　貫之は土佐にしばら梅の花　無國
筑紫　春立や背振は雪のふりながら　九梁

●三方旅行　三

到れり〳〵三方の報、前後櫛比して大に到れり、あたら一頁五百十五行の好山川、三欄までを割與して尚ほ足らず、此勢にてあとより到らば、あすもあさつても彌やあさつても尚ほ絶えじ、恐ろしや

第一群

金衣公子
水晶花兒

天は寥廓、地は肅殺、野花閑草は四郊に滿ち孤鶴寒雁は雲際に横ふ、正に是れ墨肥え筆鳴りて中原文を用うるの時にあらずや、恰も好し三方旅行の嚴命は編輯局に下りて秋季皇靈祭日を以て將さに一戰を試みんとす此日午前八時盥漱束裝し車を驅り本社に出づれば編輯局は已に人もて充たされ大將軍は三軍を部署して訓令する所あり、進軍の令は發しき、大將軍階下に降りて節鉞を與ふれば三方の將帥は勇氣凛々として早く已に三方に別れ去る、而して我一群は萬世橋を發し俗界を後にして吾妻橋に達すれば已に身は悠然として天然界の域中に彷徨せり。

水なる哉水なる哉、水なるものは天地間、德の至大なるものにして機の至變なるものなり、德や以て萬物を霑ふすに足り機や以て萬物を汨するに足る、水能く舟を載せ又能く舟を覆すも亦此意に外ならんや、而して水なるものは其德其機の至大至變なるのみならず亦其觀の最美なるものなり、彼の洋々として千里に流れ富峰を鏡中に涵し筑波を畫裡に寫し江東は櫻樹十里に連なり江西は樓閣千戸を接す、微風吹かずして三四の都鳥は細漣を動かし淡煙江を籠めて丿へたる漁舟は蘆花に出沒す、此の如きは墨水の勝にあらずや、東都此水を得て以て其觀を添へ此水東都を得て以て其美を加ふ天と人と合する所豈偶然ならんや、而して水の効用に至りては更に之より大なる者あり、此川や源を秩父山中に發し九郡を經過し武藏野の平原八百里其半を霑ふするは固よりも言はず、其運輸交通に至便を供して利用厚生の道を成さしむる者其恩澤の及ぶ所豈少小ならんや、曩きには美觀として眺めたる漁舟は是れ老翁が一家を資するの業なり、雅致を以て賞したる布帆も是れ都人百萬の爲に瓦石を輸し材木を運ぶ者に外ならざるなり、俗子眞理を解せず漫に天と人を區別して二樣に說き去る抑も亦卑なりと言終つて金衣公子得意の色あり、水晶花兒亦相見て微笑を漏らすのみ。

闇判子云く、神田より吾妻橋に至る二十餘町、道程亦長からずとせず、而るに金衣水晶二將のこゝを通過する盲目の道中をするが如く、闇夜に犢を曳出すが如く、市陌に羅れる千紫萬紅、僕不關を謳ひてのそり〳〵と濶歩し去り、吾妻橋に至りて先つ筆を著く、天然界の將軍たるに恥ちず。

国立国会図書館　タイトル『筆の命毛』　請求記号 WB12-40
ガラス使用

長堤歩して半を過ぎ白鬚祠前より轉して百花園に達す此園の妙は自然と人工の調和に在り、野にして野ならす園にして園ならず、百種の秋草は僅かに數條の細徑を殘して眞盛りに咲き亂れたり、人なき叢中孤亭を占領して第一密封訓令を開封すれば其令に曰く

金衣公子は能ふだけ草花の名を記し且つ一々其姿態趣致を品すべし

水晶花兒は七首の句を以て七種の花卉を品すべし

金衣曰く嗚呼是れ大任なり、園中の草花若し一々に其名を記さば百種に上れり、又一々其姿態趣致を品しなば半日の觀察安んぞ其精を得べけんや、水晶曰く萬葉の所謂七草なる者は芽子、尾花、葛花、瞿麥、女郎花藤袴、朝貌の七種なれども葛花は時おくれて且つ趣致の見るべきなし、瞿麥は夏期に屬し藤袴は蘭とも書きて其物甚だ紛らはし、我新たに七草を撰んで附するに「七なり」の句を以てせん。

萩　萩の中に猶白萩のあはれなり
尾花　人や招く狐の尾花そよぐなり
女郎花　女郎花昔の人の姿なり
朝貌　朝貌やあるじの外は知らぬなり
桔梗　桔梗折る妹が手もとのたゆげなり
紫蕨　淋しさを猶も紫蕨のびるなり
雁來紅　葉雞頭や老菜の家奇麗なり

闘判子云く、奇思なる哉水晶花兒や、靈心なる哉水晶花兒や、憶艮の七草は花夏秋に渉りて、一時に看るを得ず、祭星の七草は跡陳套に歸して、詩思を動かすに足らず、花兒今ま百花の園中に就き新たに其七を尋ね、即ち撰み即ち賦す、曹子建が七歩の歌、未だ美を前に擅にするに足らず、一群の兵勢これに於てか大に振ふを見る。

第一群（二）　金衣公子　水晶花兒

金衣公子傍より贊して曰く萩の中に猶白萩といへるはそのめでたさ春畝首相の有樣に比すべきか、朝顏やあるじの外は知らずと云へるは平生獨合點の趣ある黒田伯に比すべきか、女郎花云々は何となく陸奥君の技倆多きさまに似たり、招く狐の尾花とは高輪伯の心情にやと思はれ、淋しさに紫蕨のことにのびるは大隈伯の近狀に似つかはし、桔梗折る手元のたゆけは大山伯、葉雞頭や老菜の家とは板垣伯の近狀に類せずや、其外地楡のしやんとしたるは軟派中の硬派ともいふべく紅蓼の亂れて垂れたるは軟派中の軟派にやあらん、麥穂の尾花に似て非なる男郎花の女郎花をまねて色を異にする世自ら其人あるべし、葛の蔓縁して花を咲きたるは青雲の電信に似て野分のあと蔓東なく、秋海棠の痩せ度て石陰に行めるは多恨の才子に類して雨の朝しと哀れなり、野菊は田野に棲息する遺賢の趣ありて面白く鬼灯は殿より心まで赤き忠義の臣にもたとふべくして尤めでたし、猶金線草、藤袴、曼陀羅、濱荻、澤桔梗、珍珠菜、萱、秋葵、龍葵、金唐瓜、錦茘枝等一々に盡すべきにもあらずと云へば花兒亦好と頷けり。

闘判子云く、金衣公子の天人同致論は忽ち復た百花の裏の百花の上に發し、人を以て花に比し、花を以て人に擬し、讀者をして惘然として人の花たる花の人たるを知らざらしむ、東湖が墨堤春興の即事に云く「人や花花や人かとあやまたる櫻かざして歸る手弱女」と、余も亦公子の品隲に於てかこれを見る、妙なる哉。

百花園を出で更に墨陀に沿ふて遡れば堤上の茶店寂寥として人なく空しく秋草の鎖すに任す、處々糸瓜の棚崩れんとして長き實のぶらりと下りたるは野趣ありて五條あたりの夕顏の面影にも似たるべし、堤の左側幾多の家居並びて白帆は殆んど見るへからず始めて墨水に遠ざかる事を知る、而して向嶋の光景此に至りて盡きたりといふも可なり、是れ豈向嶋改良策の訓令ある所以にあらずや、先づ此地の美觀を添へんと欲せば第一に寺島近傍河流に沿ひたる田野草原を掘り毀ちて以て河幅を廣げ堤と川と相接し花と水と相映せしむるに在るなり、抑〻墨水の絶勝にして缺く所ろの者一あり何ぞや、水ありて山なきの一事なり、見よ待乳山の如き一塊の小邱も亦た以て向嶋の爲に無上の必要物たるにあらずや、されば前の如くして掘り崩したる土は之を河幅廣き處の中央に集めて大小の二嶋を築き之に栽うるに樹木を以てし更に二嶋を連絡するに欄干を以てし擬寶珠とを備へたる古風の木橋を以てすべきなり、島の名は月島雪島と別々に稱するも可なり、錦島と總稱するも亦可なり、而して川の西岸に連なる人家に命じて一般に垂楊垂柳を栽ゑしむべし、然らば則ち歌人は以て都の錦島と歌ふべく詩人は以て江西楊柳江東花と吟じて以て錦都の勝を現はすを得べきなり、若し夫れ製革場、紡績所、凌雲閣、艇庫等の惡觀を除却するが如き消極的問題に至りては俗界と相關する者なれば姑らく之を措かん、金公衣子曰く設計略々此の如し、然れども斯く許りにて已みなば是れ佛を造つて魂を入れざる者なり、此島中に祭るに外國に關係ある豪傑を以てするは最上策に非ずや、神功皇后の事はかしこければ言はず、豊臣秀吉を祭るも可なり、山田長政を祭るも可なり、或は數多の人を合祀するも亦可なり、此の如くにして美觀は以て愛國心を養ふの具となり愛國心は亦美觀の爲に人の感情を刺激する事多かるべし、一國を治むるの事概ね此の如くならざる可んやと、花兒亦唯々。

国立国会図書館　タイトル『筆の命毛』　請求記号 WB12-40
ガラス使用

閻判子云く、堤下の堆土を一掃し、其土を以て錦帳を築くの大策は謹て命を聽く、但だ其帳上に神功皇后を始め外征有勳の名將など祭り奉るは如何があらん、畏こかれども、息長足姫尊の御姿は、吾ともの折り〳〵かいまみて、而も手に取る能はざる紙の上にて拝むが多かれば、斯る御靈を齋き祭らば、紳の字戴く士商の車馬忽ち此に集ひ來て、夫の不忍池の天女祠の庭、或る大臣の寄り〳〵ならせ玉ふが爲に車馬の蹂躙に任すが如き災厄は忽ち出で來るん去らずば「無位曾無黄金輩不可入」と云が如き掲示の榜の建ちもやせん、其より寧ろ此には靈驗最も灼しき貧乏神と厄病神とを合殿に安置し奉り、紳士紳商と覽そなはさば、七代までも貧を授け厄を得させんとの畏き弘誓を發し玉はんことを求めたし、斯からんには百代不易、帳は吾とも吾子孫の遊賞をば失はじ、金衣の公子は公子たけに、茲まで思ひの到らぬにや。

化粧せんとするの思ひあり、天然界の名物此煙靄に非ずして何ぞ。

閻判子云く、夫子厄に珍菜の間に會ふ、其窮想ふ可し、然れど笑して迫らず、困じて亂れず、亦彼の子八同致の説を將ゐ來り、烟を吸ひ霞を喰ひて腹の便々に誇り、神の超々を示し、其間だ未だ嘗て早まり食せし蜆汁の臭氣を噯噫にも出さず、嗚呼天徳を二君になせり、閻判それ君を奈何せん。

八車を驅り火車を馳せて上野より王子に赴く、其方面の廣き事第一群を以て最となす、飛鳥山に上りて眺望を擅まゝにし老婆を呼んで名勝を問ふ、蓋し王子の八景を撰出せんと欲するなり、王子素と郭外の孤村百戸の邑のみ、而して八個の景勝を選ぶ、是れ亦難題たるを免れず、公子一景を選べば花兒一勝を擧ぐ、漸く五六を得て未だ二三を得ず、乃ち老婆を呼んで問ふて曰く此邊應に晩鐘を撞くの寺あるべし、請ふ其名を聞かん、婆頤を支ふること少時曰く有る無しと、又問て曰く此を距る遠きも可なり、強て其名を聞かん、婆曰く知らずと、是に於て題目を瀟湘の八景に取るの非なるを悟る、依りて八景を撰んで曰く

飛鳥櫻花　花咲てけふや飛鳥の春七日
大塚夕照　野開きて夕日のどかに八百里
豊嶋歸帆　若葉して白帆つらなる川一筋
權現森夜雨　聞て居て涼しや闇の雨三更
瀧川紅葉　紅葉して錦に埋む家二軒
狐廟秋月　月滿ちて小豆の飯に芋一串
神宮落雁　雁落ちて冬田に崩す一文字
筑波暮雪　雪晴れて筑波我を去ること三尺

閻判子云く、掌天の乾坤に八景を現し、八景の風光に八首を題す、何ぞ其の自在なる、曰く七日、曰く八百里、曰く一筋、曰く三更、曰く二軒、曰く一串、曰く一文字、曰く三尺、亦何ぞ其の奇想なる、審判漢長讀んで此に至れば、亦其一二三四五六七八誦するを覺えず。

八景撰び終れば時漸やく晡に近づき、晩鴉啞々として空林に歸り、蒼然たる暮色は遠くより來りて壑舟と爲

第一群（二）

金衣公子
水晶花兒

更に墨堤を下りて今戸の渡に到る、彼岸參りの老爺老婆は七草見物の紳士令嬢と共に群がり來りて渡舟の中甚だ賑はし、舟彼岸に着けば密封訓令の第二號を披くの時は來りたり、謹んで開封すれば

名物を求めて之を食すべし名物は平板なる者を避け勉めて珍奇の者に就くべし

開封以前に食したる名物は無効とす

名物は何處にて食するも可なり再び後に引き返すも妨げなし然れども糧食の故を以て逗撓するは軍機を誤るの恐れあり將軍の爲に取らざるなり

と嗚呼是れ何たる訓令ぞや、徒らに余等を苦めんとする者なり、芋に鯉汁は今更に功を奏するに由なく、櫻餅に言問團子は空しく對岸の垂涎となる、然れども是等の難題は終に河童の何とかの如きのみ、根本鶴屋の米饅頭は古きもの、本に殘りて其影を隱し、鯉の大七有明櫻はいづくの程にや今は跡かたをも留めず、今戸橋の紫蘇巻は猶ほ名物たるを失はねども終に是れ平板臭俗の者のみ、公子花兒の口に上るべくもあらず、二人相携へて眞乳山に上り、社頭に踞して四方を見れば、墨江は長うして帶の如く波光樹間に激灩たり、牛島は黒うして牛の如く江上の白帆と相掩映す、余等今ま此好風景に對して烟を吸ひ霞を喰ふ、腹滿ち心爽にして羽

国立国会図書館　タイトル『筆の命毛』　請求記号 WB12-40
ガラス使用

りぬ、此景此時此人今や凝然として一塊物に歸し、天地も一のみ山川も一のみ草木も一のみ、瞑想の極は我れ我れを知らず、公子は花見か花見は公子か、相對して たゞ默殺するのみ、而して此間自ら栩々然たる樂の窮むべからざるものあるなり、少焉らくありて花見慨然として歎じて曰く、今日の戰ひ午の前後を算すれば殆んど八時間に亘る、而も奏する所の功や偉大なるにあらず、策する所ろの勳や奇異なるにあらず、自ら顧みて五十年の人生に連想せば、他年の今日を見ること猶ほ今日の事に不滿なるがごとくならん、人生も亦た憐むべからずや、公子も亦た强ひて自ら寬うし、且つ他を慰めて曰く、奇勳偉功の奏し得ざる、恨は則ち恨なりと雖も、畢竟するに又た未だ年少の空想を全く排却し能はざるに依らんのみ、若し年少空想の成らざる と慨する、子の今日の無功を悔ゆるが如くならしめば 元も亦た足らざるにあらずや、余等をして天然界に進軍せしむるは、想ふに一は此の病根を斷たしむるにやあらん、一般の令と密封訓令とを正直に遵奉して、其命を辱しむること無くんば、假令功勳の特賞すべきものあらざるも、豈に罪責の身に至るあるべけん、得る所を記して歸りて之を報せば亦た可ならんのみ、花見頷く所あるものゝ如し、依りて相携へて山を下り歸路に就く、歸來すれば日光軒に滿ち蟲聲階に滿ち、又た戰勝を視するものに似たり、此意無人識、悠然忘毀譽、花見と公子と其の名異なりと雖とも、兩家の興味は思ふに二致あらざるべし、若し夫れ功の賞せらるゝと否とは、始めより余等の關する所にあらず。

あたらしき此さびしさや花のはる
あたゝかになるか嬉しき花のはる
庵の春二日の夜より更けにけり
遊ぶにはたらずさむさの梅若菜
一日も拾る日は無し梅のはな
出たければ出る夜が出來て梅の花
出て見れば花はるは柳に取られけり
鶯の心になつて聞きにけり
寐は寐てもすむ身をはるの朝雀
ありく間に忘れし春のさむさかな

元祿時代にも道具立ての句は少けれども彼等は一題の範圍内に於ては十分に實形的の變化を極めたり。例へば

尾頭のこゝろもとなきなまこかな　去來

といふ句の如きも尾頭の二字に海鼠の變化を盡したり然れども樗堂の句は實形に拘ること少く主觀的の感覺をのみ敘したるが故に淡泊無味のものとなりて景象の奇變も無くはた觀念の高尙をも失ふに至れり。宜なるかな近世の一宗匠評して文化の第一流となすや。又樗堂が曼語對語を用ふるは士朗を學びたるか士朗の學たるかは知らねども前に擧げたる例句を以て知るべし

国立国会図書館　タイトル『筆の命毛』　請求記号 WB12-40
ガラス使用

明治廿七年二月十一日[illegible]

昔の若草

獺祭書屋主人

池塘生春草といふ句を夢中に得て神助とはいひけん扨ても若草を詠み出でたる歌のなのめなるが多きは題のむつかしきにやあらん。されば發句の上にも昔よりこれぞといふ句なきのみならず似通ひたるもの甚だ多きは其うらゝかにやさしき景色の外別に變化なければなるべし。今其中に就きて一ふしあるもの三十五句を擇び更におのが考へをもてこれを五つの品に分ち先づ第五等即ち最下なる品より之を記さんに

若草や名も無き川の見え隱れ　暮四
若草や溜井の水の活かへり　井德
若草に流れ入りけり井のあまり　小柯
若草のこゝは葱の郡かな　蕉雨
若草にはや遊びしか鳥の糞　護物
若草や近く見ゆるは京の山　嵐齋
酒嗅い馬士も寐てあり若草野　三止

第四等は

田螺鳴龜鳴く頃は若草み　道彥
むく〳〵と若草はゆれ草の庵　巢兆
若草や氣儘遊びの神の馬　杉東
若草に太り見えけり野飼牛　勢壽
鞍置いたはなれ馬あり若草野　蒼仲
若草や難波に寐しは五年あと　葛三
若草に誰が通ひしや炬の炭　由誓

第三等は

若草や松につけたき蟻の道　此筋
若草や栞りに結ぶ古すゝき　白雄
若草や千代のふる道今の道　琴之尼
若草やきのふのまゝの檜木笠　椿堂
若草やまだ彩色の行きたらず　杜菱
若草のたいらにうける朝日かな　萬頃

奈良

若草や丸くなつたる鹿の顏　閑齋

第二等は

若草や馬に嗅がれて立つ雲雀　素雪
若草や土橋の緣を取り直し　柳居
若草や水際の立つ余吾の海　鼠燈
若草の入江〳〵と成りにけり　沙文
若草や臼をころがす翁あり　闌更
若草や素足のまゝの舟上り　梅笠
若草やすりきつて引く舟の綱　由誓

第一等は

立臼に若草見たる明家かな　龜助
若草にとんと消えたる雲雀かな　醉素

国立国会図書館　タイトル『筆の命毛』　請求記号 WB12-40
ガラス使用

若草や鼻推しつけて牛の夢　太無
若草やありし野寺の馬つなぎ　其明
いざや〳〵若草踏みに井のかしら　道彦
若草と成にし佛の御坐かな　春鴻

畫賛

若草や駒の寐起も美しき　千代女

などにやあるらん。

今の若草

古の人だに思ふやうには詠み得ぬ若草、さりとて今の人の腕前これ見よとかあらぬか四方の雅客より惠み給ひし金科玉條の中に

若草のくるれば月に煙りけり　桃雨
若草や寐よげに見ゆる野邊の月　古白
若草や八瀬の山家は小雨ふる　虚子

などは趣向立ちはなれて陳套に落ちず。此題に牛馬の取り合ひは何句となく言ひふるしたるに

若草や裾野に眠る放れ駒　木同
若草に見る〳〵馬の肥えにけり　子規

などものしたる氣強さよ。

笛吹けば犢戻るや若草野　松宇
若草に羊の歯ぐきうつくしき　同

若草や牛引てくる娘の子　猿男
若草や家一つ牛ところ〳〵　同
若草や寐牛の重さ五十貫　五洲
若草や御所の御門の狂ひ牛　明庵

松宇氏のはやさしく猿男氏のは油畫の賛として尤妙なり。五洲氏の五十貫明庵氏の御門皆思ひもよらぬ新意匠いづれもめでたし。

若草を踏みつけて鶴の歩みかな　古白
若草に雲雀と遊ぶ子供かな　子規
若草や蝶にはぐれし人の背戸　木同

皆ありふれたるところか。

若草や見事にのこる富士の雪　飄亭
若草や野末に富士の三分一　非風
若草や富士の裾野をせり上る　子規

非風氏の句はるかにまされり。

若草や馬槐が原の落し櫛　得中
若草や高田の馬場の名に殘る　猿男
若草や川中島の水個れて　子規

名所の思ひつき似て似ぬ處面白し。

神垣にそふて若草青みけり　桃雨
若草に鳥居の裾も染まりけり　猿男
若草や下馬札までは所まだら　同

悉く神前の景と見るものから一句の相侵さぬはよし

明治二十六年　紀元二部

野のわかくさ

陽炎のもゆる春日いとうらゝかに晴れわたりて賤が檐端に語りあふ雀の聲ももよほしがほなるにさゝやかなる庵のしをり戸おしあけて立出でたるまゝとざしもやらぬ君が代の惠には深山の奥あら海のはてまで漏るゝかたもあらずかし。家毎に見ゆる梅の立枝は茜さす日の御旗に匂ひちまたにしだるゝ青柳の風は東に西に其日〳〵の春を吹く都大路のさまも思ひやられながら中中にものしづかなる野邊のながめも心行くべしとて家居をはなれとある森の間に出づれば緑の筑波白妙の富士をかぎりにたなびく武藏野の霞の中に立ちのぼる五色の雲は九重の大内山もかなたかとばかり仰がるゝ程になりぬ。あらくれたる男の鍬うちかつきて畑かへさんとて立ち出でたる黒髪おどろに亂れしを手のごひもて包みし女の同じさまなる鍬もちて男の後に從ひつゝ行けばそれが子とおぼしく手に風車など持ちたるが待ち給へやわれも野らにて芹つまんになどいひつゝ追ひかけたる耕して食ひ井を堀りて飲むといひけん昔しのさまにも似通ひたり。都人はいかにくらすらん花さかぬひなにさへ今を春べと知らぬはなきものを。心そぞろにうき立つまゝにいく里ともなく過ぎ行けばはや若草の青ううつくしうもえいでし原の中にちろ〳〵と音して小川の流れたる牛馬の寐どころもいできにけりと見渡せばかなたの年ふりたる松の木陰に翁と嫗と二人休らひけるが翁は松葉掻といふものを杖につき嫗は大きやかなる籠を据ゑぬたり。進みよりておぢおばだちはいかなるわざやしたまふらん、餘りに相好の尊とければ問ひまつるになんといへば翁見あげて老のしわざは松葉掻き集めなどするだに久しうはえたへぬをまだ六十七十のころは山に入りてひねもす薪こるともさのみはつかれざりけりなどいひてをかしげに笑ふ聲いたくしわかれて齢の程も知られたり。嫗もほゝとゑみてその頃はこの小川に衣を洗ひ木陰に機を織りて一日をくらし夕顔の下に絲車をひき松吹く風に砧打ちあはせて一夜をあかしなどこそせしか。今は水汲み若菜つむわざさへぞ苦しうも思はるゝといふ。さていくつにやなり給へると問ふに百歳といひしはいつの事なりけん物覺えも昔の如くならねば今はおのが歳さへ忘れたりとて共に打ち笑ふめり。七十をながらふるだに得難しとはいひつるを百歳の上にこえ給ふといとめづらかにもたふとく覺え侍り。何處に生れ何處にて人と爲り給

国立国会図書館　タイトル『筆の命毛』　請求記号 WB12-40
ガラス使用

ひけんといへば翁はるかにかなたの森を指してかしこのはづれに見ゆる家こそ翁が生れしより今日迄すみふるせしところなれ。このあたりの草はらを春駒に鞭うちて朝風に驅けめぐりし頃はまだ此松の木もかうは老いざりき。向ふの岡の邊を牛に乘りて笛の音おもしろく夕日に歸りし頃はかの村々の家は僅に三四軒ばかりにこそありつらめ。東の小高き芝生に並びし塚の右のかたなるはわれ幼なき時に麥藁の馬など手づから作りてたまはりし老女なりしが今は其石ぶみの文字だにさだかには讀みえられじ。左のかたなるはわれに畑うつわざをはじめ何くれとをしへ給ひし老翁なりしが其時のかたみに植えおきし榎ははや三かゝへにもなりけりとてかこち顔すめり。百年あまりをながらへたまはゞ其間にはおもしろき事も悲しき事もありつらん。そを語りたまはれかし。世に語り傳へて書にも殘さんと云ふに翁かうべをうちふりいやとよ。いやしき身にさる事のあるべうもあらず。たとひありともおこがましく語るべきことかは。されとおんみまだから若き人と見たてまつれば後の爲にとて翁が思ひおけることをいはんに興はなくとも老のくり言とな聞き給ひそとて衣をかいつくろひぬ。

一年のうちに四つの時のうつりかはるが如く人の一生を一年と見ばわが身の上にも春夏秋冬ぞめぐり〳〵なる。されば春のはじめに萠え出つるこの野邊の若草を見るにつけてもあやにくに若き時のみこそ思ひいださるれ一日の事は朝にあり一年の事は春にあり一生の事はをさなき時にありといふなるをこの翁がわかゝりし程の事などぞくちをしうも夢のうちにはすごしつるよ昔は今の小學中學などいふところもなくたゞ寺小屋とてわづかに書讀み手習ふわざのみをしへしがそれだに心にはしまでおほかたに思ひなせしかば今もあきめくらといふものにて新聞だにもようは讀みかねつる程にて世の中のありさまにはうとく侍り。われらのきはにはあらで高き位にも昇りよきつかさにもなりて世に時めき給ふ人々のうちにはたとひもろこしの書こそ讀めれ小學中學の敎へを受け給はぬかたも多かるべし。ただ翁らの如き老いさらばひたる限りは早くもとの土にかへりて其塚に若草の生ひ出でたる頃今のわらはべどもの翁になりて御國はいよ〳〵開け御代はます〳〵治まり榮ゆべし。若し昔の世ならんには大名の子はおろかしくとも大名なり。そのかよわき手のうちに幾萬石を握りてや生れ出づらん。百姓の子はさかしくとも百姓なり。そのつよき腕ははじめより鋤をもち鎌をとるためにつくられたりき。されど今の御世は公卿も學ばざればたゞ人になるためし少からねばそのつぎの公卿は誰なるらん。皆今のわらべの中より出でずしていづこよりかは湧き出づべき。

おそくとくおのがさま〳〵さく花も
ひとつふた葉の春の若草

今こそいづれもおなじふりわけ髪のわらはべとこそ見えたれ。三十年四十年の後に缺げそこなへる椀のふちを叩きて家々の檐かげに一文二文のあはれみを乞ふも腰に大臣の印を帶びて百萬のものゝふを鞭のさきに動かし十餘國の使臣を足の下に怖れしむるもいづれか今のわらはべの身の行くへにはあらざるべき。さるは皆をさなき時の敎育のよしあしによるものなめり。年老いては心も力も日に〳〵衰ふるのみにて中々に新らしき事を學びうべきにもあらず。昔より睦月初子の日などに小松引き若菜摘むためしあるも皆其おひさきありて榮え行くにあやからんとてのわざなるべし。春の若草のやさしき姿には見えながら新玉の春たちかへる頃よりまだ消えあへぬ雪の下萠にいつしか青〻とぞ萠えいづるなる。なべてものゝ生ひ出づるはじめは其勢ひも強き者にして人もをさなき頃は木の葉散り霜雪などふる時だに其心の中は猶春風のどかにして若草の上に胡蝶と戯るゝものなるを年老いて頭の雪とこしへに白うしてこち吹く風にだにとけぬ頃はわが身をわが思ふまゝにもなしがたきものぞかし。若草の夢いまださめあへではや桐の一葉にぞ驚かさるゝといへりし如く翁も今になりていたづらに過ぎにし年月をなん惜むなる悔の八千度百千度も末なき命の何とかせん。おんみまだおひさきある身の上なればよくつとめはげみて心ざし給ふかたへ進み給はゞ何事か成らざらん。ゆめあだし道にな迷ひたまひそ。

また敎ふる人の責めは更に重きものなるもさは思ひいたらぬも多しとや聞きぬ。今のさかりなる人のあとをつぐものは今のわらべなればそのわらべを敎へ導くはつぎの代のわが國をつくるなり。學校はその國をつくるところ敎師はその國をつくる人なり。水の圓くなり方になるも其の器の形により鬼を出だすも佛を出だすもくゞつまはしの心一つによれるが如くつぎの代のわが國は敎師の心によりてともかうもつくりえらるべしかゝる大切なる事をなほざりに思ひなしてなまものじりにまかせたる心もとなさよ。三つ子のたましぬは百歳の後にも猶かはらずと聞くを敎へ子もこれを見なら

国立国会図書館　タイトル『筆の命毛』　請求記号 WB12-40
ガラス使用

ひてかゝる心ざまの人とならんには其人がまたつぎのわらべを同じさまに導きてつひに國のをさまることなかるべし。片ゐなかの學校は敎師も生徒もまめやかにすなほなるが多し。都の學びのわざこそまさりたらめ心ざまは無下にいやしくむくつけしことなんある人の語りし。若し老いたる人の心ざま今更にうつしがたしとせばかんみだちみづから正しき道を取りて新らしき吾國を作り給へ。げにも望みあるかん身の上よ。

嫗は筐を傾けて若菜の塵をえりつゝぬしがげにのたまふ如くなん。さて女の身の上は內を守るものなればあながちに學校へゆかずとも家の內のをしへこそきびしくあらまほしけれ。いやしききはゝ若菜つみ芹とるわざより衣縫ひ蠶飼ふことなどぞまづ覺もべき。たふときはゝ琴ひき歌よみあるは書學び字習ふこともよかるべけれどそれだになまなかに深くきはめたらんはをりにつけて中々にわづらはしかりぬべし。すべて男はもくするゑの事に心をくばり花をさかせ實を結び世になりいでんとつとむべきなれども女はたゝこの若菜の花はなくとも粥にもましてあつものにもすなる如く家をさめ夫をたすけて眼の前の盆にたゝことぞそのぞましき。

花をのみまつらん人に山里の

雪間の草の春を見せばや

女はわきて其才秀でたらんよりも心ざまよすなほにて親にも夫にもよくつかへかしづくこそいとたのもしく覺ゆるを男とおなじさまに思ひてわがあさはかなる心よりとありかゝりとものあらそひなどしたるわきの見る目さへ心苦しくてかぎりなくあさまし。はたさるとがゝしきさまにはあらぬも何がしの學校に學びとつ國の書さへそらよみしていと誇りかにふるまひしか人にとづきてのち家をもえをさめず子をもそはぐゝまぬなどそしられたるもいみじう口をしからん。心あまりうちあがりて男にもまけじと思ひたるはわろし。たゝいやしき手わざもいとはずものいはず人にさからはずなんあるべきとて若菜の泥をふるひ落しなどすめり。

翁はたと膝を打ち人の身に春秋のあるがごとく國の上にも春秋はあるなめり。きはめて古き世に天地の分れそめてまだそれ〳〵のものいでこぬ時は冬枯の野に草なきにも似たらん。やう〳〵にして地の上に人の生ひいでゝあるは草かひのつのぐむにたとへはた民草あるは青人草などもいへるなるべし。さればわが大御國の

はじめは南のかたより次第にひらけたることあたかも若草の日あたりよき處にまづもえいづるにことならず天照大御神の御光に日の本を照し給へるは一陽のかへりそむる頃なるへし。神武天皇日向より東に進みさばへなす醜のともがらを討ちほろぼし大和の橿原にて高御座につかせ給へる時こそは春日の光のどかに草木も榮え行くはじめなりけれ。げにやけふはその紀元節にあたりたるを年老いてはかゝる大事なる日をもはたと打ち忘れたるおろかしさよ。はた知らず〳〵帝のりにしたがふといへるにもかなひたらんとかなたの空をうち拜むめり。扨今の御代は如何なる時にかあたれるると問へば翁うなづきて申すもかしこけれども中つ代はものゝふが太刀風はげしく吹きすさみて天つ日は何となく曇り勝ちに見えしも秋冬の時にてぞありけらしさるを明治の御代となりては冬枯の中より草もえいでて再び春のはじめにもどり何事もあがれる代の御有樣になりて猶それにもましたる事どもの多かりなん。今ひろく世の中の國を見るに勢すさまじき夏の國もあればやゝ衰へそめたる秋もあり。はた花も紅葉もむなしく其あとを書に留めて全く枯れはてたる冬の國もあるなめり。わが御國は此後いや榮ゆべき春の國なれば千代萬代の數をかさぬとも猶つきせぬ君が代に生れあひたるわれらさへめでたき數にはもれざりけり。

春日野にもえ出る草の末〳〵も
たのむや春の露の恵みを

いざ給へ日も入りなんに家路急がんとて翁は鶴の翅に上り嫗は龜の背に乘りていづこともなく失せけると見て眼をひらけば若草をしとねにしばしまどろみたるうたゝねの夢さめて君が代をうたふわらべの聲かすかに聞こえたり。

国立国会図書館　タイトル『筆の命毛』 請求記号 WB12-40
ガラス使用

明治二十一年春

●俳人の奇行

獺祭書屋主人

笠家舊室といふは檀林の俳諧師にて明和安永頃の人なり。活々坊活井などいふ別號あり。此人生來の奇人にして其一生の逸事枚擧にたへぬ程ながら强ひて事を好み奇を粧ふの類にあらねば滑稽の中に高尙なる處ありて何となくしたはしき人なり。今ま其の言行の二三を擧げんに

活々坊其師曲庵と同居せる頃ある俳席の歸りに醉ふて溝の中に陷りたり。夜深けて夜番の者其鼾を聞きつけて呼び起し早く溝より上れといふに活々坊怒りてわが勝手にこゝに寐てゐるに汝等の搆ふ所にあらずといつかな聞かぬを無理に引き上げて見しに活々坊を知る者ありて駕籠にて曲庵の內迄屆けたり。送りたる者請取を給へといへば曲庵筆をとりて

一札之事

一生醉坊主　一疋

慥に受取申候以上

月　日　曲庵

と書きて與へしとぞ。

贊　夜涼みや川へ落ちたる人の音

ある人活々坊を訪ひしに折柄席上に點を乞ひにおこせし俳諧の一卷あり。活々坊客に向ひて俳諧の點印とて普通のものは面白からず今我新工夫を見よやとて指のさきに墨をつけべた〳〵と句の上に指を印していふやう指がたの一つあるは一點なり二つあるは二點なり十點のものは此の如しとて十許り墨をつけて眞黑に塗りまはせしかば客も驚いて一語なかりしといふ

贊　辨慶の指のあとあり山櫻

活々坊一僕あり忠實にして善く主につかふ。活々坊金あれば之を僕に與ふれどもおのれ入用の時は僕にもことわらず其金箱を探りてこれを取り出す。僕も其金の失せしを見ては大方主人の使ひしならんとて驚くこともなかりき。主僕共に大酒家なりしかば二人飮み醉ひたる末には忽然角力などを試み夜半に隣家を驚かしたることも屢々ありたり。

贊　家隸から金をかりるや年の暮

活々坊大傳馬町に住みし頃隣家に火事ありければ藥鑵に酒をたゝへたるを携へて門外に立ち出で頻りに酒を傾けながら我家の燒くるをさも心よげに眺め居たりしが其後活々坊の影も形も見えざれば親戚門弟などよりに探し求むれども更に手がゝりもなかりき。やがて四五日も過ぎて上州より活々坊の手紙來りたるに披き見れば「藥鑵を携へ無事に上州迄立ち退き候間御安心被下度候也

贊　面白や家は燒かれて雪のたび

（未完）

国立国会図書館　タイトル『筆の命毛』　請求記号 WB12-40
ガラス使用

●俳人の奇行（つゞき）

舊室ある人のもとにて一夜を飲みあかしつぎの朝建部凌岱といふ俳諧師の家をおとづれて突然茶漬を所望しけるに初對面の人なれば凌岱もいぶかしく思ひたれどもかねて其人の性行など聞きこみ居れば望むに任せて茶漬をもてなしたりといふ。又舊室ある時芝邊通行の際腹飢えて堪へがたかりしが折節路の邊の小家にて夕餉したゝめ居たるを見て突然其家にはいり我にも夕餉を惠み給へといひければ家内の者皆驚き怪みしかども其の容貌のたゞならぬを見て御望みはやすき事なれども見らるゝ如き貧家なれば參らすべきもの無しといふ舊室いやとよ厚き御もてなしに與からんとにはあらず茶漬こそ望ましけれといひしに望み通りに與へければ厚く謝して歸りしとぞ

贊　十六宵は知らぬ方にて茶漬かな

活々坊二三人に伴はれて隅田川に舟を浮べ三圍の堤へ上りし折節彼方より一人の禪僧小僧を連れ來るに活々坊友に向ひ我が禪學の手際を見よやとて忽然彼僧の前へ立ち塞がり何やら一言の問を發したり。禪僧は其答をなすと同時に手を振り上げゝれば活々坊驚きて逃げ歸りしに皆々扨は生兵法に負を取りしよと笑ひながら共にさる家に入りて快く酒を酌みかはし居たり。やゝ暫くして以前の禪僧又小僧と共に歸り來るを見認めて活々坊むくと起ち上り先刻はゆくりなく敗を取りて諸子の手前も耻かしき限なり。今度は我器量を見せんとて引き留むるもきかず飛ぶが如く掛け出でゝ何をか言ひながら杖振り上ぐれば和尚も小僧もはふ〳〵の体にて土手の左右へ逃げ下るを見て活々坊はにこ〳〵ともとの坐に戻ればつれの者此の度は勝ち給ひしやといふ直樣勝ちたりといと誇りがにいふに扨は如何なる問答をかしかけ給ひけんと問ひければ活々坊いふ、先きには禪學の上にて問答したれはこそ失敗したれ此度は平話にて勝を取らんと工夫しさつきの恨み覺えたかと杖を振りまはしければ彼れ賣僧ばら恐れて逃げ去りけりと眞面目になりていへば一坐の者あきれて暫しは笑ひも出ざりき

贊　水の月杖ふりあげて打たんとす

ある人に木平の帷子を惠まれて常にそれを着たりしが一日醉ひに乘じて其上に朱もて色々の篆書抔書きつけたるが醉醒めて後見苦しとや思ひけん又其上を墨にて塗りしかば一層きたなくなりたるに流石の活々坊も困じはて其後は常に木平の帷子の上に縮緬の羽織を着てありきしとぞ

贊　誰が紋をつけて見やうぞ夏羽織　（未完）

活々坊の近處に手習の師匠あり。ある時其弟子共を招きて小酒盛を催すに活々坊も其席に連りたり。主の師匠皆の者に挨拶して今日は松魚一尾を得て御肴にまゐらせんと思ひしにあやにく其手筈くひちがひ殘念至極なりといふ。やがて酒一めぐり二めぐりせし頃ある人一本の扇を活々坊の前にさし出し一句書きて給はれと請ふに活々坊おめず臆せず筆とりて直樣書き下すを見れば「李白が曰く鰹なきこそ恨みなれ」とあるに人々其即智を感じあへりとぞ。

贊　初松魚貴人の前ではねにけり

活々坊さるあて人の處にて頻りに狂畫など揮ひしに三途川の姥を畫きては又畫き直すこと四五枚に及びて猶しさざればそれに限りて何故に斯く心を苦むるやと問ふに活々坊いふ、これは此程見て置きし探幽の畫をまねんとするに如何にしても探幽の樣にかけぬ故かき直すなりと答へしかば皆其大器にして僞りなきに驚かぬはなかりけり。

贊　枯尾花姥のやうにておそろしき

ある大名方に酒盛ありし時活々坊も其席に招かれしが例の通り大醉にて御邸を出でたるは既に夜半の頃なりけり。辻番所の側に松の樹あるを見つけて其上に攀ぢ上り頻りに何かつぶやきゐるを終に番人に見出だされ早く下りよといはるゝに活々坊怒りて我が勝手にてここに涼み居るに汝等が下りよとは無禮なりといふ。其内二三人相集まりて下りよ〳〵といふ居る折柄活々坊木末よりげろ〳〵と嘔吐を垂れけるが番人等の頭へかかりければ番人等怒りて引きおろせ〳〵と叫ぶ此時遲く雷の如き音して活々坊屋根の上に落ちてけり。楷子を懸けて抱き下し見るに御酒宴に招かれたる俳諧師なること知れければ其夜はこゝに留めていたわりかへせしとぞ。

贊　夕涼み物見の松に上りけり　（完）

国立国会図書館　タイトル『筆の命毛』　請求記号 WB12-40
ガラス使用

明治廿六年三月廿五日「日本」ニ載ス

●文界八つあたり

緒言

地風升稿

春風駘蕩百花爛熳の好時節は將に不日にして至らんとす、世上の人心何となく春めきて雅人は郊外に詩を拾ひ婦女子は何座彼座に演劇を觀る。俗界に生息する官吏が小說本に夜を更かして春眠曉を覺へす終に出勤の時間を過ぎたるも塵中に來往して時是金の商賈か發句會の兼題にうつゝをぬかして知らず〳〵廻り道をしたるも何れか風流の卵ならざらん。況して詩人たる者小說家たる者は正に是れ十分に詩思を吐露し小說思想を現出せざるべからざるの時なり。而して現今我文學界の有樣はいかにして如何の有樣にあるか。世の需要に應ずるだけの供給は經濟學的に出來つゝあるか。其經濟學的に發生したる文學は是れ名利的の者に非るか。若し果して此の如き有樣とすれば此後は如何に成り行くべきか又如何に成り行かしむべき者か。是れ今日に於て文學家たる者の一考を促すべきことにして批評家たるものが其の一考を促さしむべきの時機なりと思はるるなり。

嘉永安政の頃一陣の猛風外國より吹き來ると共に我邦固有の制度文物は一年々々に打毀せられて世は冬枯の景色となり唯荒れ廣がりたる平原枯れ殘りたる木立の外復一の活氣ある者を見ざりしが其木枯らしの風やう〳〵に弱るにつれて世界は再びうらゝかなる春となり何も彼も耳に目に新らしく見ゆる程に今迄は唯骸骨とのみ思はれたる文學の枯木も次第〳〵に葉を出し花を咲かせそめしが其花も葉も幾百年來見來りしものとは色も香も全く異なりたる一種異樣のものとはなれりけり。其一種異樣のものは皆外國より吹き送りたる新種子より發生せしものなりしかども其種子は果して我地味に適せざりしか將た其色香の我邦人の嗜好に合はざりしか終に此一種異樣の文學は洋服と與に束髮と與に滅じ去りて今は和洋折衷とも稱すべき冠を西洋にし履を日本にするが如き文學とは變じたり。否變ぜんとして未だ變じ得ざるなり。然らば終に變すべきか。曰く變ずべし。和一變して無となり無一變して洋となる。洋一變せば將に折衷とならんとす。而して天下未だ折衷の二字の如く曖昧模糊たる者は非るなり善くも惡くもなる者は非るなり。是れ文學者の注意して一步も過まるべからざるの時にして批評家が爲に提灯を持たざるべからざるの時にあらずや。

余は文學を好む然れども文學者に非ず。余は批評を好む然れども批評家に非らず。文學者に非ずして文學を評し批評家に非ずして批評を試む固より僭越を免れず況んや當世の諸大家若くは諸大家の著作に對して論評を試むが如きは蟷螂の斧を揮つて隆車に向ふの譏りを

国立国会図書館　タイトル『筆の命毛』 請求記号 WB12-40
ガラス使用

受くべしと雖も老婆能く白居易の詩を評し田夫能く應擧の書を誹るを得ば我輩に於て何かあらん。正直なる周捨なき素人の評は中々に情實ある諛言多き黒人の評に勝ることあるを信ずるなり。

文界八つあたり

地風升稿

（一）和歌

文藝の再興につれて世の中の學問は多少美術文學の分子を含みたるものとなり所謂實用なるものゝ實用の外更に無用なるものゝ實用を承認するに至れり。古來文學なるものは餘力を以て學ぶべきの末技とのみ考へたりしも今は文學ほど高尚優美なるは無しとまで論定するに至りしかばこれ迄は内々に威張りし若旦那が俄に大旦那に成り上りて肩幅を廣くしたるが如く新出來の文學は大手を廣げて世界を横行し始めたり。されば文學に關する書籍雜誌の續々世に現はれ出でたるは言ふ迄もなく固よりさもあらぬ新聞雜誌まで詩歌小説の類を載せざるはなきに至りしも其中尤普通なるは三十一文字の和歌なりとす。而して今世の文學にて此三十一文字程つまらぬ面白からぬものはまたとあらじ。然らば和歌其物がつまらぬとせんか。古來秀歌多きを如何せん。然らば歌人其人が面白からぬとせんか。余其最適當なるを信ずるなり。

「詩人は生る作られず」と言へる一語は假令ひ眞理に非らしむるも詩人たるの教育は中學年齡に於て之を受くるとも已に晩きなり。小學年齡に於て之を受くるも亦已に其時機を過ぎたるなり。況んや年壯にして始めて詩人と爲らんと欲するも得べけんや。且つ詩人たるの教育は古歌を澤山に誦むにも非ず。自らむやみに作るにも非ず。歌人の點を乞ふにも非ず。況んや古典に通じ雅語を解したりとて詩人になれぬことは誰々も知り居る事なるべきに扱それさへも知らぬ當時の歌人の自ら歌人なりと思ひ居る心强さよ。試みに今日の歌人には如何なる人かなると尋ぬるに先づ

國學者　神官　公卿　貴女　女學生
少し文字ある才子　高位高官を得たる新紳士

我歌を書籍雜誌の中に印刷して見たき少年

の如き者なりけるぞうたてしや。神代の詞を詠みつゝけて其のむつかしさに愚者を威すともよも歌人にはあらじ。神祇の力を假りて名歌を作らんとするも利名に志す俗物は住吉玉津島のおほん神も見はなし給ふべし位高く官たふとき人が上手なるかと思へば人麿赤人はさのみ榮えたる人にもあらず。檜垣の嫗祇園の梶は賤しき生れにて歌の達人ながらやごとなき上臈の無下に拙きも少からず。世才に富める人上木を目的にして作歌する人は中々に其才其目的が煩ひとなりて一首の名歌だに得られざるにまして金錢を貪りて一首一錢か二錢を目やすにたてる歌人の歌は如何にかあるべき。これ等の人は皆唯おのれの娯樂として歌など言ひ捨つる位は面白からんが其自慢連が勿躰なくも歌人といふ天爵を横奪するに至りては本邦固有の和歌も最早地に墮ちたりと言はざるべからざるなり。

新聞雜誌の文學にても余は漢詩を以て比較的に發達したるものと思惟するなり。本邦在來の耳なれ口なれたる和歌が下落して外國語の珍奮漢的の漢詩が騰貴するとは稍〻受け取れぬ話なれどもこれには二原因ありて存するが如し。第一は即ち前に述べたる歌人の見識なきに由るものにして歌人に比すれば詩家の見識猶數等の上にあるを證すべきなり。第二は漢詩の言語多く句法變化するにも似ず我和歌は言語の區域狹きと字數少きと古歌多きとに由るものにして是れが爲に新句法を用ひ新意匠を述ぶることを得ぬは是非もなき次第なり此上は多少の新語を挿むか短歌のみに賴らずして長歌を用ふるかの外は別に方便もあるまじと思はる。さりとて今が今でも五十や百の名歌が出來ぬにもきまらず一人や二人の歌人が無いとも限らねども唯當時の如き老人と老成人と一つになり名家と名利家と間違ふ世の中にては福鳴中佐を迎かへ郡司大尉を送るの歌が何萬首出來るとも少しも賴もしからぬ次第なり。要するに

今日和歌といふものゝ價値を回復せんとならば所謂歌人（即ち愚痴なる國學者と野心ある名利家）の手を離して之を眞成詩人の手に渡すの一策あるのみ。

（二）俳諧

發句俳諧の類總てこれ文學たるに相違なくんば日本文學の過半は俳諧の爲に占領ぜられたり。俳人宗匠の類總てこれ文學者たるに相違なくんば日本人口の千分の一は即ち皆文學者と稱すべきものなり。嗚呼何を俳諧の盛にして俳人の多きや。美術文學は之を著作する者極めて少なく他の著作を見て以て娯樂とする者極めて多きは古今東西略〻一定したる通則と思ひの外我俳諧は單に他人の著作を見聞して快となす者は甚だ少なく却て之を著作して自ら樂む者甚だ多きこそ第一の不思議とはいふべきなれ。而して此一大不可思議の文學が此の如く隆盛を極むるは其句法の簡單なると其用語の卑俗なるとの二原因ありて存する者にして此頃に至りて平民文學といふ渾名を得たる所以なり。

平民文學といふ言語は明治の字典に一新語を加へたるに相違なしと雖もこれか解釋を附するに當りて其賞美の意を含むかはた嘲弄の意を含むかに至ては何人も容易く之を判斷する能はざるなるべし。否之を判斷する能はざるなるべし。否之を判斷するの人あらば多くはこれ嘲弄を意味する者となさんのみ盖し俳諧を指して平民文學といふ而して俳諧程世に輕

国立国会図書館　タイトル『筆の命毛』　請求記号 WB12-40
ガラス使用

蔑せらるゝ者なければなり。はた眞の文學は高尚優美必ずしも多數の賞贊を受くる者に非ずして寧ろ平民と文學とは兩立し難きの點多ければなり。天下若し強ひて俳諧を平民文學と謂はんと欲するの人あらば固より余に於て之を拒むの理由なしと雖も其平民文學なる語は最早文學の一部分に非ずして文學以外の一新語なる事を忘るべからざるなり。試みに如何なる人が俳諧社會を組織するかを見よ。國學者公卿等數種の人が歌人となりしは愚かの事、金持の隱居、町内の口きゝ、臭皮膚の藝人、無學の百姓、ひなな代言、不用な役人いづれか俳諧を好まざらん。これをしも猶文學者といふべくんば日本の文學は井戸端の會議に落ち御講の戻り道に殘りたりとや云ふべけん。知らず最多數の平民に理解せしむるを以て文學の眞意とする言文一致流の論者は將に日本の文學者年表中に八公熊公を以て八丸赤八と伍せしめんとするや否や。

然れども學問に窮理と應用との區別あるが如く俳諧にも文學と應用との二種ありて所謂八公熊公の俳諧はこれ文學の應用に外ならずとせば則ち可なり。只此場合に於ける俳諧は床屋の將基盤、離れ座敷の花骨牌と同種類にして文學的の俳諧とは異種類に屬するのみ。前句附三笠附景物賞品等は固より俳諧に遠くして博奕に近きことは已に享保年間に於て幕府の認むる所となりたり。今日行はるゝ所の懸賞發句の如き未だ法律を以て之を禁止せずといへども其弊或は享保年間の三笠附に劣らざらんとす。懸賞發句はもと狡猾なる商人の發意に出で其手數料として割合不相應の金を貪るにありて募集に應ずるの人全く之を知らざるにあらざれどもこれも亦懸賞を得て已れを利せんとの勘定づくにて見す〳〵敵の術中に陷るものとは知られたり。これもと俳諧以外のものにて文學とは何等の關係もなければことに論ずるの必要なしと雖奈何せん世人はこれを以て俳諧とし俳諧師はこれを以て奇貨とするの觀あるを請ふこれより俳諧師といふ文學者の身の上に論及せん

數萬の俳人が月に一句づゝを作ると假定すれば一年に數千萬句を生ずべく十年の數百萬句百年に數千萬句を生ずるに至るべく其内には千萬の名句の現はれ出づると共に俳句は早く詠み盡さるべき筈なるに今日に於て其割合に名句も少くはた俳句の盡きたりとも覺えぬはこれ其人が文學應用者にして純粹の文學者に非ればなり。十七字の天地若し數萬の眞文學者を容れなば名句は一時に湧出し盡し俳句は其時を以て無慘なる最期を遂ぐべきも俳諧起りてより以來僅かに三百年元祿天明の盛時と雖も未だ斯の如き多人數の俳人を出だせしことはあらざるなり純粹の文學者は三百年間を通計して猶數百人に過ぎねば平均一年に一人か二人の割合なるべきに扨も現今の宗匠の夥しさよ。東京府下のみにても幾十人と數へ得べきに全國を探し求なば幾百人にも上りなん。俳諧社會の眞文學者とも目すべき其宗匠此の如く多からんには明治の今日は假令數萬の文學應用者を除くとも猶古今未曾有の俳諧隆盛の時期と云はさるへからさるなり。

然るに過きたるは猶及はさるがごとしとか宗匠輩出の時代は即ち宗匠皆無の時代なり。試みに幾百の宗匠は如何なる生計を爲すかと問へは曾文學應用者を利用し其點料其入花等に憑らさる者なし。それも咽元の用心には致し方無しとするも其宗匠が批評する所を見れは多くは其正鵠を誤り雅淡味ふへきの句は一切捨てゝ顧みす却つて俗臭紛々鼻穴より入て腦巔を衝く的の惡句を拿へ來りて之を卷頭と爲し之れを卷軸となし且つ其句の善惡に拘らす必らず之れを添削して而して後人に示すと云ふ。此添削は其拔萃したる秀逸が古人の成句其まゝを剽竊しあらん事を恐れて之れを防くの秘訣なりとぞ。曾て都下の宗匠數十人一堂に相會す。一儒生立て宗匠を罵るの演說を爲すに一人の之れを聞く者無し。其の譯を問へは則ち其罵詈を嫌ふに非す宗匠の過半は寧ろ之を解せさる者なりと。何ぞ近時の宗匠の無學無識無才無智卑近俗陋平々凡々なるや。然れ共其無學平凡なるは猶一凡人として之を恕すべし。權門に伺候し富豪に出入し幇間を以て体と爲し俳諧を以て用と爲すの奸惡宗匠に至りては其害の大なる却て一時の懸賞發句等に勝ると萬々なりといはざるべからず。嗚呼誰か之を刈る者ぞ。

昨年來俄に俳諧の好景氣を來たし古俳書の拂底と新俳書の刊行とは大に其盛運を卜するに足る者あるは急に天下の俳人の增加したるが爲なるかと云ふに固より百や二百の俳人は新たに生れ出でたるに相違なしと雖も其數は從來固有の數萬の俳人に對しては零と見做しても差支無き程なり。然るに俄かに俳諧の活氣を生したるが如く見もるは畢竟其百か二百の俳人は商買百姓を以て組織したる所謂月並者流の屁鋒連に非ずして多少の學識と文才を備へたる書生仲間より出でたればなるべし。千羊の皮は一狐の腋に如かず百萬の月並連は一個の寒書生に及ばず。是れ其新俳人の比較的少數なるにも拘らず頓に俳諧社會の色めき立ちし所以にして余は俳諧の爲に太白を浮べて賀せんと欲する所なり。學識無き佳句無き廉耻無き節操無きの數語を形容詞として現はれ出づべき今の宗匠に對しては余は殆んど改良進歩の望みを絶ちたり。宗匠といへば卑俗を意味し發句といへば陋醜を意味するが如き其宗匠其發句は早く之を地底に葬り盡して只其墳墓より生ずる新萠芽の成長を待たんと欲するなり。

国立国会図書館　タイトル『筆の命毛』　請求記号 WB12-40
ガラス使用

●文界八つあたり

地風升稿

（三）新體詩

新體詩とは何ぞ。格調の新か意匠の新かはた格調意匠共に新なるの謂か。新體詩家は云ふ、從來の短歌は調短くして歌人の意匠を述ぶるに足らず古代の言語は數少くして詩家の觀念を畫き出すに足らず。願はくはここに新體詩なる者を創め明治の詩人が縱橫無盡に驅馳して以て驥足を伸ぶるに足るべき一新天地を開き敢て西洋の大家に比して三舍を避けざるの名篇大作を成さしめんと。而して之を唱道せしは既に十年の前、山巽軒先輩が新體詩鈔なる書を著はして世に公にせしの時にあり。爾後文學の進歩すると共に美妙梅華湖處其他幾多の少壯文學者を鼓舞して之を新體詩家の壇に上らしめ彼所謂新體詩歌なる者を歌はしめたり。其歌ふ聲は如何に高かりしよ其歌の調べは如何にうつくしかりしよ之を聽と共に拍手喝采せし天下の聽衆は如何に多かりしよ。而して未だ數年を經過せざるの今日彼等が千歲不朽に傳へんと誇言せし數十篇の新體詩は盡く雲散霧消して復昔日の拍手喝采の衖をも留めざるに至れり。無殘ッ新體詩家は斃れたり。空しく京童をして「半詩人さんは何處にどうしてござるやら去年の秋の煩らひにいつそ死んでしまふたら斯うした歎きはあるまいに」と謠はしむる英雄の末路悲むべく又憫むべし。

然れども文學の大勢より察すれば今日は決して悲しむべきの時にあらずして寧ろ喜ぶべきの時なりと思はる春秋戰國幾百年の干戈暴虐を極め殘酷を盡せしも秦皇天下を一統し漢高法三章を約するの治世なきに非らず元龜天正の間群雄輩出し相攻め相爭ひ或は和し或は叛き甲仆れ乙起り彼を討ち此に伐たれなどせしさま後世よりして之を見れば恰も幾多の英雄豪傑已が生命を犧牲として以て德川氏の爲に覇圖を開くの地を爲せしが如き觀あり。既往十年の間幾多の新體詩家が將棊倒しに斃れたるは將に一大詩人の爲に土臺を作りて宏壯なる建築の成就を待つ者の如し。誰か能く三尺の劍を提げて身を匹夫に起し終に大詩人の榮爵を受くる者そ。過去の新體詩家が盡く失敗したる後を承けて未來の新体詩家が大功を奏せんとするには前車の覆轍を踏むべからざるは勿論にして更に前人の有せざりし新技倆を揮はざるべからず。、山先生が文學に於ける功は世人に新体詩なる觀念を印記したるのみにして其著作は毫も文學士の價値ある者に非ず。然れども彼時に方りて新体詩と云ふ論說を草して千萬言を重ぬるは終に一篇の七五的長歌を作りて之を世に示すの有力なるに及ばざりしものにして文學の幼稚なる當時に彼書の持て囃されし所以なり。見よや今日の少しく心ある者は皆之に唾するの時代に於て無學の兵士と小學の生徒は猶彼拔刀隊の歌を以て無上の名作と爲すに非ずや。然れども明治の文學が小學年齡を經過せし明治廿一二年頃に於ては早く既に七五の長歌に飽きそれより後はありとあらゆる調子を取りて或は三々五々に或は七五三に或は跛者の兩足の如く或は雪中の龍尾の如くお三も以て材料と爲すべく權助も以て主人公と爲すべしと滅多やたらにあばれ散らせし後は川開きの玉屋鍵屋と同じ事月を並べ星を降らせし手際も評判も僅か一夜の夢幻なりけるぞはかなしや。つまる處今迄の新詩人には詩人たるの資格も能力も無かりしなり。長いのが善しと無暗に引き伸ばした處で矢張三十一文字の短歌に及ばず分り易いのが第一よとて無法に俗にした處で終に廿六文字の都々一にも負ける樣な次第なればこそばた〳〵と倒れたるも尤もなれ。一口に言へば新詩人には誰でも成れると思ひしが抑間違ひの根本なり。若し今後新詩人の出づる者あらば其人が詩人たるの性質を帶びざるべからさるは言ふ迄も無き事にして從つて高尙脫俗の詩想を有せざるべからず。從來の詩人は種々の變調を工夫する事をのみ務めたれども終に高尙なる觀念を養ふ事を知らざりき。余は今日の形勢より之を見て高尙なる詩想と富贍なる文字とあらば假令其調は七五にても五七にてもはた如何なる變調なりとも格別の差違なしと斷言するものなり。

●文界八つあたり

地風升稿

（四）小說

文學の中最人望の多きは小說にして文學者の中其多數を占めたるは小說家なり。年々歲々生ずる所の小說書類のみにても驚くべき多數なるに雜誌は月々之を載せ新聞は日々之を揭ぐ。新聞の小說のみを算するも全國にて其數三四十はこれあるべく其印刷紙數合せて十萬と假定し（實際は十萬を超えたり）其讀者は二枚に付き三人の割合とすれば新聞小說の讀者は既に十五萬の多きに及べり。之を俳句の月並連に比して更に其何倍を加へたること必定なりと思はる。而して眞成の小說讀者に至りては却て猶此外にありて稍高尙なる位置を占めたり。試みに見よ緣日の露店風塵に曝す所の新書古書の一半は是れ小說に非ずや街頭の書籍行商擔ふ所の重荷は盡く是れ小說に非ずや。一燈檠一破几の間に生息する寒書生の坐右偶〻見る所の數冊の書籍は是れ小說に非ずや滊車の內火船の旅に携ふる所の書は紳士と商賈とを問はず法律家と政治家とを問はず皆是れ小說なるに非ずや。小說の愛讀者多き事此の如くなれば從つて小說作者の出づる事多きは必然の結果といふべし今日の文壇に於て文學者と稱せらるゝ人の內にて毫も指を小說に染めざるもの幾人ありやと問はゞ實に十分の一にも足らざるなり。所謂新体詩家なる者所謂文學

国立国会図書館　タイトル『筆の命毛』　請求記号 WB12-40
ガラス使用

批評家なる者いづれか小説家の一時の變名ならざる小説家といふ名は實に世人に尊敬せらるゝよりも自己に最尊敬せられ小説といふ業は世人に面白く思はるゝよりも自己に最面白く思はれたり。而して此最尊敬せられたる且つ最面白く感ぜられたる小説は實に最容易なる最名を成し易き事業と認定せられたり。宜なる哉天下の才子學者を驅りて盡く小説家の範圍内に籠絡したるや。彼等は實に能く時世を知りたり。我も〳〵と旗押し立て〳〵打て出でたる小説家は盡く其望を達して天下に有名なる者とはなれりけり。併しそは一時の現象にして今より回顧すればはや四五年の昔にぞある

明治の文學再興より今日に至るまで未だ十年の星霜を經ざるに非れども強て之を言はゞ明治十六七年より四五年間は著しく進歩改良して年々歳々光彩の粲然を増すの感あり。明治廿一二年頃よりこのかた四五年間は漸次に其勢を減じて今日の萎靡振はざるを致せるが如し余は現今の小説界ほど熟睡したる活氣無きものはあらじと信ずるなり。今日の有名なる小説家は皆四五年前の小説家なり。間〻新參の小説家無きに非るも其名は廣く世人に知られず、假令廣く知らるゝとも其階級は從來の老朽小説家の下にあるが如し。然らば新參の若手は其技量學問經驗の果して老朽小説家に及ばざるか其著作する所の小説は文章に於て脚色に於て情感に於て果して四五年前の小説に劣れるか。余は斷じて其然らざるを信ずるなり。其人も遙かに昔日の人に勝りたり其著作も遙かに昔日の著作に勝りたり。而して昔日の人依然として其名聲を保ち今日の著微々として喝采を博せざるは何ぞや。天下少數の文學專門家は其如何に進歩し如何に發達したるかを知る而して世上多數の小説愛讀者は衆口一聲に今日は是れ小説の睡眠時代なりと稱するは何ぞや。此不可思議なる現象は文學專門家の胸中には暗々に理と情と相爭ふ所なるに彼等は猶其理を講究するの勞を取らざるが如し。是れ小説の睡眠したる所以にして亦吾人門外漢の頻りに剞劂を試むるの已むを得ざる所以なり。

明治のはじめに新聞なる者起り其後繪入小説入の新聞續々世に現はるゝに至りしかどもそは十餘年前の事にして精密なる年代記は余等の記憶に殘るべうもあらず唯東京繪入新聞、有喜世新聞抔いふ名のいと古めかしく覺ゆるのみ。されば其頃の小説にて如何なるものなりしか能くも知らねど文章は七五調（馬琴風）趣向は敵討御家騒動の類か或は之を應用したる維新戰爭の事かなりしか知らざれば雜報に氣の利た位の痴話に過ぎざりしが如し。（大阪にては今日も猶此域を去る事遠からずとか）然らざれば新參の若手は其技量學問經驗の果して老朽小説家に及ばざるか

其然らざるを信ずるなり。其人も遙かに昔日の人に勝りたり其著作も遙かに昔日の著作に勝りたり。而して昔日の人依然として其名聲を保ち今日の著微々として喝采を博せざるは何ぞや。天下少數の文學專門家は其如何に進歩し如何に發達したるかを知る而して世上多數の小説愛讀者は衆口一聲に今日は是れ小説の睡眠時代なりと稱するは何ぞや。此不可思議なる現象は文學專門家の胸中には暗々に理と情と相爭ふ所なるに彼等は猶其理を講究するの勞を取らざるが如し。是れ小説の睡眠したる所以にして亦吾人門外漢の頻りに剞劂を試むるの已むを得ざる所以なり。

明治十六七年の頃なりけん矢野龍溪の經國美談を著はすや明治の文學界は俄かに活氣を保ちたるが如し。蓋し其書たる脚色を西洋の歴史に取り文章を和漢折衷の新体にものせしかば其陳套を脱せし故を以て且つ又無骨なる書生にも適せし故を以て非常に流行したるものと見え再版三版と引き續きて出版せり。併しながら此書は恰も開戰の第一砲の如く號令を與へしのみにて今日の標準より云へば毫も小説たるの價値なきものなり而して明治の小説は實に明治十八年出版の當世書生氣質（春廼舍朧著）に始まるといふて不可なかるべし。此書の特質は趣向の世話物なりし事文章の雅俗折衷なりし事等にて如何に此二事が明治の小説界を動かせしかは其後三四年間續出せし幾十百の小説の皆此範圍を脱する能はざりしを以て見るべきなり。これより我邦の小説は一變して趣向は書生令嬢の情事、文章は地を古にし詞を今にし英語漢語を挿み……を附し思ひ入れを書く事と定まりしと共に小説界は皆〻繁昌し小説作者は益〻増加したり。

其次に小説界に新旗幟を立てしは二葉亭著はす所の浮雲なり。浮雲は文章を全く言文一致にしたるを以て從つて其觀察する所甚た細膩巧緻に赴き寫實的の如何なる者なるかを示したり。其次はやりしは紅葉山人の西鶴流にして新著百種の第一編なる色懺悔は先づ其の名を成したる者なり。西鶴流といへば新体にはあらねども西鶴の著書は世に流布するもの少くして且つ其格調餘りに他の者と變りたれば甚だ珍重がられたる者にして之に加ふるに紅葉山人の妖艶纖麗なる趣向は文弱に流れそめたる書生の弱點を突きし者と見えたり。さりながら色懺悔は今日より言へば尤幼稚にして當時と雖も稍心ある者は之を斥けたるが如し。小説の趣向は猥褻と限り小説の文章は柔弱と定まりたる眞最中に出でて之を翻へしたるは幸田露伴なり。露伴の小説出でゝ始めて小説にも高尚なる觀念なかるべからざる事適勁なる文字なかるべからざることを世間に吹聽したるなり是れ今日迄の小説界の最後の變化にして此後復一の大變化を見ざるなり。近時異種の小説例へば探偵小説鐵道小説の如き流行するの傾きありと雖も終に論評するの價値を有せざること勿論なり。

一流の小説家と稱せらる。八文字舍を學んで文章輕快諧謔湧出すれども趣向を立つる事極めて疎にして所謂西洋流の小説家に非るを以て大家たるに拘はらず一人の之を摸倣する者無きは亦奇と謂ふべし。此外東海散士の東洋之佳人思軒居士のユーゴー翻譯抔一時流行の者或は誰と云ひ彼と云ひ幾多の小説家ありと雖も孰れも小説世界を動かすに足らざるが如し。

国立国会図書館　タイトル『筆の命毛』　請求記号 WB12-40
ガラス使用

之を今日迄の小歴史に照し見るに今日は須らく一大變化あるべきの時なり。一大變化なければ此小説界の萎靡を回復すべからず。假令些少の變化と進歩とありとも以て名を成すに足らぬは時勢上恠むに足らざるなり若し此上一變化するの途無しとすれば一篇の大作出でざるべからざるなり。變化を以て人目を幻するは易し大作を著はして芳を千載に殘すは實に難事なり。大作とは何ぞ長篇の謂に非ず。寫實の謂に非ず。一時に流行し俗人の俗情を穿つ者に非ず。製本挿畫を美にし多額の原稿料を收むる者に非ず。必ずや識天地八荒を貫き筆江海の波瀾を捲き百世に獨歩して一時の毀譽を顧みざる者出でゝ而して後始めて大作大觀あるを得るなり、筆力能く波瀾を起すに足るも其觀察する所卑く且つ狹きは己に識に於て缺ぐる所あり。其觀念純粹高尚にして能く宇宙を總括するも文字富贍ならず措辭妥當ならざるは已に筆に於て缺くる所あり。筆力自在に觀念高尚なるも前後を顧み毀譽に關し一敗して挫け二敗して斃るゝが如きは已に氣に於て缺ぐる所あり。是等の人如何でか能く大作を爲さんや。

然らば今日の振はざるは全く右の大小説家無きによるかといふに大小説家はいつの世にも多き者に非れば無しとも亦可なり。今日の不振は別に一原因の存ずるものあるなり。請ふ之を説かん。

大小説家ありて小説を著はすは則ち自ら別なりと雖も其他に於ては競爭心なる者名譽心なる者ありて多少小説の腐敗を防ぐの一助となるものにして三四年前迄は猶ほ競爭心等の爲に著るしく進歩せしものなり。然るに今日の小説界は實に此競爭心と名譽心とを失ひ盡したり。若し之れ有りとすれば或は却て池中に蟄伏するの潛龍に在るものにして已に文壇に旗幟を翻へしたる老將の上にはあらざるなり。試みに見よ所謂文壇の老將は那邊に在りて何事を爲しつゝあるかを。

余は小説界の事情に疎き爲に其精細なる報告を爲すを得ずと雖も有名なる小説家が一團結を爲して天下を横行するは萬人の知る所なるべし。外面の形迹上より言はゞ村山龍平なる一富豪が其金力を以てあるとあらゆる有名なる文學者(主として小説家)をおのが手下に網羅したるものにて大坂朝日東京朝日國會の三新聞に從事する小説家は自ら打つて一丸と爲されたるの觀あり之を名づけて小説家買占策と云ふ。坪内逍遙森鷗外尾崎紅葉等の三派を除きて外は多く是れ小説家買占策の餌食になりし者にて其人々は誰々なるか枚擧に堪ねばこゝには言はず知る人は知るなるべし。此小説家買占策こそ實に競爭心と名譽心とを減じ今日の小説界をして寂々寥々起たず振はざるの極度に墮落せしめたるものにして憎しとも又憎き小説界の罪人なり。或人曰く買占策なる者何故に悪むべきか。曰く月々二三十圓乃至七八十圓の月給を與へて之を聘し而してこれに賦課するの事業は極めて少し。是に於て小説家皆懶慵に馴れて終に意匠慘憺の名篇を出さゞるなり。或人又曰く貧困に追はれ金錢を的にして著作するは名篇の出る所以に非ず。之に給して飢ゑず之に施して足らざるなきに至つて後偶〻大作を見るべきのみ。然らば則ち所謂買占策は保護策に非るか。曰く買占の二字は保護に非る所以なりと雖も彼等商買的の掛引に至りては敢て其意思を問ふに遑あらざるなり。唯學有り識有るの小説家諸氏にして此罠に罹りたるこそ恨めしけれ。然れども文學者の窮乏に陷りて驥足を伸ぶる能はざるは或人の云ふ如く千古の遺憾なれば之を養ひ之に給して安樂に世を過さしむるは意思は兎に角形迹上立派なる所行にして文學者のこれに蟻附するも無理からぬことなりされば小説家は其本分を忘れず善く買占策を利用して以て大著述を爲すの心がけを怠らずんば則ち或人の云ふ保護策に外ならざるなり。

右は單に外形の團結を論じたる者なれば皮相之を見るの譏を免れず。如何に外形の團結大なりとも内部に於て團結する事無くんば團結無きと同じ事にして買占策は却て保護策たるに相違なきなり。然るに競爭心と名譽心とを失ひたるは外部の團結に非ずして重に内部の團結に在るなり。斯く言へばとて文學者の相互に交際するは嘉すべき事にして悪むべき事には非れども如何せん彼等は已に第一流若しくは第二流あたりの位置に昇進し居る者なれば名も無き葉武者共と競爭するの必要なく又其已に得たる名譽は殆んど頂上に達せし者なれば唯之を失はざらんと勉むるのみ。而して已と競爭し已が名譽を奪ふべき程の剛の者は皆已等の一味の者のみなれば彼等は悠々閑々として枕を高うし睡を貪りて時に洒落を鬪はし酒量を誇るの兒戯を爲すに止れるが如し。若し當世流の言葉を以て之を言はゞ慥かに小説家の藩閥を爲したるなり。彼等が狂言綺語と云ふが如き樂屋落ちの雜誌を發行して世人を愚弄するは恰も昔の藩閥政府が園遊會舞踏會を興行して自ら天下太平を謳ひしに能く似たり。天下有爲の少年將に戈を倒し旗を伏せ敵の虚に乘じて此藩閥を滅ぼさんとする者の多き知るべし。然れども余は此藩閥を以て老朽事に堪へずとするに非ず。却て一二の豪傑の此團体中に在るを認むる者なり。唯彼等の今に於て警戒する所あり以て他日噬臍の悔を遺さゞらん事を望むのみ。

国立国会図書館　タイトル『筆の命毛』　請求記号 WB12-40
ガラス使用

●文界八つあたり

（五）院本

地風升稿

此表題の内には淨瑠璃の各種類は勿論謠曲狂言琴唄端唄の類をも含ましむるの意なれば院本と云ふ語の不適當なるは言ふ迄も無き事なり。要するにこゝに論せんと欲する所は獨立したる純粹の文學に非ずして半は文學に屬し半は音樂又は所作に屬する一種の合同美術中に就て其文學に屬する部分のみに關するなり。

此中にて世人の最大切とする所は演劇脚本なり。然れども余はこゝに詳論する能はざるなり。何となれば第一余は演劇の事に通ぜず第二今日の演劇は益〻文學に遠さかるの傾向あればなり。言新らしく言ふに及ばねども近松巢林子の戯曲が如何に普通の小説に類似せるかは之を一讀せしものゝ熟知する所なり。其弟子なる竹田出雲の作を見れば已に判然たる演劇の体裁を成して其小説に遠ざかる處之を巢林子に比して啻に霄壤の差のみならざるなり。下りて鶴屋南北に至りては全く舞臺上の活用をのみこれ務めて文學臭味は一切之を脚本中より追放したるが如く而して其傾向は益〻一方に趨りて終に今日の所謂活劇となりしものなるべし。

一口に言へば近松の頃はチョボ多かりしものが段々に減じて終に皆無ともいふべき程になり從つて直接の對話のみ多くなり行きて恰も西洋の演劇に類似し來りたり。而して戯曲中尤詩歌的の分子多き處は常にチョボ（殊にサワリ）に存するものなれば近松の戯曲が舞臺に上る事少きにも拘らず叢書として盛んに防間に行はるるは怪むに足らざるなり。加之演劇は文學外のある一種の趣味を以て發達し來り知らず〳〵文學と分離し近松等の淨瑠璃と踈遠になるにつれて其流行おくれの淨瑠璃は亦演劇を離れて一種特別の技術として其音節と樂譜とをのみ殘すに到れり。世の所謂義太夫語（又は淨瑠璃語）とて寄席抔に興行するもの是れなり。

右の如き次第なれば一方に於ては文學趣味少き當今の演劇脚本は文學者の補助を借るにも及ばず又一方に於ては詩歌的妙致多き古代の戯曲は最早舊時の廢物なればこれを研究し之を摸倣するの價値を失ひたるが如き觀あり。これ余が漫に世上の文學者に向つて猛省を請はんとする所以なり。舞臺の活動を務むるには演劇の事情に通ぜざるべからざる事勿論なりと雖も單情に通じたりとて演劇脚本を作るべきに非ず。文學なき演劇通の作は演劇に通ぜざる文學者が盲滅法に作りし脚本に劣る事萬々なるべきなり。文學といひ演藝といひ全く外形を異にすると雖も其幽妙不可思議なる極意に至りては豈二致あらんや。今日有爲の文學者は何にでも手を出す癖あるに演劇に限りて空しく之を櫻痴百川の二老に委して其上汁をだに吸はんとせざるは何故ぞ。衣裳の好み囃子拍子等は一切之を知らざるも可なり其道の人あればなり。假令今日の舞臺に上らざるも可なり百年の知己を待つべければなり。吁多藝の文學者よ何を苦んでか寶の山に手を入れざる。

又古代の淨瑠璃舞臺より落ちたりとて抛棄するは甚だ聞こえぬ次第なり。現に寄席に興行する語り物を目的として一段物の新作を作るも亦文學者の一事業にあらずや。近松風の戯曲を稍修正して一種小説の新体と爲す亦太だ奇ならずや。請ふ芝居以外に一種の美術（即ち義太夫語）を生ぜしを忘るゝ勿れ。又脚本以外に一種の文學（古風淨瑠璃）を生ぜしを忘るゝ勿れ。

世人は又近松等の戯曲を古代の人形芝居の遺物として之を愛し敢て一新文學として之れを見ざるが如く彼謠曲（能樂）に就ては足利時代の古樂といふ外何等の觀念をも有せざるが如し。若し演劇は能樂の發達したるものなりとて彼を取り之を捨つるの人あらんには是れ俳句起りて和歌を捨て川柳起りて俳句を捨つると一般誰か其妄を笑はざらん。俳句の趣味は自ら和歌に異なり演劇の妙處は自ら能樂に異なり、各其長所〳〵に向ふて進歩せしものなれば今日に於て單立偏廢の沙汰はあるべからざる筈なり。且つ世人の能樂を嫌忌するは毫も能樂の高尚優雅なる妙趣を解せざるにあるなり。見よ彼等の誹る所を聞けば曰く千篇一律なり曰く荒誕不稽なりと。何ぞ其辭の窮するや。これ今日の文學者と雖も常に口にする所なり。千篇一律ならば新趣向の謠曲を作るべし、荒誕不稽ならば人情的の脚色を創造すべきなり。若し夫れ能樂を評して遲々の歩喃々の語終に文明の舞樂に非ずと云ふが如き所謂大聲俚人の耳に入らざる者豈齒牙に掛くるに足らんや。

謠曲戯曲のみならず其他百般の音曲類に至りても猶文學者の一臂を要する者實に多し。而して文學者は少しもこゝに注意せざる者の如し。彼長唄端唄の書を繙くも猶多少の名文ありて中々新詩人の手に合はぬと見ゆるも少からず。所謂新體詩家なる者將に何を爲さんとするか。

●文界八つあたり

（六）新聞雜誌

地風升稿

明治世界の一現象にして古の文人雅客達が夢想にも知り得ざりしものは活字の利用と從つて生ずる新聞雜誌の夥しきことなり。百年前に京傳輩が頻りに黃表紙を刊行して時世の進歩を重寶がりしも今より見れば兒童の戯れに等しくはた嶋保巳一が千辛萬苦して群書類從を出版せしも今の世に生れしめば半分の難儀で續類從をも出版すべかりしをと悔むなるべし箇樣に便利なる

国立国会図書館　タイトル『筆の命毛』　請求記号 WB12-40
ガラス使用

世に生れたる若人達は古人が一冊の黄表紙に用ゐしだけの心遣ひも知らで何でも彼でも草稿のまゝで早く世に廣めて我れさきに高名を得んものと競ひに競ひて無數の新聞雜誌は世に現はるゝに至りたり。前後の考へもなく發行せられたる其無數の新聞雜誌は血氣の若武者が敵陣目がけて一騎討ち入りたるが如く大音あげて名乘りもあへず立どころに屍を戰場にさらして空しく十號新聞三號雜誌の汚名を留めたるは實にあはれとも氣の毒の至りなり。されば其の無數といふものも同じ新聞雜誌の永續するにはあらで甲仆れて乙起り前軍斃れて後軍進み常に新陳代謝して少しも住まる事なきが如し。

文學專門の雜誌ありて文學專門の新聞なきは新聞の性質已に然らしむる所なれば新聞は文學上左迄の大關係を有せざるが如くなれども退いて全く文學趣味を有せざる新聞ありやと考ふる時は其殆んどこれ無きに驚かざるを得ざるなり。新聞の中普通に賣高の多きは所謂大新聞に非ずして却て小新聞にあり。試みに小新聞を取て之を覩よ。其一半は小說と繪畫とを以て之を塡め殘る所の一半も多くは一種文學的の雜報を以て充たされたり。彼大新聞すら或は繪畫を挿み或は詩文歌俳を載せ或は隨筆歷史談の類を掲ぐる者比々皆是なり。如何で新聞を以て全く文學界の外に退くるを得んや。然れども新聞文學は多く蕪雜粗放なるものにして時として嘔吐を催す者さへ少からず。終に之を批評するの價値を有せざるなり。世人も亦一度見て二度と讀まぬものなればとて之を恕するが如し。獨りこゝに惜しむべきは彼新聞小說なり。新聞小說は一日の紙上を一回と限るの窮屈さへあるに況して插畫ある者に至りては日日畫面を變化せざるべからざるを以て其小說の局面も亦否でも應でも變化せざるを得ざるなり。されば新聞小說は新聞の上でこそ一應尤もなれ一たび新聞の上を離れては復完全なる小說といふべからざる筈なるに是等の小說は盡く再版して一册の小册子と成るは何事ぞ否そは兎も角も頃者出版せらるゝ小說といへば必ず新聞小說の翻刻にのみ限りたるは不思議千萬の事ならずや。今日の小說界は眞に新聞文學の一部分として僅かに其命脈を繫ぐものといふべし。

文學專門の雜誌は柵草紙早稻田文學を以て尤有名なるものとす。各一長一短はあるべけれども雜誌の體裁に就きて云へば早稻田文學の方稍完備せるが如し。即ちこれ此雜誌の長所なり。然れども此二雜誌は文學の批評を主とする者にして文學上の著作を載する事極めて稀なり。文學上の著作を載する雜誌は其數に於て少らざれども一の完備せる者を見ず。近者發行する所の「この文」の如き「文海」の如き其他何といひ彼といふもの盡く以て文界の中に雄飛すべきものに非ず。況して彼

雜誌は誰々の機關雜誌なり此雜誌は何某の幾屋雜誌なり抔いふ毒評は到る處に專稱せざるなし。三號雜誌の運命以て卜すべきなり。若し夫れ入花を取りて發行する俳諧雜誌に至りては其數幾千萬ありとも終に商賈が配布する大安賣の引札に異ならざるなり。豈之を文學といふべけんや。

文界八つあたり

地風升稿

(七)學校

普通に稱ふる所の文學なる語に兩義あり。一は技藝に屬し一は學問に屬す。技藝に屬する者は詩歌文章を作り小說戲曲を著すの謂にして學問に屬する者は古今文學上の著作を研究し併せて美辭學審美學等に涉るの謂なり。技藝は自ら以て其妙趣を解すべし他より之を敎ふ可らず。學問は益〻勉めて益〻深く愈〻勵みて愈〻達するものなれば眞師に就き百書に涉りて始めて其蘊奧を究むべし。されば技藝と學問とは個々特立して相互何等の關係を有せざるが如しと雖もそは兩者の極端を論ずる者にしてある一點迄は兩者提携して全く相依り相扶くる者の如し。詳に之を言へばある程度以内に於ては學問ある者技藝に進み、技藝に進む者即ち學問の深き者なりと斷定するを得るなり。故に文學的の技藝もあながちに之を敎ふるの方法なきにあらず。是に於てが文學專門の學校在り。

文學專門の學校にして東京府下に設立せらるゝ者多しと雖も或は其程度低く或は其課程一方に偏して完全なる者あらず。中に就きて先づ体裁を具備したる者を擧ぐれば官立に文科大學あり私立に東京專門學校文學部ありて相對峙するの勢をなせり。今此兩校を比較せんに文學全体の体裁より言へば文科大學の專門學校に勝る事萬々なり。前者は國文漢文英文佛文獨文〈哲學歷史博言は之を除く〉の數科あれども後者は混然たる一文科あるのみなればなり。然れども其中尤重要なる國文學を取りて之を比較し來れば其体裁上に於て大學遙かに專門學校に劣りたるを見る。專門學校の課程を見れば苟も文學に關する者は古今と雅俗とを問はず盡く之を網羅するの傾あり。然るに文科大學の國文學なる者は全く古文學にのみ趨りて絶えて近世文學の課目ある事なし。而して其古文學なる者は實に王朝時代の文學にして鎌倉時代に至りては毫も之を顧みざるが如し況んや德川時代をや。鎌倉足利は文學隆盛の時代に非ざれば研究するの價値なしとするも可なり。又之を研究するには獨學にても可なるべし。獨り德川文學に至りては文學の發達著しきのみならず萬事複雜に趨きたれば先輩に就きて研究せずんば毫も解すべからざる者少しとせず。然るにこれを捨てゝ塵芥の如く見るは實に大學の一大缺點なり。又た一般に學生の學識と品格

国立国会図書館　タイトル『筆の命毛』　請求記号 WB12-40
ガラス使用

とを評すれば專門學校は遥かに大學に下れり。これ其の學生を入學せしむるの程度非常に低きが爲めに來たしたる結果にして專門學校の缺點は實にこゝにありて存するなり。

兩校各〻缺點あれば其缺點をして完備ならしめん事余が兩校に向つて希望する所なれども專門學校に向つて俄に學生の地位を高尚ならしめよと言ふは實に卵を見て時夜を求むるが如く無理難題たるを免れず。蓋し此事たる其根底よりして改革せざるべからざるを以て一朝一夕に之を求むべからざるなり。然れども大學に向つて其學課を改正せよと望むは前者に比して甚だ容易なる者なれば余は先づこれよりして始めんとするなり即ち文科大學國文學中に近世文學の一科目を加ふる事これなり。而して之れ實行せんとするには近世文學の教員を聘し近世文學の書籍を備ふるの二事を爲さゞるべからざるなり。

人有り。難して曰く其言是なれど時勢之を行ふ能はざるを奈何。第一財政の困難なり第二其師の欠乏なりと答へて曰く文科大學に冗費あるは人の知る所なり。盍ぞ彼老朽事に堪へざる門閥的教授を罷めて之に代ふるに二三の講師を以てせざる。其餘財を以て更に二三の近世文學の講師を聘するは實に容易の事業なり。第二の故障に至りては實に難者の如しと雖もさりとて之を置かずんば何れの日か其師を得るの期あらや。況んや其師に乏しと言ふとも今日現に教授に在る某々位の人物には乏しからぬをや。

其他文科大學の漢英等の文學に至りても不完全なる事少からず第一其師を得難き事（外國人を萬里の外に求むる故撰擇し難きなり）第二學科の權衡を得ざる事（國文學中に英文の課ありて英文學中に國文の課無きが如し）等の缺點あれども外國文學は直接の必要なければこゝに言はず。

（八）文章

文章は總ての文學に必要なるは云ふ迄も無く文學以外に在りても常に用ひらるゝものなり。若し文章なる者の利用を列擧し來れば法律の明文、裁判の宣告、日用の書信、新聞雜誌の論說雜報より金銀貸借の證書、開店賣出しの披露引札に至るまで數も限りも無き事なるべし此等は固より文學とは云ふべからざる者あれども若し其物の中より特に文章といふ一部分を取りて之を吟味せんには多少の文學思想を以て開拆せられざる者はあらざるなり。

其言ひ現はすべき事物と目的とによりて文章の体裁を異にするは文字を有する各國皆相同じと雖も我邦の如く差違の甚だしく種類の多き者は未だこれあるを聞かず。其種類の大略をいへば

◎純粹の國文　我邦古代の言語文章にして後世に至る程之を用ふる者少し。今日に在て之を用ふるは和歌及び其の端書か或は特に古文辭に擬するの時にあるのみ此体は優美なれども言語簡單にして複雜の意想を述ぶるに適せず。

◎純粹の漢文　美辭學としては漢文程簡潔なる者他にこれなけれども外國の文なると且つ古文をのみ遵奉するを以て自在に之を應用する事能はず。今日用ふる所は碑文、書籍文章の表題清國人との筆談書信の往復等の外或に漢學者が特に漢詩漢文を作るにあるのみ。

◎純粹の英文　英米人に與ふる書簡の外は外國人に示すべき著書か或は英學修業の自慢の爲か或は洋行歸りの人が我邦の文章を作り得ずして已むを得ず之を用ふるのみ。佛文獨文は英文に比すれば更に少し。

◎漢文の假名くづし　漢文をくづして單に假名を交へたるものは莊重を主とする時にのみ用ひらる。例へば勅諭法令等の如し、但し法令は時により和習を帶ぶる者少からず。

◎直譯体　こは明治に出來たる一種の文章にしてつまり英文の直譯より始まりたる者なり。文体よりいへば……デアル、……スペクアル等の類にて又これより出でたる新熟語を擧ぐれば「名譽を犧牲にして」「世の風潮に捲き込まれて」の如し。此流の文体を用ふるものは多く漢文も國文も知らぬ無學者連中なりとす。

◎新聞体　新聞の文章固より時と處によりて異なりと雖も亦他の文体に紛れざる一種の特性あるを見る。即ち此文体が今日最普通のものにして解し易く且つ廣く行はるゝが如し。

◎書簡文　維新前の体裁を傳へて今に變ぜざるものは書簡文なりとす。されどもこれも亦半分は變じて新聞体を書簡体に和らげたるが如き者となれり。

◎言文一致流　言文一致の文章作者に三種の區別あり第一は言文一致より外に文章を知らぬ者にて例へば三遊亭どんの手紙の如し。第二は多少の文字ある者が故に言文一致体を作るものにして今の所謂言文一致流の小說家の如し。第三は言語を其儘筆記したるものにして落語家講談師の筆記ものゝ如し。此中望を屬すべきは第二種の作者なれどもこれも時として第一種の作者に近き事あり又た第三種の作者に劣るものは少からず故に今日にて言文一致といふ事は一概に輕蔑せらるゝの傾きを有せり。又言文一致には必ずしも言葉通りの文章に非ずして直譯体杯の混淆したるもの多し。

此外文學者が美文的に用ふるものは古体あり今体あり西鶴あり馬琴あり鷗あり折衷あり。實に千種萬樣にして一々之を區別する能はざるなり。

国立国会図書館　タイトル『筆の命毛』 請求記号 WB12-40
ガラス使用

人あり曰く近時の文体は亂れたり今にして之を矯正せずんば終に回復す可らざるに至らんと。其言や善し其標準を問へば漠として歸する所を知らず。而して此の如き説をなす者は多くこれ所謂國學者流なり。國學者の言ふ所一理なきに非ずと雖も言文一致家者流の言ふ所亦一理あり。要するに各種の文体皆それ〳〵の長所あれば須らく其長所を利用して或は優美に或は繊細に或は簡雅に或は穠艶に以て他の文体の及ばざる所を補益すべきなり。或は各種の長所を取りて一種折衷の新体を作るも固より望しき所なり。必ずしも國文者流の如く千年前の死文法を復活するに及ばず。蓋し文法は時代と共に推移する傾向を有すればなり。必ずしも言文一致者流の如く文章と言語と一致するに及ばず。蓋し最多數に解し得らるゝ文章は多く最上の文學ならざればなり。

文界八つあたり

地風升稿

結論

三人よれば則ち曰ふ天下名文章なき事久しと而して久しと云ふ所以の者を探れば僅々二三年の事のみ。更に其着眼の大なる者を求むるも猶明治二十餘年の日月を指すに止まるなり。如何に古來文學隆盛の時代と雖も所謂大詩人大文章家大小説家が二十年に一人の割合を以て一國の内に生れ出でたる例を聞かず。其古に多くして今に少しとする所以の者は歴史上の星霜は百年猶瞬間の如く吾人が經過する現在の光陰は一日旦つ千秋の思ひあるによらずんばあらざるなり。されば明治廿餘年間に一の大文人無き亦怪むに足らず。況んや維新革命の後を承けて紛々擾々の間に十餘年を經過したるをや。見よ詩人文人の外に大の字を冠らしむべき學者工藝家ありや否やを。

大學者大工藝家無きにも拘らず明治の學術工藝が明治以前の學術工藝に勝る事萬々なるが如く明治の文學も明治以前の文學に勝る事遙かに數等の上に在るべきか然りある點に於ては數等を躍えたり。例へば小説に就きて言はんに理想にもあらず寫實にもあらざるローマンスの如き舊套の外に理想を主とする者寫實を主とする者等の數種を生じたるは著るしき發達の證徴なりとす。併しながらこは時勢に應じて論ずべきものなれば今日のデモ小説家が馬琴を誹りて彼は趣向に窮する毎に神力妖術を假り來りて以て全篇を奇々怪々の間に結ぶの窮策を取れり我をして彼時に生れしめなば新奇の小説を著して彼が名聲を壓倒せん事手の裏を返すが如し抔と高言するは以ての外なり。知らず馬琴をして今日に生れしめなば彼は如何の筆力を揮ふて世上の群小を壓倒せんかを。況んやある一點を除けばデモ小説家の馬琴に及ばざる事數十等なるべきをや。

古今の詩文の短處を概言すれば古の文學は文章の爲に趣向を束縛せられたるの趣向あり。故に文章は變化して趣向は變化せざりき。今の文學は趣向の爲に文章を束縛せらるゝの傾向あり。故に趣向は變化して文章は變化せざるが如し。其兩方の極端を論ずれば馬琴が椽大の筆を揮ふて得意に書き去り書き來るの時は彼の胸中只妙辭巧詞のみあつて毫も趣向なる者なきの時なう今の言文一致家者流が精細なる觀察力を以て得意に書き去り書き來るの時は彼の腦中只心理的解析の苦慮のみあつて毫も文章なるもの無きの時なり。趣向と文章の輕重は容易に明言し難きも兎に角兩者共に完備せざれば完全の文學となすべきにあらざるを以て此點より言へばいづれも多少の不具たるを免れずと雖も其不具の度を論ずれば今の小説程不具なるものはあらじと思はる。恰かも吶辯者が思ひ餘りて言はんと欲すれば益〻口吃するが如し。

明治以來大文學を渇望せる世上の讀者は此不具なる文學の群集中に一偉人を見出さんとして常に刮目しつゝあるは大旱に雲霓を望むが如きの有樣なり。目あつて鼻なき者、耳一つにして口二つある者、高樹の菓實を採らんとして採り得ざる侏儒、三尺の小川に逢ふて飛び越さんとして飛び得ざる跛躄、これ等の廢疾はすべからく去つて鸞鵠と與に一枝に安んずべし。垂天の翼を放ち扶搖に搏つて南溟を圖るの大鵬化して大文學者となりたる者は知らず今何處の僻隅に潜伏しあるや（完）

国立国会図書館　タイトル『筆の命毛』　請求記号 WB12-40

ガラス使用

◉芭蕉翁の一驚　　地風升

元祿七年俳諧正風の開祖芭蕉庵桃青歿せしより力なき年々の時雨も人の嘘にふりそめてはや二百年とはなれりける、二百年忌は二百年忌なり、昨年の百九十九年忌も來年の二百一年忌も何の變る事あるべき。變る事なき二百年忌をヤレ廟を建つるのヤレ碑を立つるのと騒ぎまはりてはては其の身に落ち來るそこばくの口錢これも松尾大明神のお蔭よと笑ひなから床の間の肖像に對して赤い舌を出して見せた處で蕉翁たゝつく然として一語なし。物いへば唇寒き此頃の時節柄思ふ腹をふくらかしていひ度き口を無理につぐめらるゝか、さりとてこれ位惡口をついても別にお腹立の無きは、アヽ分つたりさすがの芭蕉殿も死しては靈無きものと見えたり、をかしや〳〵とある宗匠はつぶやきぬとか。それも理り、此頃の樣に東京許りにても數百の宗匠ありと聞けば如何に一体分身が出來るとて芭蕉翁中々に忙しく一々平凡宗匠の肖像へ魂を分けて乘りうつる程に手のまはらぬ仕誼なるべし。

芭蕉翁ある日天氣のよきまゝに地獄と極樂の中頃の處よりブラリと立ち出で給ひ、今日はどこの肖像へ魂入れに行くべきやと抜け裏のはとりにてまでつき給ふ折から俳諧師を顔にぶらつかせデモ宗匠、俗氣の上に被布をかぶせていそ〳〵と來りければ暫らく彼の行く處へ行かんと後に跟きて窺ふ間もなく彼はとある家に這入りぬ。竊かに格子の外に立て聞き給へば内には數十の人々聲々に　甲「元來我々は正風なれども何分にも蕉翁の句の分らんには困る第一世人に古池の講釋を聞かれるには閉口するよ　乙「イヤ俳諧の古池よりは川柳の居候の方が面白いのさ併し居候では飯が喰へぬ故已むを得ず正風の看板を掛けて居るのだが　丙「古池よりも川柳よりも月花よりも可愛いのは團子と金よ、其金がはしさに此春より急に宗匠と拵へて二百年忌の廟を建築しやうと思ふがどうだろう　丁「廟よりは石碑がよからう、石碑はやりの世の中だから　戊「石碑では儲けた處が知れたものだ廟でなくては　已「イヤ廟を立てるとは山が過ぎるよ　庚「イヤ石碑だと爭論湧くが如くはてし無ければ今迄ツッとこらへし蕉翁の癇癪玉忽ち破裂し門をはねあけて内に入り一聲高く「汝等集りて何をか語る我こそ松尾芭蕉なれと叱りつくれば皆々打ち喜び「誠に善くこそ御光來下された、先づさしあたり今年の儲けは廟が善いか石碑がよいか御當

国立国会図書館　タイトル『筆の命毛』 請求記号 WB12-40
ガラス使用

人様の御差圖を願ひたう厶り升と平氣で逃べたるに芭蕉翁も餘りの事とアッケにとられて何の返事もなく匆匆立ち去り給ひぬ

其翌日六道の辻の黄泉社より發行する冥土日報第十萬億號を見るに二號活字の廣告を掲げたり

近頃拙者名義を以て廟又は石碑抔を建立する由言ひふらし諸國の俳人にねだり金錢を寄附せしむる者有之由聞き及び候得共右は一切拙者に關係無之候得者左樣御承知被下度此段及廣告候也

大日本明治二十六年月日　松尾桃青　白

春色秋光（一）　地風升

美術てふ語の一たび外邦より輸入し來りしより我國在來の美術は外邦の美術に比して甚だ劣等の地位に在りといひ或は我國の美術殆んど美術にあらずとまで極言するに至りたり。而して彼が說く所如何と見るに終に枝葉に流れ分析に過ぎ却て要點を取て一言に撮開し去る者少しとせず。僅かに英字を解する者翻譯書を讀み得る者乃ち曰ふ人間を說くは人間最上の美術なり、人間を說く者ドラマに如くはなし、故にドラマは人間最上の美術なりと。而して此前提は更に如何なる前提より結論し來れるかを知らざるなり。焉んぞ知らん人間は宇宙の一部分にして所謂天然界は渺々漠々人間の四邊に際限も無く廣がり居るを。人間界は善惡混淆眞僞錯出して榮枯盛衰は朝、夕を計らず一生一死は百年の瞬間を保つ能はざるに獨り天然界は一定の時間に一定の變遷を經、江上の清風と山間の名月とは千古依然として取れども盡くるなきに非ずや。彼バイロンが大洋は浮世の境なりと諷ひたるサウセーが神の田舍、人の都府と口ずさみたる其眼光能く人間以外に眞の美なる者を發見したるに非ずや。されば小說家が人間を開剖すると同く詩人は古來天然を開剖して止ざるなり。

世上能く幾樣の人間を生出すかは大体の問題にして天然界能く幾樣の事物を包容するかと云ふに異ならず人に大人君子あるは地に高山大川あるが如し。人に柔順なるあれば地に柔順なるあり、人に險惡なるあれば地亦險惡なる處あり。是れ常人の能く知る所なり。又同一の人にして時と處とに從ふて變々化々ずるは其變化小なるが如くにして却て大にこれに對する感情も亦微なるが如くにして却て劇なり。此變化を稱して喜怒哀樂と云ふ。同一の風光にして時に從ふて變々化々するは亦人心を感動する甚だしく知らず〳〵の間に其結果を見る事多し。此變化を稱して春夏秋冬と云ふ。天に春夏秋冬あるは猶ほ人に喜怒哀樂あるがごときなり天然界の變化は固より四時の循環に止まらず驟雨の沛然として來る暴風の颯然として吹く見る〳〵歡嬉娯樂の天地を變じて悲慘憂鬱の乾坤となす者少からず。然れども是れ須臾頃刻の現象にして短きは朝を終へず長くも數日に渉るに過ぎざるなり。故に其變化の長き者を取つて春夏秋冬といひ更に中に就て春秋二期を擧げてこゝに其比較を試みんとす。蓋し春は陰漸く消し陽漸く長するの時、秋は陽漸く衰へ陰漸く驕るの際なるを以て其變化は感じ易くして且つ適度なれば吾人の爽快を感じ悲壯を感じ綺麗を感じ清婉を感ずるも皆此時機を以て最となすが如し。而して春を愛する者は秋を

国立国会図書館　タイトル『筆の命毛』　請求記号 WB12-40　　ガラス使用

愛する者と孰れか多き。秋を愛する者は春を愛する者と氣質に於て如何の差違かある。是れ吾人のこゝに研究せんと欲する一疑問に過ぎざれども深く思ひ熟ら考ふれば終に美術界の大問題に屬するを見るなり。

春色秋光孰れか勝れるの論は千年の昔に於て早く已に天然界の研究熱心なる日本人種の頭腦を打ちしと見え萬葉集は左の一首の歌を掲げたり。

天皇詔内大臣藤臣、競憐春山萬花之艶秋山千葉之彩時、額田王以歌判之歌

冬ごもり春さりくれば　鳴ざりし鳥も來鳴きも
開ざりし花も咲けれど　山をしみ入ても取らず
草深み手折りても見ず　秋山の木の葉を見ては
紅葉をは取りてそ忍ぶ　青きをば置きてそ歎く
そこしうらめし秋山われは

●春色秋光（二）　地風升

萬葉の歌が斷定せし理由は實に幼稚なりと雖もしかも其結句は秋光の優れる事を明言したるなり。これを當時の思想にあはせて考ふれば此理由は眞實の理由にあらずして作者は唯美術的感情的に青山紅葉の絶勝を愛する事深かりしを知るに足れり。萬葉時代の感情斯の如し。而して今日は如何。試みに之を千萬の人に問はん、春色と秋光と孰れか感を與ふる事深きと。苟も多少の詩趣を解し文字を識り得たる日本人は概して「春色は艶にして俗に失す、秋光は悲にして趣あり、我は寧ろ陽春を捨てゝ悲秋を取らんといふや必せり。是れ果して人間一般の通情なるか。下等社會は必ずしも然らざるなり。然らば則ち中等社會若しくは學者社會の通情なるか。歐米人は必ずしも然らざるなり。否彼等の多數は熙々たる春光、爛漫たる萬花を以て一年中の最愉快なる時期となすものなり。是れ本邦の美術と歐米の美術と自ら撞着を生ずる所にして而して吾人の其解釋を試みんとする所なり。

此感情の撞着を解釋せんと欲せば先づ感情を惹起すべき材料を取て精細に比較せざるべからず。因て左に概略の比較表を示さん

春

一氣漸く暖なり
一細雨恨むが如し
一獸は　妻戀猫　孕鹿
一鳥は　鶯　雉　雲雀
　鳥雛　燕來る
一魚は　白魚　若鮎
　柳魚　櫻鯛
一虫は　蝶　蜂　虻
　田螺
一花木は　梅　椿　梨
　杏　李　桃　櫻
　（若葉）
一木實は　○
一花草は　蓮花艸　菫
　茅針　菜花　山吹
　福壽草　薔薇
　藤（？）（土筆）
一木は漸く芽ざし　草は漸く萠ゆ

秋

一氣漸く冷なり
一狂風怒るが如し
一獸は　妻戀鹿
一鳥は　鴈　鶺鴒　鴫
　雁來る
一魚は　鰯　鱸　溢鮎
　鮭　紅葉鮒
一虫は　松虫　鈴虫　蟋蟀
　蜂　蟷螂
一花木は　木槿　木犀
　（紅葉）
一木實は　栗　團栗　柿
　椎　榧　胡桃
一花草は　蕣　萩　尾花
　女郎花　紫菀　雞頭
　花藤袴　桔梗　野菊
　菊　蘆　（茸）
一木は漸く落ち　草は漸く枯る

以上は其要を摘みたるなり。第一項の氣候漸く暖を催すと漸く冷を生ずとは其順序を轉倒したるまでにて差引勘定は同じ譯なり。即ち早春の候は晩秋に比すべく晩春の候は早秋に比して大差なき者なり。然れども陽次第に盛なると陰次第に盛なるとを見て人間は其順序よりして未來の命運を豫想するを以て其に對する感情は天地霄壤の差を生ずるが如し。春氣始めて催すの候に在りては陰の盛なる事更に秋風肅殺の時よりも甚だし。然れども陽氣漸く勝つの未來を想像して望を屬するを以て人は多く爽快を感ずるなり。秋風漸く一葉を落すの候に在りては陽氣の驕ること更に春光駘蕩の時よりも甚だし。然れども金氣漸く威を振ふの未來を想像して早く零落を憐むを以て人は多く悲哀を感するなり。最後の一項草木漸く萠芽を生ずると漸く凋落するとは固より同一の光景なるを只兩端より倒まに現はし出だすを以て第一項と同じく一は爽快を感じ一は悲哀を感ずるのみ。故に此二項は風光其物が直接に吾人の耳目に反映して生ずる結果に非ずして間接に風光より吾人が連想する主觀的の觀念に外ならず。然り而して吾人々間が春色と秋光に對する感情の大本は實に此二項に基せりと斷言せざるを得ざるなり。（詳細は後段に說かん）第二項の謂ふ所細雨狂風は殆んど偶然の現象とも稱すべき者にして左迄の影響ある者に非ず。さて獸鳥魚は如何花草花木は如何。

国立国会図書館　タイトル『筆の命毛』　請求記号 WB12-40
ガラス使用

●春色秋光（三）　地風升

獣類には概して春秋の區別少し。論ずるに及ばず。鳥類にも著るしき差異は無けれども春鳥は羽毛の色うつくしく綠なるもの赤きもの紺なるものなどありて其聲も流滑宛轉愛すべし、秋鳥は其色茶褐色のもの多く其聲は哀叫悽鳴悲むべし。然れどもこは其一斑を論ずるものなれば此例に外れたる者多からん。

魚類は春に川魚（小魚）多くして秋に海魚（大魚）多し。

蟲類は春秋二期に在りて全く其趣を異にす。春蟲は其形を見て其聲を聞かず、秋蟲は其聲を聞きて其形を見ざるなり。故に春蟲は晝に於てし秋蟲は夜に於てす。一團の胡蝶翩々として風裏に戯れたる三更の蟲語唧々として月前に鳴きつれたる物の微と雖も能く春秋二季の特性を現はして餘りあるを覺ゆ。

草木は直接に吾人の感情を刺激する有形物中に於て實に其効力の最大なる者なり。試に春といひ秋といふ語を聞て直に腦裡に現出する二季の現象は何なりやと考へ見よ。假令ひ主として草木其物を想起せざるも多くは草木に關連せる一塲の光景なる事を知るならん。

花木は春に多くして秋に乏れ無しといふも可なり。春光漸く回りて殘寒未だ退かず一枝の白梅は已に顏藾に沿ひ修竹に交りて清香を放つを見る。漸くにして紅梅綻び椿花咲き李花開き杏花笑ふ。梨花淡々の雲は三春の庭院を鎖し桃花斑々の紅は十里の漁村に映ず。雨を帶ぶるの海棠は妖艶にして階前に佇立せる唐書の美人の如く月を抱くの櫻花は清婉にして翠簾を隔てたる大和繪の上﨟にも似たり。秋に在ては木犀は見るべきの花に非ず、木槿は眺むべきの樹に非ず、木芙蓉の如きは木にして草に近き者なり。故に曰く秋に花木なしと。

春に花木多きは即ち秋に木實多き所以なり。然れども木實は決して有形的に吾人を刺激する者ならず。其纔かにこれあるは熟柿の累々として珠を連ねたるが如く遠村の秋光を點綴するのみ。

一林の蜀錦、末枯の山を靚粧し萬葉の胭脂、花なきの梢を染め出だす者は晩秋の紅葉にして千年の昔杜樊川をして紅於二月花と諷はしめたるにあらずや。而して樊川の此句を作る單に春花と秋葉との色彩を把て其濃淡を比較したるが如き淺薄の意に出でざるは勿論の事にして彼も亦額田王と同じく秋光の春色に勝る事を詠じたるや明けし。由是觀之紅葉は百木百草の中に就きて尤も善く秋光を代表する者と見做されたる者にして春の花木に對敵する者も亦此の紅葉に外ならざるなり秋の紅葉に對する者は春の若葉なり。御道の楊、章臺の柳、千絲東風を弄し萬縷春愁を惹くの光景より枯木再び蘇生して扶踈たる新綠を現出するに至るまで總てこれ活氣充滿し春意流動するに非る者なし。

●春色秋光（四）　地風升

花草は春に少くして秋に多きが如し。春草は山吹薔薇等を除くの外は盡くこれ細微纖麗にして婦女小兒の玩弄に供せらるゝ者のみ。菫のさゝやかに咲きて草の底に紫のゆかりを殘したる、蓮花草のうつくしく開きて春田の畔に錦の茵をひろげたる、茅針のしほらしき土筆のおどけたる、いづれか摘草の材料にはあらざる其の外福壽草櫻草丁子草の類皆盆栽的の細草ならざるはなし。秋草は春草に比して枝葉稍〻大なれども其花輪は剸合に小に從つて花を着くるのさまは春草の如く一莖に一花を開くものに非ずして一枝頭に無數の細花を着くるもの多し。萩、尾花、女郎花、紫苑、雞頭、藤袴、蘆葦、金線花等皆此類なり。故に秋草は花卉全体の姿致を賞する者多く一花〳〵の形狀を問へば殆んど答ふる能はざる者十に八九ならん。

因に云ふ、こゝにいふ若葉とは一般に樹木の萠芽新葉を指したる者にて和歌俳諧の夏季に用うる若葉とは其意少しく異なれり。併し紅葉を以て已に晩秋の景物と爲す上はこれに對して所謂若葉をも晩春の景物と爲さゞるべからず。若し精細に之を論じなば紅葉を秋とし落葉を冬とするの例に倣ひて若葉を春とし繁茂を夏となすが至當なるべし。秋冬を以て春夏に準するも亦可なり。

草木を合して之を言へば春は花木を以て勝り秋は花卉を以て勝る、春園に紅桃白李爛發するの樣は以て秋野に胡枝敗醬亂生するの景と比すべし。今試みに其色を比較して極めて概略なる表を作らんに

春花
- （白）—梨　杏　梅
- （紅）—杏　櫻　海棠
  - 椿　紅梅　桃
  - 薔薇　蓮花草
- （紫）—木蓮花　菫
- （青）—〇
- （黄）—福壽草　菜花
  - 山吹　蓮翹

秋花
- （白）—（白萩）（白菊）
- （紅）—秋海棠
  - 蕣　雞頭花　菊
  - 萩
- （紫）—桔梗　蕣
  - 紫苑　野菊　藤袴
- （青）—蕣
- （黄）—女郎花　菊

（色彩は固より千差萬別なるを便宜の爲め數種目の中に包括したる者なれば到底杜撰を免れざるべしと雖も其大略を見るはこれにても足りなん）諸種の色の中にも白紅黄等は尤も變なるものなるが春花には是等の色多く秋花には却て間色の多きを見るべし。又同じ紅色の中にも桃又は薔薇のつやゝかなる色と雞頭又は菊の黒み勝なる色とは自ら差異なきを得ず。之を總ぶるに春花は其色天鮮にしてしかも光澤あり、秋花は其色冷婉にして光澤甚だ少しと云ふを得ん。而して光澤ある

国立国会図書館　タイトル『筆の命毛』　請求記号 WB12-40
ガラス使用

者は視覺を刺戟する事強き故に婦人小兒の如き感覺の鈍き者と雖も之を感ずるの度高く光澤少き者は之に反して大人と雖も之を感ずるの度極めて低し。

花は姑く論ぜず草木全體を見れば春は枯木漸く葉を生じ枯草漸く萠ゆるの時なるを以て山岡と田野を問はず一般に青色あり。故に支那にては春の色を青とし春を稱して青陽青春といひ春を司るの神を青帝といふ。秋は木葉漸く萎み草葉漸く枯るゝの時なるを以て山林も原野も皆何となく黄ばみ勝なり。然るに支那にては秋の色を白とし秋を稱して素秋素商素節といひ秋を司るの神を白帝といふ。稍理に外れたるに似たれども白色と黄色と尤能く類似せるを見れば甚だしき誤に非るなり黄色の淡ある者は白色に紛れ易く夜間黄色を認めて白色となす等の事實より推しても知るべし。

●春色秋光（五）　地風升。

以上の所説は概略なりといへども春色秋光が直接に與へ得べき感覺は略〻之を盡したりと思ふなり。然るに世上の人が普通に思惟する春色秋光は必ずこれに止まらずして更に數多の新項目あるが如し。而して其新項目といふは盡く直接の感覺に非ずして直接の感覺より連想する間接の感情ならざるはあらず。請ふ實例によつて之を說かん。

春月と秋月　は最も其差異の著るしきやうに感ぜらるこれ等の感情は普通に幼時よりの經驗と敎育とに基因せる者多く例へば古來の歌書を讀むが如きは影響の甚だ大なるを覺ゆ。是れ第一に東洋と西洋と感を異にする所なりとす。然れども遡つて古人が此感を起す所以のものを尋ぬれば固より偶然の事に非ずして必ず多少の原因なくんばあらざるなり。春月とは

晴れもせず曇りもはてぬ春の夜の
　おぼろ月夜にしくものもなし

春さればきのこのくれの夕月夜
　おぼつかなしも山陰にして

といひ

沈麝不燒金鴨冷　淡雲籠月照梨花」
春宵一刻値千金　花有清香月有陰」

といふが如き皆春月の朦朧を形容したる者なり。秋月に對する詩人の感情は全くこれに異りて

白露を玉になしたる長月の
　有明の月夜見れどあかぬかも

白雲にはねうちかはし飛ぶ雁の
　かずさへ見ゆる秋の夜の月

といひ

一年光正滿　萬里氣尤清」
三五夜中新月色　二千里外故人心」

といふ皆秋月の高朗透徹なるを吟詠せる者あり。春にかすみといひおぼろといふ、秋に澄むといひほがらかといふ、或は天象の上に於て靄霞の多少は春秋の月華に二樣の光を與ふものなるべしといへども其感情の過半は他物の關係より生ずるもの〻如し。即ち春といへば暖の意を含み從つて朦朧の感情を惹起す、秋といへば冷の意を含み從つて玲瓏の感情を惹起す。而して朦朧は低の意を連想し玲瓏は高の意を連想す。故に漢語にて秋高といふ、秋高とは秋天の高きより言ひ出だせる者なり。暖と冷とは何故に此連想を生ずるやといふに吾人日常の經驗に於て廣く開きたる處は冷にして狹く閉ぢたる處ろは暖なるを知る。例へば屋内に在るは屋外にあるよりも暖に、四疊半の茶室に在るは百疊敷の書院に在るよりも暖なるが如し。

大名の寐間にも寐たる夜寒かな　許六

とは蓋し此意ならん。又た普通の感覺に於てつやゝかに光る者は多く冷にしてどよみて曇りたる者は多く暖なりと思惟す。例へば石は土よりも冷に鏡は櫛よりも冷なるが如し。

大髭に剃刀の飛ぶ寒さかな　許六

とは此意に外らす。

煤掃の夜は奇麗な寒さかな　如舟

とは稍前の二箇條を合併したるものか。されば吾人は亦此感情を歸納して氣暖なる時は千疊敷も廣しとせず磨き立てたる鏡も自ら曇りたるの感を生じ、氣冷なる時は八疊の間も何となく廣く床も柱も自ら光るが如き感を生ず。是れ即ち春天は低く秋天は高く、春月は曇り秋月は晴るゝの感を生ずる所以なり。

●春色秋光（六）　地風升

春風と秋風　春風は吹て東よりし秋風は吹て西よりす東は日出で夜明くるの方なり、故に活潑の意あり。西は日沒し日暮るゝの方なり、故に沈寂の意あり。此差は稍客觀的に春風と秋風とを區別する者なりと雖も其他の感情は盡く主觀的なり。元來風は一種の觸覺によりて感じ吾人を剌戟するの度低き者なるに今日普通の感情に於て春風といへば春を代表するが如く秋風といへば秋を代表するが如く思ふは何故ぞ。蓋し和漢人古來の思想は風を目して寒暖を催し生成凋落を司るの原因となせしに由れり。例へば春風を詠して

袖ひちて結ひし水のこほれるを
　春立つけふの風やとくらん

きのふまでとぢしつらゐの池水に
　いつ春風の波を吹くらん

国立国会図書館　タイトル『筆の命毛』　請求記号 WB12-40
ガラス使用

不是東風巧　何緣有歲華」

草滿池塘水滿池　春風料理百花時」

といひ秋風を詠じて

秋立ちて幾日もあらねばこのねぬる
あさけの風は秋さむしも

秋來ぬと目にはさやかに見えねども
風の音にぞ驚かれぬる

嫋々兮秋風　洞庭波兮木葉下」

何處秋風至蕭々送雁群朝來入庭樹孤客最先聞」

といふ、皆春風秋風を指して甚だ意あるものゝ如くなせり。其の實春風暖なるにあらず秋風冷なるにあらず只主觀的に暖を感じ冷を覺もるのみ。

春霞と秋霧　遠きを霞といひ近きを霧といふ。物理學上の現象に二樣あるにあらず。

春露と秋露　花上團々の露は葉頭錯落の露と異ならず然れども一は快樂の象を感じ他は無常の意を感ず。

春水と秋水　同一の水なり、春は則ち渟滯迂餘流れざるが如く秋は則ち清澄寒潔感なきに似たり。故に春水は之を油に比し秋水は之を刀劍に比す。

淮之水淮之水。東風吹春風洗。青於藍綠染指。魚不來鷗不起。瀲々灩々天盡頭。祇見孤帆不見舟」

纖塵不動天如水　一色無痕月共霜」

物ゆるし魚の見見る春の水　沾德
春の水ところ〴〵に見ゆるかな　鬼貫
秋に澄む水すさまじや淀の城　櫻叟
青空や手さしもならず秋の水　丈草

此外春季秋季として用うる語を對照すれば

○春　　○秋

日永　　夜長

あたゝか　　ひやゝか

うらゝか　　すさまし

風ぬるむ　　風身にしむ

のどか　　うそ寒

春日の長きは秋日の長きが如く秋夜の長きは春夜の長きが如し。然るに春は特に日を擧げ秋は特に夜を擧ぐ恰も彼枕の草子に

春は曙やう〳〵白くなり行く云々

秋は夕暮夕日はなやかにさして云々

と書けると同じ感情なり。春も陽なり朝も陽なり故に春曙は陽の極をいふ。秋も陰なり夕も陰なり故に秋夕は陰の極をいふ。共に是れ人間の感覺を起すこと尤高きの時を指したる者なり。

●春色秋光（七）　地風升

春色秋光が直接に吾人の耳目に訴へて一は快感を生じ一は悲感を生ずるは初めに述べたるが如し、春月秋月春風秋風等が二樣の感情を起さしむるも亦た前に述べたるが如し。此上に更に彼草木生成と草木凋落との現象より生ずる榮枯盛衰の感を加へて始めて今日吾人が有する所の春と秋とに於ける全体の感情となるなり。全体の感情とは何ぞ、春といへば直ちに愉快、活潑、隆盛生成、綺麗、繁華等を聯感し秋といへば直ちに悲哀、沈衰、零落、殺伐、雅潔、寂寞等を聯感するの類なり。

然れども春色を喜び秋光を悲むの感情は太古より一般に有し來りしものに非ずして後世に至りて次第々々に發達せり。支那にては唐朝以後に盛んに我邦にては古今集以後に盛んなるが如し。一個人の發達に就ていふも十五乃至二十歳後に非されば此感を起すことなく甚だしきは終生之を知らざる者あり。試みに唐以前の詩歌、古今以前の國詩を繙て見よ。春光の熙々たるを喜ぶ者は多かれど、秋色の凋落を悲む者は少し。秋色の凋落を悲まざるのみならず秋光を喜ぶこと春色に等しきもの亦少からず。唐以後古今以後は春色を愛するも其熙々雍々の處を愛するに非ずして穠艶華麗の處を愛するなり、秋光を悲むも一陰漸く現はれて穠艶穉し華麗休むを悲むに非ずして金氣肅殺木摧け草消ゆるの極處を悲むなり。終には春を以て喜極つて躍るの時となし秋を以て悲極つて泣くの時となすに至る。古今集の歌を以て例となさんに

世の中に絶えて櫻のなかりせば
　春の心ののどけからまし

とらへるは春の歌にて愉快の極を反言したるもの

月見れば千々にものこそかなしけれ
　わが身一つの秋にはあらねど

といへるは秋の歌にて悲哀の感を直叙したる者なり。これを萬葉集中の春を喜び秋を悲むの歌に比すれば甚だその差あるを見ん。萬葉の歌に

いはゝしる垂見の上の早蕨の
　もえいづる春になりにけるかも

けさのあさけかりがね聞きつ春日山
　もみぢにけらし我心いたし

春光は和氣洋々、秋色は西風寂寞、敢て古今集の一は雀躍し一は悲泣するが如く甚だしからざるなり。

国立国会図書館　タイトル『筆の命毛』　請求記号 WB12-40
ガラス使用

花を見ては笑ひ雁を聞きては泣き、青草を見ては喜び落葉を聞きては悲む、是れ春色秋光を見聞して生ずる連感のみ。更に春色の中より紅花黄蝶を取り去り秋光の中より雁聲蟲語を減じ去り、此の如くして抽象し來りたる春と秋とを以て人間萬事の上に應用したるは支那を最多しとす。周の時に春官秋官の制あるは其一例なり。春官は邦禮を掌る、祭祀儀式卜筮音樂敎育等は其範圍に屬す。秋官は邦刑を掌る、刑法警察の事皆其管する所とす。是れ即ち春には生育の意あり秋には肅殺の意あるに象れるあり、其他紅蜚綠酒は春に屬し藜羹濁醪は秋に屬す、輕裘肥馬は春に屬し敝袍枯筋は秋に屬す、朱門畵閣は春に屬し野店茅屋は秋に屬す、晏氏の御者揚々たるは春に屬し喪家の狗累々たるは秋に屬す、三傑桃園の訂盟は春に屬し孔明秋風五丈原は秋に屬す、翠鬟猫を抱きて繡帳の內に假寢するは春に屬し獵夫犬を牽て寒林の外に彷徨するは秋に屬す、牡丹を栽ゑ佳人を貯へ骨牌を玉卓に弄し舞踏を珠樓に試むは春に屬し屑籠を負ひ馬糞を拾ひ炎天車を挽き寒夜麵を賣るは秋に屬す、人間萬事もと相對なり、見來ればいづれか春色秋光ならざらん。

◉春色秋光　（八）　地風升

春花を形容するの詩、秋月を寫し出だせるの歌は元來春花秋月其物を取て之を吟詠するものなれば論ずるに及ばず。其詩其文の主旨は山河の形勢を記し人事の紛紜を寫すに在て却て其の字句の間に季を結ぶもの多し是れ四季の變化が與ふる感情の大なるを知るに足れり同じく是れ一株の古松なり、之を春季に繫くれば青々蔥々千歲の後に榮ゆるの象を示し之を夏季に繫くれば晩風颯々涼氣萬斛の感を起すべし、之を秋季に結べば天高く氣清く秋聲の浙瀝を聞くべく之を冬季に結べば寒嶺孤秀霜雪に摧けざるの節操を見るべし。豈是れ吾人が主觀的觀念は春夏秋冬の四季を抽象し來りて以て客觀的萬象を觀るに馴れたるに非るを得んや。（一年四季ありと雖も四季に就て精密に其感情を區別するは僅かに俳句あるのみ他は概ね春と秋との二季を以て事物を觀るが如し）されば詩賦文章に於て京城の繁華を說かんとすれば之を春にせざるべからず、村市の寂寞を寫さんとすれば之を秋にせざるべからず。吾人は古詩古歌を讀んで益〻其然るを見る。例へば

長安古意　　盧照隣

長安大道連狹斜　青牛白馬七香車
玉輦縱橫過主第　金鞍繡轡向侯家
龍銜寶蓋承朝日　鳳吐流蘇帶晚霞

と劈頭に題せる數句を讀んで既に春意の浩蕩たるを感ずべし。果して其次には春季を結べる

百丈遊絲爭繞樹　一群嬌鳥共啼花

啼花蟲蝶千門側　碧樹銀臺萬種色（下略）

等の數句あるを見る。又豪奢を形容せる詩に

公子行　　劉廷芝

天津橋下陽春水　天津橋上繁華子
馬聲廻合青雲外　人影搖動綠波裏
綠波清遶玉爲砂　青雲離披錦作霞
可憐楊柳傷心樹　可憐桃李斷腸花（下略）

などある亦春を用ゐたり。悲哀慷慨の詩に秋を用ゐたる例は枚擧に遑あらず。懷古邊塞等の作皆是なり。一例を示せば

秋風清、秋月明、落葉聚還散、寒鴉栖復驚、相思相見知何日、此日此夜難爲情、
長安一片月、萬戶擣衣聲、秋風吹不盡、總是玉關情、
何日平胡虜、良人罷遠征、

白樂天の琵琶行も其冒頭に秋景を敘して

潯陽江頭夜送客　楓葉荻花秋瑟々

といふ、先づ後段悲歎の地をなせり。然れども是等皆有形物によりて秋を感ずるなり。歐陽修の秋聲賦に至りては終始主觀的に秋の感情を現はせり、否主觀の感情は其極之を客觀に在るが如く思惟せり。賦に曰く

歐陽子方夜讀書聞有聲自西南來者悚然而聽之曰異哉初淅瀝以蕭颯忽奔騰而砰湃如波濤夜驚風雨驟至其觸於物也鏦々錚々金鐵皆鳴又如赴敵之兵銜枚疾走不聞號令但聞人馬之行聲予謂童子此何聲也汝出視之童子曰星月皎潔明河在天四無人聲々在樹間予曰噫嘻悲哉此秋聲也胡爲乎來哉

此の奇々怪々の聲は何ぞ、作者は名づけて秋聲といふ秋聲は秋の聲なり而して終に其何物たるを知らず。聲樹間に在りといふ條を攀ぢて樹間に至れば樹間寂として聲なし、聲は歐陽子の胸中に在り。蓋し風に非ず雨に非ず鏦々錚々の響をなす者は固より客觀的の者に非るなり。秋にして若し聲あらば此の如くならんといふのみ。作者亦自ら說明して左の如くいへり

蓋夫秋之爲狀也其色慘淡烟霏雲斂其容淸明天高日晶其氣慄冽砭人肌骨其意蕭條山川寂寥故其爲聲也凄凄切切呼號奮發（下略）

東洋の春秋二期に於ける觀念概ね此の如し。

◉春色秋光　（九）　地風升

春色秋光に對する西洋文學者の觀念如何は我淺學の之れを說明し能はざる所にして甚だ以て遺憾となすなり然れども其大体に於て春色を賞し秋光を嫌ふ事は彼等の國人普通の感情と大差なきが如し。蓋し普通の西洋

国立国会図書館　タイトル『筆の命毛』　請求記号 WB12-40
ガラス使用

人に在ては比較的に春を賞し秋を嫌ふといへども、其實天地の風光、四時の變化に至りては殆んど之を意に介せざる者にして西洋詩人の故らに春色の活動を愛賞するが如きは『自然』に對する詩想の稍發達したる者といはざるべからざるなり。

西洋にては普通に春夏冬といひて春夏秋冬とはいはず（西洋一般なるや否や知らず）其意たる春は草木萠動の期、夏は草木繁茂の期、冬は草木凋落の期と分つべきも秋に至りては其名を存して其特性あるを知らずとなるべし。是れ已に自然に於ける西洋の觀念の粗略なるを證すると共に秋光に對する感情の絶無なるを知るに足れり。春色を敘述せる詩歌は西洋亦敘景詩の少き割合に乏しからず且つ其の形容の詳細なるを見る。一例を擧ぐれば「グレイ」の「春の歌」の第一章に

佐保姫の粧ひあてに　花の春立ち歸りきて
時待し花も咲ければ　紫の彌生となりぬ
鶯のしらべも妙に　時鳥誰をしへねど
共に音をあはせぞ鳴く　空晴れてこち吹く風の
うれしげに匂ふは何の　木の花ぞそも

（大意を譯しかれば原文と違ひたる處多し）

本邦の詩人は言ふを俟たず普通の人に至るまで春光の甘口よりは却て秋光の滋味を愛する傾向あるは始めにもいへるが如し。然れどもそは稍學問を知り文字を解するより以上の人をいふのみ。若し四千萬人一々に就て之を問はゝ春を以て可となす者當に十中の七八に居るべし。試みに春を好む人の種類を列擧すれば

日本の下等社會　　日本の婦女子
日本の兒童　　歐米の全社會
日本の西洋派學者

等にやあらん。（固より多少の例外を免れず）

人々によりて何故に此相違を生ずるやといふに下等社會無智の人民、婦女兒童の類は其知覺痴鈍にして些少の差を識別する事甚だ難く、非常に眼官耳官を刺戟する物に非るよりは其變化を知らず從つて何等の愉快をも感ぜざるなり、例へば小兒に示すに諸種の色紙を以てせよ、彼は其雅なる者を撰ばずして赤色の如く眼官を刺戟する事尤甚だしき者を取らん。或は諸種の音樂を聞かしめよ、彼は琴のゆかしき笛のあはれなるは更に之を解せず唯軍樂の如き著るしく聽官を刺戟する者を喜ぶべし。蓋し下等社會の貧賤は彼をして美術を見聞するに馴れしめず。且つ學問の力によりて知覺を發達し連想を喚起するの機會を許さゞるによれり。されば艶麗なる春色を愛して冷淡なる秋光を愛せざるは固より其所なり。彼の歐米の如きは學識を備へ美術を愛玩するの人にして猶且つ我邦の下等社會と稍其趣味を同じうせるは何故ぞ。彼は第一に人事の刺戟を受くる事多きが爲に天然界の觀察精細ならず。第二に彼の祖先以來の經歷と書籍技藝とは共に此一方に對する感情の發達を賞勵せざるが爲なるが如し。（山川草木氣候の差異も或は與りて力あらん）而して日本人にして歐米に心醉せる歐米的日本人に至ては固より輕躁浮薄の輩敢て論ずるに足らず。彼等は草屋を變じて煉瓦となし倭服を變じて窄袖となし上野公園の樹木を伐り倒して渺茫たる芝生となし終には綠髪黒眸の神州人民をして紅毛赤眼の外邦人たらしめんとする者なり。何ぞ春色秋光に於てあらん。

●春色秋光（十）　地風升

我國の中等社會以上概して秋を愛すといへどもさりとて春を嫌ふには非るなり。春を嫌ふ人もたま〳〵に無きにはあらねどそは極めて少數の人にして中には曲げて春を厭ふよし陽に言ひふらす者さへあり。然れども我感情を隱しても春を厭ひ秋を愛すと公言するものは天下一般に秋光を愛するの傾向あるを見るべし。少くとも彼等は已れの感情に於て春を愛する事甚だしきも猶それよりも春を嫌ふの一層高尚なる事を承認したる者なり。且つ又實際に春を厭ふの人とはいへども春色其物を厭ふにあらずして主として春時の俗麗を厭ふなり。墨堤の春色、小金井の櫻花園より厭ふべきに非ず厭ふべきは車馬の紛爭俗客の群集に在るなり。秋色雅淡如何に愛すべきも前に春光の艶麗なるありて之に反照するに非ずんは終に其妙味を知る能はざるべし。近者古俳句を取て之を四季に分類し見たる結果は春季の句尤多く秋季之に次ぎ夏季之に次ぎ冬季之に次ぐ事を發見したり。其比例は概略春八、秋六、夏五半、冬五位なるべし。以て春色の多數に愛せらるゝを知るに足る。即ち一方より見れば比例率の著るしく春に於て多きは俳句の作者に俗人の多きを證するなり。和歌に至りては未だ之を調査するの暇を得ざれども推測によれば四季の順序に於ては恐らくは俳句と同一なるべく唯其比例に至りては春と秋との差此の如く大ならざるべし、而して春秋と夏冬との差の俳句より一層大なる事は明々瞭々敢て調査を待て後に知らざるあり。漢詩には四季の區別甚だ明瞭ならざれども春と秋とを比較しなば秋こそ多かるべけれと思ふなり。

余は初めに秋光を悲むといひ後に秋光を愛すといひき言稍〻撞着するに似たり。然れども是れ撞着に非るなり。秋光を悲むは固より事實なり、而して秋光を愛するとは秋光を悲む事に就きて愉快を感ずるなり、即ち秋光のあはれを愛するなり。快を快とするは則ち普通なり、哀を快とするに至りては則ち普通ならず。其の故如何。

国立国会図書館　タイトル『筆の命毛』 請求記号 WB12-40
ガラス使用

野蠻の時代に在ては洋の東西を問はず皆快を快とするを知て哀を快とするを知らず、見よ演劇に於ても小說に於ても滑稽なる者快豁なる者先に起りて悲哀なる者慘憺なる者後に起りしに非ずや。今日に於ては悲哀的演劇、悲哀的小說に非れば人殆んど滿足せざる者あるが如し。曾曰く昨某優の劇を見る、悲極つて涕泪止まらず、實に近日の大愉快なりと。彼哭泣を以て快事と爲す。何ぞ其れ怪なる。春色秋光と演劇小說とは自然と人事との差あり即ち一は道德を含まず一は道德に基くの區別あるを以て其感情も亦稍〻種類を異にすと雖も哀を快とするの大本に至りては則ち一なり。他人の爲し能はざる所を爲すは人の快とする所ろなり殊に學問識見ある者の最快とする所なり。快を快とするは萬人皆同じ、哀を哀とせざるは常人の能はざる所なり。是を以て哀を哀とせざるは人の快とする所なり人の悲劇を愛し秋光を愛するは此の種類の快樂に屬す一言にして盡さば則ち此の如きのみ。(世人此間の心事を稱して高尙といふ)

快は則ち一個人の快なり、美は則ち一個人の美なり。快ならざるを强ひて快となし美ならざるを强ひて美となさしむる事は到底爲し得ざるなり。故に人皆春色を捨て、秋光を取るべしとは言はず。快を快とするの快と哀を快とするの快と快の種類を異にす。故に敢て秋光を以て春色に勝れりとは言はず。然れども春を愛するを知て秋を愛するを知らざるは其趣味に於て未た發達せざる所ありと明言するを憚らざるなり。而して此の一事に於ては西洋よりも東洋の早く發達したるを見る邦語「あはれ」といふは悲哀の內に愛情を寓し愛情の內に悲哀を含むものなり。一語以て之れを證するに足れり。夏と冬とは別に論あり、將に他日を俟つて說くあらんとす。

(完)

日比谷八景

明治廿五年

○櫻田暮雪

吹雪にまぶれて城門を引き出だす馬車幾輛、馬蹄玉を蹴て御者揚々たり。車中風暖かにして夢と過ぎし卅年の昔忍びもあへぬ大御代の有り難さ知るや知らずや。

馬車かへるあと靜かなり御所の雪

○永田夕照

車や馬や絕間なく馳せ違ひ車夫や馬丁や先を拂ふの聲するどし。行き合せたる商賈恐れて目を側て通りかゝりたる田舍漢驚いて目をまはす。これ乃都の秋のくれにはありける。

塵の中にくれ行く秋の夕日かな

○霞關晴嵐

青煙飛んで五侯の家に入る寒食の時節に非ず。煖爐の炭煙靜かにゆれ昇る初冬の朝氣色、ひし〳〵と立てならべたる官舍官邸の甍、光彩は門戶に滿ち〳〵たり。

朝晴や雲こしらへる爐の煙

○新橋秋月

綠酒紅燈樓々皆然り。此間に牛飮馬食する者官か民か士か農か。三尺の鬚空しく誕にとぢられて些の威嚴無く懸河の辯論一聲野暮と叱られて一文の價なき別世界の中こそ尤而白けれ。

月と酒敵も味方もなかりけり

○芝浦歸帆

うらゝかなる小春風の天氣やう〳〵に暮れて房總の山脈淡々又濃々たり。東より西より行くか戻るか眞帆片帆打ち揚げて漁歌櫓聲相交はるが中にあやしき船一つ二つ見えてあだめきたる笑ひ聲ぬしや何もの。

屋根船や白帆にまじる小六月

○赤坂夜雨

樣酒奧深くして美人寂寥たり、三絃聲ねばけて調子常に沈み撥戰勢弱く主人多くは負く。新橋に向はずして赤坂に向ふ。恐らくはこれ八百金猶剩餘を生ぜしむるの人か。

ほろ酔の端唄なまるや小夜時雨

○三緣晩鐘

芝山木枯れて三緣の晩鐘鏘々と響き渡る折柄いづこともなくがや〳〵と噪ぐ音、鴉か鴉に非ず鳶か鳶に非ず唯見る幾百の蛙軍飛び去つてひよこ〳〵たるを。

凩やいりあひくづす夕鴉

○溜池落雁

一羽先に立ちて導けば「あと〳〵は思案もなしに下りる雁」如何なる餌を見つけたらんと思へば夜もすがら月に鳴き風に鳴きて又飛び立つ聲の聞ゆなり。あはれ何を喋ぐにやあらん。

さわがしう鳴くや立つ雁下りる雁

国立国会図書館　タイトル『筆の命毛』　請求記号 WB12-40

ガラス使用

◎一寸逃れの辭

一寸さきの闇から闇へ逃げこむを一寸逃れとはいつの世より言ひならはしけん。さればその逃るゝの手だてを欺くともいひ又俗に之をごまかすともいふ。蚤の敏捷なる一たび押さへる手をはづすもひねり潰さるゝの運命は二飛び三飛びの間を出でず、升の中の鼠暫くはかの隅この隅に隱るゝも其逃げさきは方六寸の内に限れり、おろかや人間は神に遠くして虫けらに近しとも知らぬ自惚に獨り利巧らしくごまかして一寸逃れに日を送ることよ。鼠逃ぐること一寸なれば猫追ふこと亦一寸なり。盗人逃ぐること一寸なれば捕り手追ふこと亦一寸なり。昔は清盛頼朝秀吉下手に天下をごまかして猶二世三世を保ち時政尊氏家康上手に人民をごまかして九代十三代十五代に續くとかや。今は朝に六百人をごまかして夕に其尻を現はし、きのふ數萬金をごまかしてけふ化の皮を剝かる。昔は一寸を逃れ今は一分を逃る。昨日は一分を逃れ今日は一厘を逃る。知らず明日は幾何をか逃れ得べき。

日一分一分ちゃまる冬至かな

●動物合せ　馬鹿山人作　狸黨判

蛙といひ蟬といふ猶嘲るに足らずありたけの動物を捉へ來りて以て之に擬する者あり。かゝる巧妙の意匠は借て以て俳句にものすべしとてかくなん。

左　猪の雪につまづく木の根かな

右勝　寐る牛をあなどつて來たり鷦鷯

判云牛角あれども眠れば働かず鷦鷯に驚かされたる妙

左勝　猫老て鼠も取らず置火燵

右　折〳〵は狆のふまるゝ師走かな

判云狆の蹈まれて怒りたる適切ならざるにあらねど猫の衰へて國家の害を除かざる亦奇、左勝たるべし。

左勝　馬痩せて鹿に似る頃の寒さかな

右　鳶高く鴉を笑ふ小春かな

判云馬か鹿か鹿か馬か馬ならずんば鹿鹿ならずんば馬

左持　耳つくのそれらでもなし信天翁

右持　骨のなき泥鰌を誰の藥喰

判云鳥善く飛ばずんば鳥に非ず魚其骨を脱すれば遂に魚に非ず善き持にや侍らん。

左　蟬の殼碎けたあとや歸り花

右勝　拔け穴もありて蛙の冬籠

判云蛙の冬籠に拔穴を見出したる手柄天晴なりとす

●笑話十句

一、今度の軍艦は佛國へは誂[illegible]せん
　此度は娵に終はせじ角頭巾

二、始は賛成、中は反對、終は賛對
　薄とも蘆ともつかず枯れにけり

三、其晩其新聞は俄かの嚴命、發行停止
　くふ時に成てすてけり河豚の汁

四、地價修正さへして下されば擴張費を復活しませう
　君味噌くれ我豆やらん冬籠

五、大隈伯云くマー聯立内閣でせう
　雪に穴を失ふて熊の聲悲し

六、大臣……議長……代議士は願下
　小石にも魚にもならず海鼠かな

七、死亡士官に吊詞を贈らんとすれば人後に落つ
　くやみいふ口のどもりし寒さ哉

八、イトウの當り年なり
　をなじ名のあるじ手代や夷子講

九、松島は敵艦目がけて尻を出だす
　木枯しに尻をむけゝりはなれ鴛

十、彼も中將此も中將彼も一等此も一等
　炭賣のつりあひわろき片荷かな

●干蕪一把

晩稲を刈り入れてあとは百姓草臥れて南窻に晝寢を食り地價改まりて後は議員疲れて睡りたるが如し。

稲刈りて力無き冬の初日かな

道德といふ語は不道德の世の中にこそ尤多く用ひらるるものなれ。信任といふ語は不信任の人の口にこそ多く上り來るものなれ。

三羽立てあとしづかなる千鳥かな

むかし穢嚮は神託によりて惡僧を斥け今は大神主神の御力を假りて處々方々に縁付き給ふ。時は末世に及んで物事は重寶にぞ成り行きける。

返事せぬつんぼのぢゞや神無月

国立国会図書館　タイトル『筆の命毛』　請求記号 WB12-40
ガラス使用

時事十章

大詔九重を下る
鶴の聲これより空の長閑なり

和衷協同
月と梅一夜〳〵に近うなる

上奏案秘密會
さくまでは誰にも見せじ庵の梅

鐵道敷設
鶯やこの山もまた滝車の音

歲費納金の躊躇
飛びこんで泥に隱れる蛙かな

布哇の運命
青柳の形定まらぬつむじかな

難船多し
あら海や燕ゆらるゝ檝の上

議員の雙美
年老ていよ〳〵松の緑かな

二法學士逝く
野邊送りきのふもけふも冴返る

製艦費獻納
二つ三つ舩も置きたし春の海

珍談八則

魯國の皇族微服して米國に遊び飽く迄平民なりと言ひ張る

どこまでも枯木と見せて梅の花

ある國の平民他國に漫遊して親王と稱せらるゝなりには見せてめ次郎かな

愛爾蘭は獨立せんとして未だ獨立せず

養父入りや緣切る話よもすがら

布哇は合併せんとして未だ合併せず

出代や養子になりし丁稚あり

泥醉して本大臣と呼ぶ者必ずしも大臣に非ず

泥に醉ふて赤子のまねを鳴く蛙

大臣の意志を演說したる人窮かに大臣を氣取る

賣られては京の眞中に鳴く田螺

位持の蛙殿忽ち四百金を鬼にさらはる

あて人の田の米くふて歸る雁

夷三郎及び其仲間の五ッ紋の二人同じく京師の再遊を夢む

どら猫に戀の名もあり祇園町

蛙の敗北

本日午前十時より午後一時迄の間に債費御渡し可申候間ほしき人々は早々御出これあるべく候

ひよい〳〵とこゝ迄でざれ蛙殿

捕者共は事納めにわざ〳〵これ迄參つてござる「これこれ貴殿はどこへおいきやる羽織袴で事納めの儀式に臨むことはなりませぬ

戸の口にたて出されたる蛙かな

ならぬとあれば臨むに及ばぬ捕者は債費を受け取れば外に用はござらぬ

泥水と見れば飛びこむ蛙かな

これは大勢詰めかけた事でおりやる捕者もこれがなければ國へ歸ることができぬによつてどうあつても貰はずばなるまい「もうし〳〵事納めの式が始まります早うおじやれ「事納めよりは此方が大切でござる請取らぬ内はこゝを動くまい

蛙むれて雨を呼ぶ聲哀れなり

うれしや〳〵やう〳〵手のものになつた先づ急いで歸ろう「罷り出でたるは高利屋貸藏でござるけふは蛙殿から金を請取る日ぢやによつて朝からこゝに待てゐたアレ〳〵向ふから嬉しさうに來られるもうし〳〵蛙殿今日は金を請取りに參つた此通り證文に日限がござれば早う渡して下され

逃げさきに足つかれし蛙かな

これは迷惑な其樣な事は覺えがござらぬ「妾は蛙合の又將軍でござる蛙殿に金をはたらねばならぬまい妾にも一日勝はうと卽せられた程に早く拂ふて下され「それは人違へでござらう「もうし〳〵逃げうとて逃がさうか「箇樣な困つた事はござらぬ前門備費を得て後門債鬼に逢ふといふものぢや

つりさげてなぶられてゐる蛙かな

あとさで待ておくりやれ「待つことはならぬ早う渡して下され「免しておくりやれ〳〵「なりませぬありませぬ

新外題浮世の狂言

議會門前雀羅を設くと共に俄に物淋しき都下の旅籠屋

旅籠屋の前まだ白し春の雪

もらひたての債費四百圓つかひつくして殘る四錢狂言

落つるだけ落ちて淋しき椿かな

井代の催促に已むを得ず差し出だしたる百圓紙幣一枚

芥賣りに出して見せたる小判かな

四百圓の債費一包不足して混雜紛れに二重取りの疑ひ

組みあふて一つに見ゆる胡蝶かな

宮城氏の寂寥たる野邊送りに引きかへて山田氏の葬式のどかさや哀れ少なき野邊送り

国立国会図書館　タイトル『筆の命毛』　請求記号 WB12-40
ガラス使用

速記者を引きつれて出かけたる夷三郎殿の演說的祭文

涅槃會ににくき夷の笑ひかな

行く〳〵は連合むつかしき自由改進雨たてものの運命

歸るとて雁は二つに分れけり

非弟の曉を盡りて俄に實業家に好を結ぶ手廻しの官吏

其の角の落ちかゝりてや鳴く男鹿

春鳥五章

伯爵殿は兎角腹を立てゝは役を引かせらるゝが此の勇退も何かわけがありての事ですか「ありとも〳〵

歸るにも朋有り雁の二羽三羽

何だかわけの分らぬだけに神仙大臣と迄綽名せられし人のなぜやめられたのです「人がしんぜんからサ

けものとも鳥ともいふや呼子鳥

君はまた大臣になり給ふ位ならばはじめから何故に民間の協會にははいり給ひしぞ「それはより道でござる

とんと落ちや〳〵と上りて雲雀かな

此頃は頻りに交迭せられるので地方官は首をちゞめて居るといふ話

入り亂れ〳〵つゝ百千鳥

出しやばりてやりそこなひし腹いせにや今度昇進する役人は大方内相の味方ではないか「尤内證の話さ

井の上やあぶなくとまる雀の子

近事八章

勝安房殿辭職し給ふとの風說は信か

白梅やつひに都のものならず

山縣殿辭職し給ふとの噂は信ならん

松一木あちら向きけり梅の中

河野殿在職の年限は十一ヶ月半なり

梅の散る頃より梅の開くまで

井上毅殿終に文部大臣迄昇られたり

また一つ星のふゑけり梅の花

弄花事件告發人殿再び昇殿したまふ

室の梅花無き春は來たりけり

齋藤殿牧野殿進み西村殿久保田殿退く

紅梅に咲き勝たれけり桃の花

改進自由を罵れば自由亦改進を罵る

桃梅を笑へば梅も桃を笑ふ

伊東巳代治殿居常快々として樂まず

咲くが如く萎むが如し梅の花

六失意

鐵道王と稱し八方へ手を擴げて賄賂を吸ひつけし其人

飯鯖や身を八つ裂きのなれのはて

名詮自證おのが皮を剝かれて日干しになされたる其人

古井戸の底にかはづの死骸かな

古澤に水絶えて滋ひが少なき泥の上に命はかなき其人

古澤や泥にひゝつく芹なづな

落日秋風と謠はれし其秋風をも待ちあへぬ光妙寺其人

還俗の僧のいやがる二日灸

地震に始まり雷撃に現はれ復地震に終りたる知事其人

地震して戀猫屋根をころげけり

何の因緣か島根千葉山梨三縣より同時に追れたる三人

一鞭に打たれにけりな此三つ

六學者

總長は變るとも猶平然たる入道の行末は如何

雨やらつ外山の櫻曇りけり

名は學者位は博士實は權門に伺候する菊大殿

金くさき人の往來や八重櫻

人の說を偷みて名譽と誹謗を一身に荷ひし人

高德の墨染櫻散りにけり

駒場學校の舊に復して我意を張らんとする人

咲かせばや我家櫻庭櫻

二人引の車を驅りて身の落付を氣遣ふ高秀殿

うしろから支へ柱や姥櫻

文相は一變して緣成となれる校長殿の心強さ

古井戸にもたれて咲きぬ山櫻

国立国会図書館　タイトル『筆の命毛』　請求記号 WB12-40

ガラス使用

朝鮮內亂
蛇入て塀のさわぎや時鳥
朝鮮談判
四海皆鳴りを靜めて時鳥
吾妻嶽破裂
一聲や山つんざけて時鳥
辯護士會
鳴き立つる雀にくらし時鳥
千島行短艇漂流
あら海や月に消えこむ時鳥

●話の種いろ〳〵
明治御家騷動
大名の家より吹きぬ初嵐
岐阜再度天災
家もなし水潦々として天の河
老伯三度辯解
うしろ向けば我にも吹くや秋の風
銀貨幣亂相場
金銀の色〳〵よ稻妻西東
異國王子來遊
この國は日も善い月もよいところ

●人の噂も十七字
人の腹をえぐるとは悲しきたとへに引れたる墳墓發堀
薄ほるあとのくぼみや小雨ふる
藪をつゝいて蛇を出すとは改進新聞に對する告訴事件
稻妻やうしろ見らるゝ居合拔
すのびれば壽のびるとは一日〳〵と延引する行政整理
咲きさうにしながら菊のつぼみかな
飼ひ犬に手をかまるゝとは內閣割れに困りたる三大將
不知火のしらけて寒き夜明かな
蟻の思ひも天にとゞくとは同志を集めたる大日本協會
尉する門たゝかばやけふの月

（一）秋風や腦味噌くさる芥子坊主
（二）蓮の實のこぼれつくして何もなし
（三）黒雲の晴れて見たれば月もなし
（四）一つづゝ星吹きちらす野分かな
（五）けうとしや鹿のまねする馬の聲

●御夢想　秋暮一夢童子　投

天下太平四海波靜かにして新聞紙上別に活氣なければ童子は手にせし新聞を拋ち倦り几に凭りて眠るとも眠れず夢ともなく幻ともなく鬚眉雪の如き一個の道人さもたふとげに步み來りて我汝に天上の秘密を敎へん必ず他に示すことなかれとて一封を與へたり夢忽然として我に返るに一封は猶手中にあり披き見るに

首相　命には何事もなし秋のくれ
內相　稻妻の勢弱し秋のくれ
外相　鬢のひて剪刀さびぬ秋のくれ
陸相　あどけなく笑ふ顏さへ秋のくれ
海相　なき兄のまぼろし悲し秋のくれ
農相　狸ぬれて緖に歸る秋のくれ
藏相　濕柿の澁まだぬけず秋のくれ
法相　かゝりうどの飯時寒し秋のくれ
遞相　徒らな子は寢入りけり秋のくれ
文相　顏痩せて脚もかすかに秋のくれ

●正誤　秋暮一夢童子

童子先つ頃うたゝねの夢に天上の秘密を得たり其後は多忙に紛れて何事をも打ち忘れたるが昨夜少しの閑を得て靜かに邯鄲の枕に就けば忽ち十人許りの同勢いかめしき姿にて降り來り我を搖り起して汝天上の秘密と稱して我等を侮りし事以ての外なり今汝に此一封を與ふる間全文を揭げて正誤せよとて忽ち消え失せぬ冷汗を拭ひ恐る〳〵正誤の一封を讀むに

主相　秋風や牡丹の夢もなかりけり
內相　秋風や片手に富士の川とめん
外相　秋風や鱸を釣らんとや思ふ
陸相　秋風やわれは可もなく不可もなし
海相　秋風やいくさの夢も二十年
藏相　秋風や坐禪し居れば劍鳴る
遞相　秋風や平たくなりし力瘤
農相　秋風や人に聞けとの大尉
法相　秋風やけふだけの飯もたいてある
文相　秋風や淋しくなりし子守唄

国立国会図書館　タイトル『筆の命毛』　請求記号 WB12-40
ガラス使用

●慶事多し

或は官となり或は民となり或は卿大臣となり或は副總
頭取となり久しく官民の間に彷徨したる燒鏘の敏鏘
の君は今や特殊の恩典に預りてかしこくも華族に列せ
られ子爵を賜はりたりとなん頃に曰く

菊の香や雲井に近き朝朗

或は圀圖に呻吟し或は青雲に翺翔し一朝に勇退し一夕
に勇進し去る事疾風の如く來る事驟雨の如く剃刀の向
ふ所破れざるはなき宗光の君は勳一等に叙せられ瑞寶
章を賜はりたりと太平の國家慶事多し頃に曰く

秋高し鳶飛んで天に到るべう

議長星隕

落る夜や大星一つ流れ行く

官紀振肅上奏案

肅々と馬に鞭うつ霜夜かな

千島艦事件

りきむ程猶はね返す霰かな

條約廣行案

初雪や靴門内へ入るべからず

停會

風の十日許りは休みけり

●春興

我王の二月に春は立ちにけり　子規
酒もすき餅もすきなり今朝の春　虛子
野も山も神の灯ともる睦月かな　非風

●閑居

我庵は粥の薄きを鶯を　碧梧桐

●初夢を語りあふ家人に對して

初夢やわれには語る夢もなし　半潮

●古河默阿彌其水翁を悼む

其水のもとにかへりし氷かな　弘美

●春興

我王の二月に春は立ちにけり　子規
酒もすき餅もすきなり今朝の春　虛子
野も山も神の灯ともる睦月かな　非風

●閑居

我庵は粥の薄きを鶯を　碧梧桐

●初夢を語りあふ家人に對して

初夢やわれには語る夢もなし　半潮

●古河默阿彌其水翁を悼む

其水のもとにかへりし氷かな　弘美

梅散て鶴の子寒き二月かな　鳴雪
騾木に二月の風の寒さかな　得中
きさらぎや去年の注繩焚く鳥居脇　桂山
琵琶の上水すてる二月かな　桃雨
陽かさ寒さ定めぬ二月かな　松宇
衣更着や頭突き出す家の内　五洲
乞食のそろ〳〵ふえる二月かな　子規
鹿追ふて春日にまわる二月かな　明庵

梅さくや去年の娘のをしうなる　碧梧桐
春風や背だけにあまる去年の松　虛子
元朝や月は陰暦十四日　旭溪
家づとや小原の雨の作り獨活　鳴雪
養父入や牛の匂ひもなつかしき　子規

楊貴妃壽賛

絹でしの豆腐に春のまだ寒し　桃雨

禪寺の紅梅黒き月夜かな　得中
春の野に二日の月の寒さかな　鳴雪
春風に干鱈のぶらり〳〵かな　颿亭
土落ちて蝶の出て行く古井かな　架空

江尻にて

糸遊や海を見越しの三保の松　鶯衣

国立国会図書館　タイトル『筆の命毛』　請求記号 WB12-40

ガラス使用

燕の浮木にむれる春の川　桃雨
陽炎や豆人形の土細工　得中
昔男ありけりそれも朧月　松宇
春雨や雨國渡る女連　五洲

福嶋氏の西比利亞より歸るを待つ

日本の霞目がけて急ぐらん　子規

郡司氏の千嶋へ行くを送る

歸る雁七艘ならぶ舟の上　同

蛙亦貧しく聞かず米處　素香
紅梅や門に彳む琵琶法師　孤松
川下や一日霞の蜆取り　飄亭
雁立つて小川は蛙の月夜かな　架空
陀羅尼品春の日脚の傾きぬ　鳴雪
木曾の奥木曾川細る蛙かな　明庵
燕やぬれ足ならぶ橋の上　古白

陽炎に眼のくらみけり金閣寺　五洲
小式部の衣紋くづすや春の風　古白
梅さくや三の鳥居は去年の雪　飄亭
一のしに御成街道燕かな　非風
振袖に抱て見せたる雛かな　鶯衣

妻におくれたる秋虎がもとへ遣はす

鶯や朝寐を起す人もなし　子規

流れ木のたふり〳〵と春の川　鳴雪
旅籠屋に合ひ宿したる雛かな　桂山
きさらぎやまだ白雲のよしの山　松宇

俗界に足踏み込みし時子規に寄す

折られけり梅に野の名は離れけり　猿男

猿男へ返し

あはれなり大根畑の梅一木　子規

城跡にそぼふる雨の柳かな　霽月
比良は雪唐崎青し初霞　飄亭
松風も村雨もあり須磨の雛　古白
猫の戀掻きあがるやら落るやら　架空

靜岡淺間にて

神垣や香に立つ梅の宮柱　鶯衣

さゝ波や古き都の初もろこ　鳴雪
うらゝかや氷室しみ出る水の色　藪鶯
引き汐や破れ笠被る蘆の角　靜堂
けふあすと久しうなりし餘寒かな　孤松
山里の春は淋しき茗荷かな　非風
鳥啼くや奥山椿水車　飄亭

畫賛

牛の子を牛に負はせて春の川　松宇

旅僧のよしのに出逢ふ彼岸かな　五洲
菅笠に拾ひためたる田螺かな　桃雨
梅が枝に鶯の來て鳴くにくさかな　孤松

竹むらの秋をうしろに浦家かな　得中
山寺の麓を蛙よもすがら　明庵
卒爾にも死ぬも覺悟か雉の聲　碧梧桐

月黑し雜木の束に落し角　桃雨
沖の石に戻りの雁の糞白し　松宇
春風や蟹も蠢めく穴の中　猿男
舟呼ぶや柳から出る海人の妻　古白
二三匹はやかけよりぬ猫のこひ　可全
山里はたゞ山吹の一重かな　飄亭

井のほとり鶯のちよこ〳〵走りけり　古白
玉川の眞中をぬく小鮎かな　非風
わが梅をさかせて京の小商人　碧梧桐
炭竈の中より出たり虻一つ　明庵
蛇籠から四五本出たり土筆　桃雨

淺草や裏は田螺の鳴く處　得中
辻堂に線香絶えぬ彌生かな　藪鶯
埋め殘す濠やむかしの蘆の角　素香
陽炎や傘はり眠る椽のさき　飄亭
新海苔や誰が袖がうら紺ちゝぶ　古白
梅咲くや行盡江南數十程　子規

ふけ行くや花にふりこむ雨の音　虚子
花守の散る時は寐てしまひけり　古白
糸遊や何里のぼりて揚雲雀　明庵
栞戸や手燭にこぼす小米花　藪鶯

戸塚にて

燈を呼ぶや梅の戸塚の夕間暮　弘美

燕のへさきにならぶ汐干かな　飄亭
鹿の角月にうつして落しけり　古白
萍や涼しい種を生初る　得中
朝風や砂に躍る櫻鯛　鳴雪
薄月や墨繪に似たる梅薫る　弘美
鳩になる鷹の眼鈍しむら雀　牛伴

国立国会図書館　タイトル『筆の命毛』　請求記号 WB12-40
ガラス使用

雉の子を追つまくつゝじかな　鳴雪
春の夜に男姿の女かな　得中
春の夜や閨にたてこむ蝶一つ　静堂
松が枝に鳶の巣高し坐禪堂　孤松

鎌倉にて

梅に問へ秩父梶原和田やしき　弘美

蕪の葉に黄ばみを見せて別れ霜　桃雨
大根の花や練馬の里の春　松宇
大佛の眼の下や花曇り　木同
行く春を尋ねて見ばや京女郎　飄亭

句ひせよ仏の小具も梅の花　弘美

畑打のだまつて動く静かさや　飄亭
雉鳴くや焼野に殘る姫小松　五洲
春淺し雪の雨のと冴返る　松宇
山吹に玉川へりの夜明かな　桃雨
崖道や椿ちりこむ海の中　明庵
紅はげた江口の君や木瓜の花　孤松

五洲　虚子　鳴雪　紫影　子規

蜂の巣や屋根ふきかふる大悲閣　虚子
花吹雪狂女の袖に亂れけり　鳴雪
はき溜の草も彌生のけしきかな　紫影
花嫁は笑ふてばかり茶つみかな　子規

朱の鞍や花の吹雪の馬つなぎ

花笑ひ鳥鳴く中を壬生念佛　爛腸
初櫻明星寒き梢より　得中
朝櫻一度に露をこぼしけり　虚子
草餅に菜種の花の黄粉せん　紫影
爲朝の弓弦はづすや春の雨　鳴雪
瓦焼く竈のそはや梅の花　默水

東都八春詞

宮城春霞　大内の伽羅の煙や春霞　飄亭
東叡春雲　大佛や花にもならぬ雲の上　子規
愛岩春雪　淡雪や堪より下は江戸の雨　飄亭
芳原春月　月や臘窓やはつきり影法師　子規
芝山春雨　春雨や松より暮るゝ花の鐘　飄亭
品川春風　春風や干潟に殘る三味の舟　子規
墨江春水　筑波嶺や花の底行く春の水　飄亭
飛鳥春煙　美しき春の夕や人ちらほら　子規

句兄弟

兄　蝶々や女子の道のあとやさき　千代
弟　一人路や蝶あとになり先になり　尺水
弟　蝶々や順禮の子のおくれ勝ち　子規
兄　雲雀より上にやすらふ峠かな　芭蕉
弟　雲雀より上に牛鳴く春の山　飄亭
弟　雲雀程の高さを來たり春の山　子規
兄　春風や三保の松原清見寺　鬼貫
弟　春風や煙横たふ三保の松　虚子
弟　春の夜の三保の松原煙立つ　子規

千賀の塩竈

句兄弟

兄　ならぶ灯は隣か國や臘月　子規
弟　山の灯は京のうしろや臘月　古白
兄　君が代や大根畑に子の日せん　古白
弟　我宿は門松引て子の日せん　子規
兄　梅ちらり〳〵と松の木の間哉　子規
弟　梅ちらり〳〵谷間の山家哉　飄亭
兄　はる〳〵の燕あはれや留守の門　飄亭
弟　時頼の留守にも來たり燕　子規

兄　引き舟にのつて引かるゝ燕かな　子規
弟　歸る帆に燕のせて與謝の海　明庵
兄　思ひ出して又飛び返る燕かな　飄亭
弟　一のしに思ふ事なき燕かな　非風
兄　川上にまづ鶯の初音かな　飄亭
弟　川上に鶯啼て夏近し　鳴雪

ふた子句

海人が家の垣に干したる若和布哉　紫香
石垣に若和布干したる礒邊かな　孤松
若和布干す海人が垣根や風曇る　鳴雪
若和布干す海人が垣根の日和かな　子規
雞の鳴く在所〳〵や花の雲　藪鶯
少しづゝ在所〳〵の花の雲　子規

国立国会図書館　タイトル『筆の命毛』　請求記号 WB12-40
ガラス使用

句合せ　鳴雪作　古白作

左　倶利迦羅の雪やなだれん歸る雁　木曾の山人
右　歸る雁沖白う夜は風寒し　由良の舟人

判云歸る雁に越山の雪ななだれんを思いやりたる殊勝ならぬ処景色大にして面白し沖白き曉夜のさま思ひやらるゝにあらねど先づ先の勝ちにや

左　雪を花に作るつまらぬ事哉　書祢宜
右　菜の花や雪の見ゆる馬の上　黒法師

判云左雪を花に作るつまらぬ事はあれど柚あれど矢張書祢宜の勝ちか

句合せ　鳴雪作　古白作

左　檜扇に招き返さん揚雲雀　東山の姫君
右　踏破る袴の泥や揚雲雀　北野の若殿

判云檜扇に招き返さんとしたる土佐の畫の賛にや侍らん雲雀を取り合せたるは平入道の知らぬ所妙

左　牛の角すぼめて通れ花の中　東野の牛飼
右　馬の尾は結んで花に繋ぎけり　南田の馬子

判云角をすぼめる作意めづらしければ左の勝ちか

左　神垣を鹿踏み破る木の芽かな　飛火の野守
右　旅人の煙草もけふる木の芽かな　不破の關守

判云共にはなれたる作意ながら野守や趣多からん

行く水は行て蚊の鳴く夕かな　青冝
蚊柱や〳〵三十三間堂　古白
夕晴れに花一八のそよぎかな　梅龕
楠の木の倒れながらを若葉かな　牛伴
梅雨の中入靜かなり法華堂　子規

白滝の水簀巻の夏書かな　鼈鷲
只一人遠くはなれて涼みけり　一路
留守の家にくわつと燃え立つ蚊遣哉　五洲
茨の花卯の花まじり風薫る　明庵
夕立にうたるゝ鯉の頭がな　子規

明けやすき夜を禪寺と裏隣　雲月
夕畦や捨てし早苗の二把三把　鳴雪
無住寺に入も行くなり魂祭　桂山
水打つて嵐待たるゝ書院かな　井蛙
夏痩せに泣く淨瑠理の一夜かな　桃雨
祇園會や錦の上に京の月　子規

住吉にとゞもし一つや時鳥　非風
時鳥闇夜の聲はかすれけり　旭溪
鎌倉は雨の中なり時鳥　虛子
押しあふてまた卯の花の咲きこぼれ　子規

木曾

卯の花の咲く間は唯の宿ならず　碧梧桐

国立国会図書館　タイトル『筆の命毛』 請求記号 WB12-40
ガラス使用

武蔵野に横たはりけり天の川　松宇
風鈴の舌落ちてあり今朝の秋　猿男
秋立つや閻扇の裏へ文字を書く　五洲
閏年や蚊なくて淋し墓参り　明庵
秋きらり〳〵野川の夕日かな　瓢亭
木の末に遠くの花火開きけり　子規

送り火や歸りてのぞく持佛棚　虚子
鳴子なるや烏ふりむいて飛んで行く　旭渓
逝水のはてを薄のみだれけり　狙醉
朝立や二百十日の不二おろし　鳴雪
稚き兒の看病して
まゝ事の相手をしたり秋の夕　藪鶯

火をふせて馬にすそする野分かな　桃雨
棺先に蜻蛉を拂ふ奴かな　牛伴
鹿の聲細谷川を渡んでけり　非風
秋海棠朽木の露に咲きにけり　白白
面白う聞けば蜩夕日かな　碧梧桐
我背戸に二百十日の茄子かな　子規

稻妻や底にみだるゝ玉柏　素香
稻妻を潮にまきこむ鳴門かな　孤松
辭世（逃も叶はぬ病を兄弟の親切にほだされて一日も生きのびんと思ふはかなさ）
最う糸やう〳〵とて夏の月　梅龍

空痩せて落つる星あり秋の川　桃雨
鬼灯に書讀む人はなかりけり　蟠松
稻妻や蟇も目をあく椽の下　猿男
天の川天の橋立ほの〳〵や　牛伴
蜩や榎のぞけば滿月夜　六泉
●正誤　人のあと馬も出て來つ露の中　靜堂

岩角や何をたよりに尾花咲く　得中
さま〴〵に烟分れて秋のくれ　桂山
松一木それは淋しき花野かな　素香
うら枯れて草の實こぼれ初にけり　孤松
舞鶴の富士はなれけり秋の空　子規

冗山にさはるものなし秋の空　桃雨
秋の空暮山紫に雨晴れたり　松宇
見上れば曽雲帶びて秋の山　鷲洲
行く秋や蝉上る膝の上　猿男
夕晴や裾野を低う渡り鳥　牛伴
初嵐男鹿の角の太りけり　五洲

道哲の鉦はやみけりきり〳〵す　素香
渡り鳥來たり藪にも畠にも　孤松
中空に鷹のかけ行く野分かな　桃雨
稻妻やくゞけて走る藪の中　梅龍
姨捨や蓬明るき蕎麥の花　仙子

高奴腰鼓茶碗男郎花　可全
南天や野分のあしたはらり〳〵　古白
鹿鳴て麓は奈良のそもしいな　碧梧桐
湖や秋靜かなる瀬田の橋　虚子
人もなし砂ほる丘の秋の風　鳴雪
稻妻の花咲く沖の小島かな　子規

初雁とともにこゆるや不破の關　得中
浮世畫の小屏風見たり秋の夕　桂山
千丈の瀧吹きちらす野分かな　藪鶯
踊りけり月山の端にかゝるまで　靜堂
七夕やはかなき星の空に飛ぶ　素香
宗鑑の生寺かぎる野分かな　子規

桐一葉京の小川を流れ行く　瓢亭
名月や我妻のせて渡し守　古白
名月やさても色々の影法師　種美
手追猪萩に息つく野分かな　碧梧桐
名月や都大路の馬車　子規

名月や杉をはなれて松の上　得中
鵙鳴くや煙にまじる草の家　桂山
蜩や牛に鞭うつ寺の門　素香
呼び聲の高きもあはれ草の市　孤松
人に近く飛ぶ鴉あり今日の月　桃雨
秋風や小牛引きこむ家二軒　子規

初秋の空を見て居る籠の鶴　孤松
稻の穗に尾花かゝなる山路かな　桃雨
つはものを琵琶の泣かする夜長かな　松宇
妻と子を一つまとめや萩の中　蟠松
日金峠
秋風や左は底の見えぬ谷　鷲洲

潮や山倒まに今朝の秋　玉藻
冗山を一本松の野分かな　可全
有明の茶畠青し蕎麥白し　碧梧桐
名月に蜘の巣ふるき軒端かな　虚子
野分して野末の古井水もなし　鳴雪
稻妻や天の一方に花の山　古白

国立国会図書館　タイトル『筆の命毛』　請求記号 WB12-40
ガラス使用

秋風の辻に亂るゝ燈籠かな　飄亭
山寺に鹿のあつまる月夜かな　非風
神棚の燒米こぼす鼠かな　五洲
歸るさを瀬田の長橋燕かな　牛伴

提灯にしるす

足もとへ蟲のなきよる夜寒かな　猿男
鵲やむかしながらの橋もかな　煙霞郎
一つ家の雨の夜淋し高燈籠　鳴雪
稻妻やどこまでつゞく松林　靜堂
長安の枕に近し小夜砧　素香
夜嵐や黑木くづれて鳴く竈馬　子規

葉雞頭あれたる庭の色ならじ　松宇
末枯や鎌倉殿の馬場のあと　古香
萩咲くやいたちのつづく南大門　猿男
墓參り兀山こえて戻りけり　牛伴
百舌鳴くや柿は枯葉の間より　五洲
朝顔は露の命と申さばや　煙霞郎

名月や野川にありく鳥の影　飄亭
秋風や牛に遠磨をのせて見ん　可全
牛部屋も野分のあとの月夜かな　得中
結ひ直す鳴子の繩のたけ長し　桂山
寺あれて鉄鐘のこる野分かな　子規

旅人の無禮を許せ萩の花　[illegible]子
面白し石に名のつく秋の川　六泉
雨空や山のあなたへ渡り鳥　仙子
引冠る五布蒲團の野分かな　鳴雪

身延山に到る途中にて

秋の山人にも逢はで越えにけり　鶯洲

二三匹寐牛かたまる花野かな　狙醉
白鷺の足つま立つる初嵐　秋虎
篝火の谷川下る夜寒かな　明庵
須磨の浦や月に悲しき蜑が顔　霽月
古道にあふ人もなし墓參　[illegible]風
曉のしづかに星の別れかな　子規

人通り竹屋の河岸の夜寒かな　旭陽
單鳴て二百十日も暮れにけり　六泉
雨も風も月もなき夜や高燈籠　旭溪
初秋や雞の子むれる背戸畑　暉吟
乙鳥にはなむけもなき彼岸かな　煙霞郎
大柳散りつくすとも見えざりき　子規

芝浦や霧はつとして安房の山　風亭
今朝見れば淋しかりし夜の間の一葉哉　古白
雁啼くや須磨の浦人藻汐焚く　鳴雪
稻妻の雲をはなれぬ月夜かな　子規
秋高く馬肥えにけり佐野の奥　秋虎

夕空や水田にうつる雁の影　桂山
駕籠かきや月の唐歌うたひ行く　虚子
大名の手植の松やけふの月　碧梧桐
三日月の波にさはるや須磨の浦　可全
傾城と月見るこそ淋しけれ　得中
名月やわれは根岸の四疊半　子規
正誤　芝浦や露はつとして安房の海　五洲

壁一重隣を木曾の砧かな　古香
大根のそばに野菊の盛かな　五洲
膝に來て拜むやうなり秋の蠅　如水
子鼠の槍の柄つたふ夜寒かな　煙霞郎
名月や糸瓜の影は長過ぎる　温

朝顔の垣吹き倒す野分かな　孤松
紅皿にうつす芙蓉の[illegible]かな　松宇
嵯峨の秋腹一はいの雨夜かな　蟠松
三國山一軒茶屋に秋立ちぬ　五洲

神田祭

捨團扇風と化しけり樽天王　子規

秋のくれ何によろこぶ物狂ひ　松宇
雲いろ〳〵二百十日のけしきかな　蟠松
蕣や二百十日の朝を咲く　猿男
稻むしろ奥街道を一目かな　牛伴
秋立ちて蚊は朝顔の垣に鳴く　秋虎
正誤　中空を鷹のかけ行く野分かな　桃[illegible]

国立国会図書館　タイトル『筆の命毛』　請求記号 WB12-40
ガラス使用

露ほろ〳〵鈴鹿は寒き馬の背　暉吟
曳舟や鶺鴒追ふてのぼり行く　明庵
白萩の末は小川の月夜かな　非風
杉暗く鴉鳴くなり秋の雨　子規

富士川舟中

稻妻の來ては碎けつ舟の中　鶯洲

飛びながら螽流るゝ野川かな　狙醉
引裂た雲のあとあり秋の風　桂山
秋の蝶夕日を追ふて石の上　素香

天長節

旭に向くや大輪の菊露ながら　子規

武藏野

穗薄のはてはありけり不二の山　紅於

八月や月になる夜を寢てしまひ　古白
穗薄の皆あちら向く月夜かな　種美
切腹の注進來たりけさの秋　碧梧桐
秋風に糸瓜のちあふ垣根かな　盧子
松明振て瀧のうら行く紅葉かな　鳴雪
峯嵐に夜をはなれたる芒かな　得中

雞頭やはいれば奥は黄菊白菊　桃雨
緣日へ押し出す菊の車かな　子規
菊分けて水汲む老女脛細し　鳴雪
山寺や菊のさかりの十日過　得中
ひや〳〵と菊に更けゝり後の月　孤松
良二千石うわさにすてゝ菊の上　猿男

海蓬佳節倍思親

菊の香になつかしきかな親の顔　五洲

月高し波靜かなり舟行くや否　温
野分して鞍とられけり放れ駒　明庵
三日月や阿波の鳴門の波かしら　非風
白露や芋の葉末に家細し　飄亭
月澄て鎭守の森の踊りかな　可全
なが〳〵と安房の岬や秋の海　子規

あら海の闇はきはなし星月夜　碧梧桐
行く秋を鐘つきやみし野寺かな　狙醉
芭蕉破れて雨風多き夜となりぬ　鳴雪

目黒

杉暗く紅葉見えけり不動堂　蕉隱

沙彌某の病みて死を待つと聞く哀れに覺えて

秋の蚊よこの子ばかりはさゝゞらん　古白

酒の調叡慮にかなふ紅葉なか　蕉隱
燕の歸るや朝の空赤し　桃雨
信濃路や月無き里の蕎麥の花　松宇
赤いのが賣り切れにけり市の菊　鶯洲
菊咲くや市井の隱者鬚一寸　狙醉
人呼ぶや紅葉の宿のきぬかつき　子規

閑迦棚にいけられて咲く木槿かな　猿男
盆過や賣られて通る猿の兒　牛伴
咲くまではむつと閉ぢたる桔梗哉　五洲
松の露竹の露くる筧かな　非風
按摩笛片側町の夜寒かな　笑天
影なくて秋風寒し海の上　飄亭

国立国会図書館　タイトル『筆の命毛』　請求記号 WB12-40
ガラス使用

散る紅葉落花は悲しからざりし　霽月
炭竈に散りこむ峰の落葉かな　非風
芭蕉忌や枯枝の句の鴉啼く　飄亭
面白う波に乗りけりむら千鳥　木同
長松が借着頭巾の寒さかな　可全
横町の時雨出て來る屠屋かな　古白
神主のとまり合せて十夜かな　可全
小夜しぐれ溝に湯をぬく匂ひかな　古白
散る木の葉風は縦横十文字　碧梧桐
傘さして行くや枯野の雨の音　虚子
我馬の懸よりぞしぐれける　旭溪
湖や鐘一つづゝしぐれ行く　狙蝶
湖をかゝへて枯れし尾花かな　猿男
よき事のありともよしや年忘れ　同
前の千本奥の千本の落葉かな　五洲
紅葉ちるや宵の明星きら〳〵と　同
面白う蔽かば泣かん鉢敲　子規
風吹て今年も暮れぬ土佐日記　同

落葉して谷間〳〵の煙かな　木同
瀧壺やさかまく木の葉二千丈　同
塞翁は牛にやのりて年忘れ　可全
煤掃やきのふもけふも雪がふる　同
洛陽の灯おびただしき師走かな　古白
枯菊や馬洗ふ湯の流れ入る　同

仁齋の心になりて冬籠り　猿男
風やさめんとしては牛の夢　牛伴
松一木時に寒し三日の月　五洲
利根川の左右に開く枯野かな　明庵
川一筋夕日に光る枯野かな　非風
うね〳〵と丸山塞し三河道　子規
初しぐれ庭に一株古茶の木　狙蝶
菅笠の阿彌陀が驛をしぐれけり　鳴雪
竹林の上も落葉の夕日かな　得中
寒月や房州舟の足早き　桂山
朝風や鳶行く道の面白き　藪鶯
牛一つ見えてしぐるゝ尾上かな　子規

砂の中に海鼠の氷る小さゝよ　碧梧桐
初霜や吉田の里の葱畑　虚子
風や馴顔出す倉の窓　狙蝶
山茶花や寄附札ならぶ大師堂　無屋
神送り巫にはをしき娘かな　仙子
きそひ打つ五山の鐘や夕時雨　子規

稱名の聲にしぐるゝ野寺かな　鳴雪
しぐるゝや殘燈幽かに詩仙堂　狙蝶
しぐるゝや銀杏にならぶ塔のさき　紫影
風やちらばつて行く野の鴉　得中
歌膝の何に狂ふか桐火桶　桃雨
湖の上に舞ひ行く落葉かな　子規

革足袋の中にひそみし鼠かな　五洲
湖青し雪の山々鳥歸る　子規
三日月の心もとなし多木立　爛腸
風や蒲團かぶれば足が出る　紫影
白濱やどこにかくさん冬の月　明庵
氷りける田面〳〵の朝日かな　霽月

大名の鐘にしぐるゝ御廟かな　五洲
風のはしる音あり初氷　子規
牛鳴くや枯野の中の一つ塚　笑天
我は世をなれは波間の浮寢鳥　爛腸
しぐるゝや故郷遠く老母あり　紫影
風や菜畑の角のとがれとて　明庵

湖を抱て近江の小春かな　鳴雪
鴛鴦や雨のぬれ羽のしどけなき　得中
稻干したあひま〳〵の枯野かな　桂山
猪小屋の河原に殘る寒さかな　桃雨
黒髪も赤城も冬のはじめかな　松宇
出女の聲にふり出す時雨かな　子規

しぐるゝや不破の關屋の板庇　蕪雛
麓路やしぐれて暮れて片明り　靜堂
爐開きやこゝに遣愛の梅一木　素香
よりそへば物思はする火桶かな　桃雨
それ丸の宙を飛び行く枯野かな　松宇
馬立てゝ見返る比枝のしぐれかな　猿男

国立国会図書館　タイトル『筆の命毛』　請求記号 WB12-40
ガラス使用

月薄し日薄し冬の牡丹かな　藪鶯
埋火や灰に物書く雁の聲　井蛙
切炭や片われ月の起り口　得中
河豚汁や門にイむ最明寺　鳴雪
古郷の庭にもありし枇杷の花　仙子
炭賣や其許の身の寒さうな　失名

枯れ殘る荻の下より立つ煙　五洲
凩や荷馬いなゝく不破の關　笑天
南無阿彌陀十夜の月のさし心　爛腸
鮟鱇の口にはら〳〵しぐれけり　紫影
臼になる松もまじれり冬木立　明庵
凩のあるゝが中に入日かな　非風

山の月凩の中升りけり　靜堂
冬枯や茅毘一片の夕煙　素香
しぐるゝや大根かゝる櫨の枝　孤松
大佛を半分ぬらすしぐれかな　松宇
どこ見ても寒し山の根水の上　秋虎
しぐるゝやいつまで赤き烏瓜　子規

金屏の松に風なし冬牡丹　素香
淋しさの雪にもならで寒の雨　孤松
粥にする佛の飯や年籠り　桃雨
燒石にまじる淺間の霰かな　松宇
禪寺に豆腐煮る夜の時雨かな　秋虎

幽靈の圖に題す

柳枯れぬ冬の陽炎白うたつ　鶯洲

吹溜る横町〳〵の落葉かな　飄亭
しぐれたる汐先しるき夕日かな　可全
凩や富士の裾野を吹きまくる　古白
供と馬思ひ〳〵のしぐれかな　碧梧桐
傘借りて八瀬の里へとしぐれけり　虚子
見て隱れ釣する人のしぐれけり　無屋

散る木の葉障子の月を筋違に　霽月
淋しいぞやよ鉢叩をかしいぞ　同
獺の氷を叩く寒さかな　非風
其中に氷る池あり冬木立　同
橋三四水ちよろ〳〵の冬野かな　飄亭
凩の燒けあと寒し江戸の町　同

冬されの干瀉をあさる鴉かな　鳴雪
煤はくや我梅の檐月の窓　同
影法師は蕪村の筆や桐火桶　得中
初冬の梢に高し烏瓜　同
鳥は寐て馬はしぐるゝ夕かな　藪鶯
雨雲の北にかはりて霰ふる　同

枯るゝまで身のやつれけり女郎花　五洲
初時雨汐やく煙細りけり　笑天
炭賣のそろふて出たる峠かな　明庵
狐等の道をつけたる枯野かな　非風
しぐるゝや痩せ馬の尾のあはれなり　飄亭
冬枯の垣根に咲くや薔薇の花　子規

湯淡婆を抱きすくめて冬籠　碧梧桐
どちらからにじりよりたる海鼠哉　同
凩の海につき出す白洲かな　虚子
冬の蠅仁王の面を飛びさらず　同
梅提けて乾鮭提けて年の暮　狙醉
飴賣の鉦叩きくる師走かな　同

放れ駒追ひけり里はしぐれけり　桃雨
反古賣て酒買ふ除夜の男かな　同
榾の火や獨り煮えたつ狸汁　松宇
戞々と竹にとばしる霰かな　同
大寺や鼠のさわぐ音寒し　鶯洲
寒い日のうしろからさす冬野かな　同

冬枯の隣は伊勢の賣家かな　爛腸
髑髏の何を招くぞ枯尾花　同
人見てはかいくぐり〳〵かいつぶり　紫影
殘菊の杖をはなれてしぐれけり　同
寒月や蛸這ひ上る磯の上　明庵
鳥群れて枯野を渡る聲處々　同

国立国会図書館　タイトル『筆の命毛』　請求記号 WB12-40
ガラス使用

元日や親子七人梅の花　鳴雪
住吉は松の名どころ初霞　飄亭
神殿の注繩も動かず今朝の春　可南
抱て居る雞も鳴きけり今朝の春　非風
佛儡師日暮れて歸る羅生門　古白
四方拜其時朝日登りつゝ　子規

岐[illegible]
群峰如劍刺[illegible]
[illegible]斷亂雲中。日[illegible]
龍鬪跡[illegible]蕭[illegible]馬[illegible]
不如歸齋[illegible]八常規
[illegible]古寺鐘傳層樹外。絶[illegible]
[illegible]河山落日紅。欲問虎拏

茗橋老隱曰。前半紀形勝。[illegible]述[illegible]五十里。括盡乎五十六字中。又曰。三十律。以詠古起筆。詩有一段神韵。

一入蘇溪物盡奇。烟霞又養半生痴。雨穿絶壁松根怒。水動巉巖佛座[illegible]。杉檜雲藏名將墓。苔蘚[illegible]美人碑。荒涼滿目向誰說。華表[illegible]頭啼子規。

茗橋[illegible]曰。前聯刻盡入神。余曾寄人在北地。有濤撼巖礁鷲[illegible]。遂無此奇峭。天分所限。可不畏哉。

老樹參[illegible]氣微。一籬[illegible]認柴扉。鶴朝紫府夜應返。雲宿閒窓[illegible]飛。金鼎猶[illegible]丹火。苔紋空鎖釣魚磯。[illegible]若得買山隱。好伴夷齊共採薇。

茗橋老隱曰。一氣折旋。清老無敵。

国立国会図書館　タイトル『筆の命毛』　請求記号 WB12-40
ガラス使用

元日中觀子七人物の花　鳥雪

国立国会図書館　タイトル『筆の命毛』 請求記号 WB12-40

ガラス使用

元日や親子七人毎の花　鳥雪

国立国会
26.7.31
図書館

国立国会図書館　タイトル『筆の命毛』 請求記号 WB12-40

ガラス使用

国立国会
26.7.31
図書館

国立国会図書館　　タイトル『筆の命毛』　請求記号 WB12-40

ガラス使用

3

仏壇説家が

一本を座右にし研精に資せられことを勸告する

る。

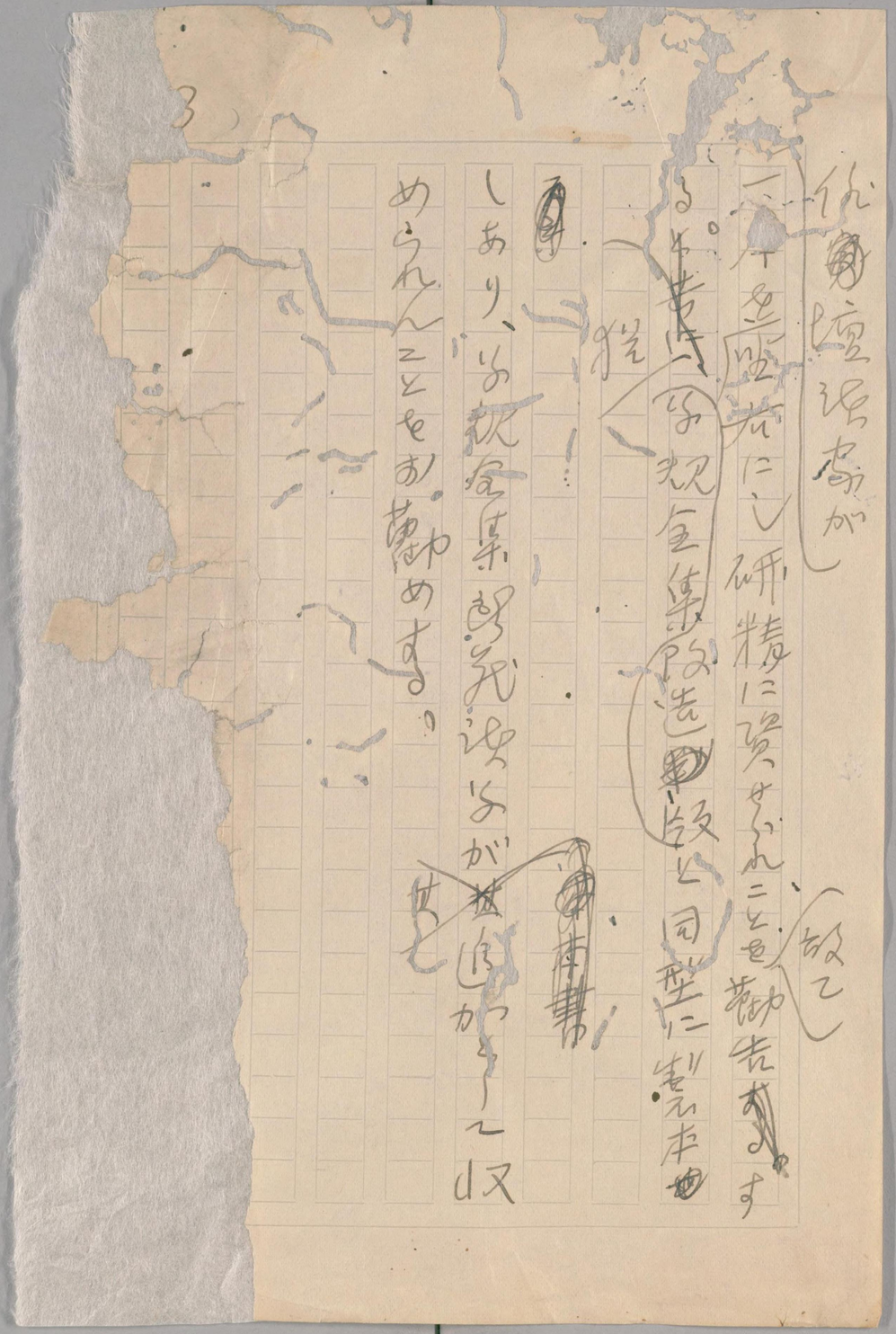
猶

家規全集改造と同型に製本

しあり、家規全集既発説にしが進かつて収

められんことをお勸めする。

故て



国立国会図書館　タイトル『筆の命毛』 請求記号 WB12-40

ガラス使用